
時空の果てへ

まめご

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時空の果てへ

【Nコード】

N9397R

【作者名】

まめご

【あらすじ】

「洞窟を抜けるとそこは異国でした」

リウヒはシシ大学に通う女子大生。夏休みに幼馴染のカスガ（古代オタク）とシギ（エロ河童）と共に宮廷跡を訪れ、一千年前の古代にタイムスリップしてしまった。

その頃、王女リウヒは謀反にて宮廷から逃げ出して、外の世界を旅することになる。

運命の万華鏡は、時空を超えて巡り廻る。輪廻転生、二人のリウヒの物語。

ティエンランシリーズ第三巻。二巻の「海原の彼方」を踏まえつつ、時間軸は一巻の「ティエンランの娘」を辿る形になります。 T I
I N A M Iより転載作品、一部改稿。

序 章 小さな王女

洞窟を抜けるとそこは異国でした。

眩いばかりの光の先に見えた風景に、少年たちは驚きました。

見たことのない建物や人々の衣装。

初めて嗅ぐ、不思議な香り。遠く広がる青い空。

おそろおそろ少年たちは歩き出しました。

そして…。

「聞いているぞ」

リウヒがうつらうつらしながら言うトモキはクスリと笑った。

「半分目が閉じていますよ。今日はここまでにしておきましょうね」
本を閉じて腰を上げた。

「続きはまた明日。おやすみなさい、リウヒさま」

「うん、おやすみ。トモキ」

本当はその手で、髪をなでてほしいのだけど。昔、母さんがやってくれたように唇を額に当ててほしいのだけど。

体が恐怖で震えてしまうから、それは叶わない。トモキも知っているから、やってくれない。

扉の閉まる音がして、静寂が訪れた。

掛布を手繰り寄せて抱きしめるように絡まる。

最近、トモキは寝る前に物語を聞かせてくれるようになった。

もうわたしは十四だ、子供じゃないと反発する気持ちもあるが、兄ちゃんのような人に甘えるのは心地の良いことだった。だから存分に甘えている。

今まで、獣のように神経をとがらせて、周りのどの人間にも心を開かなかった。否、開けなかった。

死にたいほど辛いことがあっても、彼らは助けってくれなかったし、そんな人々に絶望と憎しみを抱いていたから。

トモキは違った。最初入廷してきた時は、また、どうでもよい人間が一人増えたと思ったただけだった。

ところが、この男は散々自分を追いかけまわし、どんどん小言を呈してきた。

王女だからといって怯える訳ではなく、王女だからこそきちんと教育を受けるべきだ、だから責任をもつて授業をうけると叱った。

驚いた。今までそう言う人はいなかったから。仕方なさそうに笑って見てみない振りをしていただけだったから。

その人たちも辛かったのだと今は理解している。三人娘は、ふとした時に礼を言くと、声を上げて泣き出した。トモキを連れてきてくれたシラギは、もっと早くこうすれば良かったと痛々しい顔で言った。ただ傍観していただけのわたしを許してくれとも。

みな、リウヒに無関心だった訳ではない。王の存在が大きすぎて、どうすれば良いか分からなかったのだ。

光はほとんど充ち溢れて行った。わたしは今その中にいる。なんて、幸せなことだろう。

リウヒはクツクツと笑った。そしてそのまま、眠りについた。小さな肩を上下させて。

イーストエンド大陸の南にティエンランという小さな国がある。

三方を山、一方を海に囲まれた美しい豊かな国だ。

大陸側は二つの国に挟まれていたが、おおむね良好な関係を保っていた。万一、攻められる事があるうとも小高い山々が自然の城壁となつて防いでくれる。

一方の海側は、貿易が盛んに行われ港が賑わっていた。が、防衛面は弱くしばしば海賊が出没した。

その海を左手に見下ろす山の中腹に、この国の宮廷がある。山地の形状を生かし傾斜になだらかに這うように建てられていた。

平地から小高い場所に位置する宮廷は、霧の発生する季節になると

まるで雲の中に浮かんでいるように見え、民たちは親しみと誇らしさをこめて「天の宮」と呼んだ。周りは堀で囲まれており、表玄関となる大門はその巨大さで見る者を圧倒する。

宮廷の山裾には、整備された城下町が円形状に広がる。中央の大通りを挟んで四区ずつ、計八区に分けられ、民が住む住宅街、市場、商店街、色町、学問機関がある。

大通りは市街の中心をまっすぐ抜け、宮廷の大門と都の表門を一直線に結んでいた。その両脇を柳の木が行儀よく並べられている。地面はすべて石畳で整備されており、城下と宮廷を守るように白い堀に囲まれていた。

都を離れると、平地が広がり所々に村や町がぽつりぽつりと存在する。平地には町が多く、村は山地や海沿いにあった。

深夜。人々も、家畜も、犬も猫も、草木も眠りについている。

風すら、寝入ったように止まっていた。

宮廷の東宮でも小さな王女、リウヒが物語の続きを夢見ながら寝息を立てていた。

第一章 大学生たち 1

「リウヒー！」

その名前を大声で呼ばないでほしい、とリウヒは舌打ちしながら、振り返った。

キャンパスの芝生でのんびりしている学生たちが、こちらを向いてクスクス笑っている。

すみませんね、大層な名前です。ごめんなさいね、こんな貧弱な人間が。

有名な王女の名前で本当に申し訳ない。

でも、それを付けたのは両親であってわたしじゃない！

「ねえ、リウヒ。聞いて聞いて！。すごいもん手に入れちゃったー」
幼馴染のカスガが、満開の笑顔で笑いながら走り寄ってくる。

さながら少女マンガのように背景がキラキラして、スローモーションでコマ送りしているみたいだ。しかし、リウヒはそんな光り輝く男にぶっすりとした顔で返す。

「あのさあ。やめてくんないかな、大声でわたしの名前を呼ぶの」

「なんで？」

「嫌いだから」

不機嫌な声で答え、紙パックのジュースを啜った。

「いい名前じゃないか。ぼくは好きだよ」

そういう問題じゃない。

「それよりさ、みてみて、これ！ じゃーん！」

効果音付きでカスガが取り出したのは、一冊の薄汚い本だった。

リウヒはしらけた顔で見ながら、ストローを吸い上げる。ズコーと音が鳴った。

「ごめん、全然分らない」

「君は歴史学科だろう。どうして分からないかな」

カスガは鼻を鳴らして嬉しそうに本を撫でた。

「ティエンラン伝だよ。大昔スガタって歴史学者が編集した本なんだ。より史実に忠実に記されている。王女の伝説はほとんどこの本が元になっているんだ。絶版だったんだけどさ、駅前の古本屋で見つけて思わず買った。ああ、ありがとう神さま、ありがとうぼく！ でも今月ピーンチ！」

クルクルと回る。この男のテンションは、ティエンランに関わると上昇する。只今マックス状態だ。

「わーお、カスガ、見事なダンス。そのまま踊ってな。じゃあねー」紙パックをごみ箱に放り込み、踊る馬鹿を背にリウヒは踵を返した。「あわわ、待ってよー」

カスガの手が伸びる。

「夏休みの課題だけど、どうすんのさ。そろそろ決めないとやばいよ」

「わたしも、バイト遅刻しそうでやばいの。夜、カスガんちいっていい？」

「いいよ。じゃあ、十一時頃だね」

手を上げて別れを告げた後、歩を速めた。この時間ならギリギリかほこり臭い風が藍色の髪を揺らす。駅前のビルの谷間から、夕日の断片が見えた。

昔昔、ティエンランという国がありました。

平和で豊かな国でしたが、ある時王の愛人が謀反を起こしました。

王女は間一髪、宮廷から逃げて国を旅することになりました。

しかしその二年後悪政を見かねて、王につく決心をします。

そして海賊や民を引き連れて、セイリユウケ原で宮廷軍と対立しました。

戦は激戦でしたが宮廷は反乱軍の勢いに恐れ、すぐさま降伏してしまいました。

悪い愛人は殺されて、王女は新王となり、民の祝福を受けました。めでたし、めでたし。

この地方でもつとも有名な王女の話。

父はこの話が好きで、リウヒが幼い頃繰り返して語ってくれた。我が家系はその血を継いでいる。そしてお前は王女の生まれ変わりなんだ。藍色の髪と、黒い瞳が何よりの証拠だよ、との余計なおまけ付きで。でも娘に王女の名前を付けるのは、いかがなものか。名前負けもいいところだ。

おかげで、どれだけいじめられたり、馬鹿にされたことか。だってわたしはこの王女が大嫌い。この名前も大嫌い。生まれ変わリなんて冗談じゃない。

未だこの地に執着し、誇りとしている人々も。もう五百年も経つのに馬鹿みたい。だから生粋のジン人に見下されるのだ。

リウヒはぼんやりと電車の扉の前に立って、流れる景色を見ている。地下に入って景色は消え、一面の闇間になった。自分の顔が、はっきりと窓に映る。

王女は美しいことでも知られている。美貌のあまり、その兄が浚ったという逸話が残っているくらいだ。

平凡な顔だな。笑っちゃうくらい平凡な顔だ。

窓に映る自分の顔をマジマジと見つめてそう思う。

今まで、普通に育ってきた。サラリーマンの父と専業主婦の母に囲まれて、高校を卒業し、大学に入学してバイトをしながら一人暮らし。これからも普通に生きて行くだろう。卒業して、就職して、結婚して子供を産んで。絵にかいたような平凡な人生を歩んでいくことだろう。でも平凡でいいじゃないか。そしてカスガが横にいればいい。

ゲンプの駅に着いて降りた。都会はいつも人ごみで溢れている。

「おはようございます」

夕方なのに、妙な挨拶をしながらエプロンをつけて、カウンターに入る。

いつものメンバーが笑顔で挨拶をよこしてきた。

タイムカードをおして、カウンター前に立つ。
リウヒは、CDショップでバイトをしていた。ただ接客だけの楽なバイトだ。問い合わせや商品管理はベテランや社員がやってくれる。客がやってきた。マニュアル通りの薄っぺらい笑顔で手を差し伸べる。

「いらつしゃいませ。お預かりいたします」

「いらつしゃいませー！」

入ってきた客にシギが叫ぶと、他のスタッフも次々と声を上げた。座席に案内しながら、もう少しで休憩だ、がんはれおれ、と自らを励ます。

シギは奨学金を受けながら通う大学生だ。歴史学部に進んだのは別に歴史に興味があるからではない。単に一番楽そうだったから。どうせ卒業してしまえば、全然関係ない所に就職するだろう。ただ、大卒という履歴がほしただけだ。

それでも居酒屋とのバイトとの両立は難しかった。出席日数が足りなくて単位がやばい。

母子家庭で苦勞をかけてきた母には迷惑をかけたくないし、早く社会に出て楽になりたい。

呑気で世間知らずの学生たちに、シギは劣等感のようなコンプレックスを抱いている。

「休憩入っちゃって」

店長に言われて、ぺこりと頭を下げ裏口を開ける。夏の熱気と湿気が体を包んだ。ついでにごみ箱の匂いも。

ポケットから煙草を取り出し、火を付ける。ニコチンの心地よさが体内に沁みた。

薄汚い建物の隙間から、ゲンプの街のけばけばしい明かりと喧騒が漏れている。酔っぱらいの楽しそうな笑い声も聞こえた。

ゼミの課題をどうしようか。

煙を上に吐きつつ、扉に頭をもたせかける。

「何でもいいから、夏休み中に自由研究をやること。個人でもよし、グループでもよし。最も優秀な者には、単位をプレゼント！」

ゴリラにそっくりの教授が調子よく手をあげると、教室からどよめきが上がった。

ネットから適当に拾ってお茶を濁そうとしていたシギは目を剥いた。単位はぜひともほしい。

「あちっ！」

いつの間にか、煙草はフィルターまで焦げていた。

どこかのグループに潜り込んで、ご相伴をあずかるうか。優秀で真面目そうなグループに。それが一番楽で確実だ。そういえば教授に気に入られている奴がいたな。

ポケットをまさぐり煙草を取り出そうとして、舌打ちをした。パツケージの中は空だった。

「カースーガー！ お腹空いた。なんかない？ なんか」

約束通り、十一時過ぎにやってきたリウヒはどかどかと上がりこみ、勝手に冷蔵庫を開けて物色し始めた。伝説の王女というより、小悪党のようだ。

しかも、深夜に一人暮らしの男の部屋にやってきて、第一声が「お腹空いた」なんて、色気がなさすぎる。そんなんだから、彼氏ができないんじゃないか、という正論は勿論言わない。

「一番上に、晩御飯の残риがあるから。チンして食べて」

今日、購入した本から顔も上げずにカスガは答えた。

ティエンランという国はもうない。

五百年ほど前に、隣国のジンに滅ぼされて宮廷も何もかも燃やされてしまった。言語まで奪われた。だから歴史資料は極めて少ない。

今、現代ここはジン国ティエンラン地方になっている。しかし、住む人々の多くは未だこの地を誇りとし、山一つ隔てた国の中心都市に秘かな敵愾心を持っている。高校時代の歴史の先生は特にそれが顕著で、二度に渡るティエンランとジンの対戦に半年を費やした。客観的ではなく、あくまで「侵略された」国の目線でカスガたちに教えた。大人はそれが大なり小なり、当たり前だと思っていたし、子供もそれを信じて育っていく。

カスガたちの通うシシ大学では、失われたティエンラン語「古代語」が、歴史学科の必須科目だ。

また、ジンの信仰している戦の神、雷神イドーラを受けいられずに、古くからティエンランに伝わる太陽神エトを信じている。

ジンの人間は、それを奇っ怪に思うらしい。輪廻転生を当たり前前に考えている人々を。

「りっぱな大人が前世とか生まれ変わりだとか普通に言うのが、すごく気持ち悪い」

友人の生粋のジン人に言われたことがある。

「どうしてさ。太陽は西に沈んで東に昇るだろう。だから人間の魂も一緒なんだよ。死んで西に消えて、新しく東から生まれてくるんだ」

「太陽も地球も単なる天体だぜ。別に消えたりしない、グルグル回っているだけじゃないか」

「いいじゃないか、そう信じているんだから。イドーラみたいに信仰の厚さであの世が決まることの方が、ぼくは不思議だ。なんか強欲な神さまだよね。自分を信じない者を地獄へ落とすなんてさ」

結局、その友人とは喧嘩別れになった。

宗教の考え方の違いも、きつと敵愾心を育てる原因の一つなのだろう。

それでも、上辺だけは大人しく従っている。しかし、そう遠くない未来に抑圧された人々は不満を爆発させて、独立を求めるのではないかとカスガは思っている。

一度目のジンの侵略は、伝説の王女が王に立って七年後の事だ。大
国に攻め入られた小国は、隣国の協力を得て牙を剥き、見事に追い
払った。それに纏わる悲愛と逸話も、王女が有名な一因だろう。そ
の内、ジンは内戦が始まり、他国どころではなくなった。

そして五百年後の二度目の侵略で、ティエンランはあっけなく滅ん
だ。

だが、王家の生き残りは落ちのびて、現在もどこかで生き続けてい
るという。眉つばものだが、この地方の人々はそう思いたいのだろ
う。

実際リウヒの父も、我が家系はその血を受け継いでいるし、リウヒ
は王女の生まれ変わりだと語り、幼いカスガは感動したもののだが、
娘の方は横を向いて顔を顰めた。大きくなって世間に出ると、自称
する人が多くて驚いたものだが。

三つ子の魂百まで。カスガはこの王女と物語に、どうしようもなく
惹かれてしまう。幼馴染はまったく興味を示さず、むしろ嫌ってい
る。そんな彼女が歴史学科に入ったのは、単に

「カスガと一緒にいい」

勉強する意志もへつたくれもない理由だった。

だから、リウヒとは生まれた時からずっと一緒にいる。恋愛感情な
ど持ったことがない。兄弟のいない自分にとって妹のようなものだ。
当の本人は、食べ終わってテレビを見ながら大笑いをしていた。

「この人、絶対ズラだよー」

「リウヒは何しにきたの」

「晩ご飯を食べに来ました！」

「違うだろー。夏休みの課題だろー」

呆れた声が出た。

「夏休みの自由研究なんて」

リウヒはクッションを抱えて寝そべった。くつろぎモード全開だ。

「小学生じゃあるまいし。ねえ？」

「ねえ、じゃないよ。君はどうしたいの」

「カスガはティエンランをやりたいんでしょ」

「すごいね、当たりだ」

その本で、とリウヒが顎をしゃくる。

「適当なのをかいたらいいんじゃないの」

確かに面白い事は沢山かいてあるけれど、それだけじゃ芸がない。しかも適当になってなんだ。この子には探究心つてものがないのか。

「ぼくは宮廷跡にいつてみよう……リウヒ？」

藍色の頭がクッションに撃沈している。まさかと思って覗きこむと、リウヒは安らかな寝息を立てて爆睡していた。

大学生たち 2

「まさか茂みの中に隠れているとは思いませんでしたよ」

トモキがため息をつきながら、リウヒを睨んだ。

「もっと王女としての自覚と憤みを持つてください」

「持っているつもりだが」

「部屋から逃げ出して、裸足で庭の隅に隠れている事ですか？」

今日も脱走は失敗した。リウヒはトモキに襟首を猫のように掴まれ、部屋へと連行されている最中である。

「沓はどこへやったのです」

「ネズミが喜んで担いで行った」

トモキが再びため息をつく。

この人は知らないだろう。追いかけてきてくれるのを待ったために、気持ちを試すために自分がわざと逃げ出していることを。

トモキが追いかけてきて、見つけ出してくれる。それに喜びを感じてしまう。

ああ、この人はまだわたしを見捨ててくれないと安心してしまふ。

多分、ばれたらものすごく怒られるだろうけれど。

「殿下、おかえり」

部屋の中ではカガミがニコニコして待っていた。襟首から手が離れる。

「今日は早かったね。もっとかかるかと思っていたよ」

オヤジの前には茶が湯氣を立てている。控えていた女官たちがクスクス笑った。

「リウヒさまが沓をなくされたそうです。変わりのものを持ってきたただけですか」

トモキが言つと、女官たちはさすがに呆れた顔をした。

「まあ、殿下。あれは中つ国渡りの高価なものですのに」

「わたくしたちが殿下の為に一生懸命選んだものですのに」

「殿下はわたくしたちの事なんてどうでもよいのだわ」

よよよ。泣き崩れる真似をする。

「それはいけない、探してくる」

叫んで扉に走り寄ろうとすると、素早く襟首を掴まれた。

「駄目ですよ。わたしが行きます。リウヒさまは大人しくご勉強に励んでください。それからちゃんとリンさんたちに謝るように」

めっ、とリウヒを睨んでから、トモキはそのまま出て行ってしまった。

カガミと女官たちは苦笑している。

「リン、シュウ、シン、ごめん……なさい」

恥ずかしそうに、拗ねたようにリウヒが言つと、三人娘は再びクスクス笑う。

「これからは、もうなくさないでくださいまし」

「今度なくされたら、三人で泣いて縋りますからね」

「では、新しいお沓を選んでまいります」

ぞろぞろと優雅に女官たちが消えると、カガミののんびりした声が聞こえた。

「さて、そろそろ授業開始といこうか」

授業の終わった教室は閑散としている。その片隅で藍色の髪と茶色の髪がプイプイと言ひ合いをしていた。

「だから。あの本を適当につなげ合わせて、レポートとして提出すればいいってんの。どうせ、教授だってしっかり見ないんだからさ」
「それだけじゃつまらないっていつてるんだ。宮廷跡にいけば何か新しい発見があるかもしれないだろう」

「小学校の遠足で行きましたー。別に何も見つかりませんでしたー」
「ああ、そう。じゃあいいよ。ぼく一人ですから。リウヒも一人

で頑張つてね」

席を立とうとすると、リウヒの白い腕が慌てたように伸びる。

「嘘です！ お許しを、お役人さま！」

カスガの好奇心と知識が頼りなのだ。逃してたまるか。この男は教授にも気に入られているし。

その時、後ろから声がした。

「おれもまぜてもらいたいんだけど」

振り返るとバサバサでオレンジ頭のひよろりとした男が立っていた。同じゼミの生徒だ。いつも一人で、おれに近寄るなオーラを出している、変わった奴。結構モテるようで、何人かの女子が媚びた声をかけているのを目撃したことがある。

でも話したこともないこの男が、分かりやすい愛想笑いを浮かべながら声をかけてきたという事は、自分と同じ目的に違いない。カスガを頼る気だ。

リウヒが憤慨して口を開こうとした瞬間

「いいよ」

本人があっさり承諾した。

「カスガ！」

「人数は多い方が楽しいしね」

ニコニコしている。

「ところで君の名前はなんていうの。ぼくはカスガ・センジュ」

「シギ・ラシオン」

その視線がこちらに向く。

「リウヒ・アテルイ」

ふてくされたように言つと、案の定シギの目にからかいが宿った。

「へえ、伝説の王女さまかよ」

ああ、やっぱり。そうくると思ったのよね。慣れているつもりでも、腹が立つ。

「シギくんてさ……」

「そのシギくんってのやめてくれないか」

リウヒの声にオレンジ頭は鼻を鳴らす。

「なんでよ」

「女にくん付けで呼ばれたくない」

「じゃあ、なんて呼べばいいの」

ため息交じりにいうと

「そんなの自分で考えろ」

腹立ちが二乗になった。なんて奴なんだ。こいつ。

「それよりさ、お前どっかで会ったことないか。どっかで……昔……」

……

シギがマジマジと見てくる。リウヒは目を剥いた。

もしかして、わたしは口説かれているんだろうか。

やめて！ 気持ち悪い！

「ぜ、ゼミが一緒だから、そりゃ見た事はあるでしょう！」

そうか、だからかな、とオレンジ頭は首をかしげている。

次の授業の生徒がそろそろと入ってきた。

「外にでもいこうか」

カスガがのんびりというと、二人も頷いて教室を出た。

あれからなんとなく三人でつるむようになった。

「課題会議」と称してはカスガ宅に度々集まるからだ。しかし、鼻息荒いのは部屋主だけで、シギとリウヒはまったやる気がなかった。話はどんどん逸れて行って、結局は飲み会になってしまう。

取りあえず、夏休みに入ったらここから車で二時間ぐらいの、宮廷跡に行くことだけは決まった。それまでは夏休み前の試験がある。

今度は「勉強会」と称してカスガ宅に集っている。ティエンラン嫌いのリウヒになんで歴史学科にはいったんだと聞いたら、そんなあんたに関係ないと喧嘩になった。

「授業はちゃんとでているのに、さっぱり分からない……」

嘆くりウヒに

「でも君、いつも寝ているだけだったろう。当たり前じゃないか。高校の歴史の時もよく寝ていたよね」

カスガが突っ込む。

この二人は兄妹みたいだな。

シギはシャーペンを手の中でクルクル回しながら思った。
見ていて楽しい。

今まで、他人との関わりは薄っぺらなものだった。この二人といて初めて居心地の良さを感じた。が、楽しければ楽しいほど、母に悪いという罪悪感がわいた。

一度、酔った勢いでカスガにそれを漏らしたことがある。リウヒは横で爆睡していた。

「ぼくは母子家庭じゃないから、よく分からないけど」
缶ビールに口をつけながらカスガは言った。

「息子さんが、楽しめない生活を送っているのは、お母さんにとって嬉しいことじゃないはずだよ」

大切な人が自分のせいでつまらない時間をすごしているのは、むしろつらいことなんじゃないかな。

「それに、今じゃなきゃ楽しめないこともあるしね」

ふんわり笑ったその笑顔に癒された。

「お前、本当におれと同じ年？　なんでそんなに悟りきってるんだ？」

「多分、この子のせい」

クツシヨンに突っ伏して、寝息を立てているリウヒを見る。

「小さい時から一緒に育って、ぼくはお兄ちゃん変わってたんだ。お互い兄弟がいらないから、余計にね。だからすっかりしなきゃって、ずっと思っていた」

藍色の頭をワシワシと撫でた。

「そこに愛は生まれないのか」

からかい口調のシギにカスガは苦笑した。

「兄妹愛しかないねー」

そして今、カスガいうところの妹は、勉強に疲れたのかシャーペンを投げ出して足をバタバタさせている。

「休憩！ 夜食を要求します！ 夜食を下さい！」

「お前、一時間も勉強してないじゃないか。どんだけやる気ないんだよ」

「脳みその栄養は全て消化してしまいました……。カースーガー。ごーはーんー」

へいへい、と部屋の主が腰を上げて、小さな台所に向かう。

「お前もなんか手伝えよ。一応女だろう」

煙草を吸おうとベランダに行きがてらリウヒを見おろす。

「リウヒを台所に立たせちゃ駄目だよ、シギ。死ぬよ」

「ひどい、カスガ」

「本当だつて。ぼくは三回死にかけた。しかも海老アレルギーになった」

文句を言うリウヒを、カスガは無視して何を作ろうかな、と冷蔵庫を見回している。

大学生たち 3

やっと終わりました試験期間！ 今から夏休み、何をしようかな！」嬉しそうに叫ぶ幼馴染にカスガが冷静な声を出した。

「リウヒさ。いいけど古代語、絶対追試だよ」

キャンパスの中はリウヒ同様歓喜の声を上げている学生であふれている。

長期休みの始まりはいくつになっても楽しいものだ。

「古代語なんて、なんで勉強しなきゃいけないのか分かんない。今は現代でしょ」

「昔の人が話していた言葉なんだよ。ロマンじゃないか」

「わたしはロマンよりマロンがいい」

「君の思考回路はなぜいつも食い物に直結するんだ」

宮廷跡へ行くのは、明後日の十時にカスガ宅で集合する事になった。カスガが実家から車を借りて、運転していく。南館からシギが出てきた。

「シギ！ 試験どうだったー？」

リウヒが駆けて行く。どうやら人見知り期間は完全に終了したらしい、とカスガは苦笑する。

自分とリウヒの関係は、他人には異様に見えるらしい。「べつたりし過ぎて気持ち悪い」とよく言われた。小さい時から。事実、カスガに友人は何人かいるが、リウヒはその性格もあつてか、友人らしき人物はいなかった。せいぜい大学やバイトの知り合い程度だ。

それでも社会人になれば、この関係も変わるかもしれない、と思いつつ過ごしている内に、シギが加わり出した。二人は、よく不毛な言い争いをしているが、最近シギはリウヒをからかう事を覚えたらしい。仲がいいんだか悪いんだか分からない。

まあ、なににせよばく以外の人間と関わるのはいいいことだよな。遠くでまたじゃれているように言い合いをしている二人をみて、カ

スガは少しだけ淋しい気持ちになった。

「せっかくカスガと三人で飲みに行こうと思っていたのに。今日もバイトなのー」

「悪いな。おれはお前らみたいなお気楽学生とは違うんだよ」

「そのお気楽学生とつるんでいるのはどこの誰だ。あーあー。つまんなーい。久しぶりに外で飲もうと思ったのに」

「おれがいなくて淋しいんだろ」

「馬鹿。この馬鹿」

「照れるなって」

いつもの如くくだらない言い合いをしながら、リウヒは後頭部に突き刺さるような目線を感じた。振りかえると同じゼミの女子が数人、こちらを睨みつけながらひそひそ話している。あの中の一人は昔、シギに声をかけていた子じゃなかったか。

「行こうぜ。カスガが待っている」

いきなりシギの手が肩に回って、リウヒは仰天した。しかし男は頓着せずに歩きだす。

「な、な、なにしてんのあんた!」

「ちょっとだけ付き合ってくれ。あの子、苦手なんだよ」

シギが声をひそめて言った。耳の近くで囁くように。自分の顔が赤くなるのが分かった。

「ストーリーカー体質っていうの? なんか友達と一緒に集団で押し掛けてくるんだよ。下宿先とかバイト先とか……おい、お前歩き方おかしいぞ」

どうやらパニックになって、右手と右足を一緒に出して歩いていたらしい。

「それに顔も滅茶苦茶赤い……ああ、そうか。男に免疫ないんだ」
「悪かったな!」

からかうような笑い声についとがった口調で言い返す。

「^{はたち}二十歳で男に免疫なくて悪いが。彼氏がいたことなくて悪いが」

「いや、むしろ珍しい」

シギはクツクツと楽しそうに笑い、肩に回している手に力を込めた。体がさらに接近する。そして耳元で低く甘く囁いた。

「リウヒ……」

「ひッ！」

背筋から寒気が一気に広がって、鳥肌が立った。シギの手を振り切つて、呆れた顔をして見ていたカスガに走り寄る。

「お後がよろしいようで」

「よろしくない、よろしくない。全然よろしくない！」

この女たらしが苛める、とシギに向かって指をさすと、カスガはため息をついた。

「あのね、シギ。リウヒは我儘で自分の事とご飯の事しか考えていない、色気のない子だけど、一応お年頃で、男の人には慣れていないような、信じられないけど初な所もあるんだから、あんまりからかわないであげてね」

「それはほとんどわたしの悪口じゃあ……」

「はいはい、しょうがねえなあ」

シギは、相変わらずクツクツ笑ったままだ。楽しい玩具を見つけた、という風にリウヒを見る。慌てて、カスガの後ろに隠れた。

「じゃあ、おれそろそろいくわ。また明後日な」

「うん、バイト頑張つてね」

シギが手を上げて踵を返す。カスガが手を振って見送り、その後ろからリウヒも小さく手を振った。

第二章 宮廷跡 1

東宮の小さな広場で、リウヒは剣を構えてシラギを睨みつけていた。腹ただしいほど隙がない。ただ、剣を右手に持って突っ立っているだけなのに。

「リウヒさまが参られないのなら」

シラギがつと右手を上げた。

「わたしから参ります」

瞬間、リウヒが駆けだす。そのまま真っ直ぐいくと思いきや、左に跳ね下段から上になぎ払った。シラギは微動だにせず、片手で止める。目線すら動かさない。金属音が三度、四度。すぐさまリウヒが飛び退って間合いをとる。

「まだ剣が軽いですね。両手で持ってみてはいかがですか」

ムツとした。しかし素直に両手に持ちかえ、今度は正面から突っ込む。

「足の踏み込みが甘いです。重心も意識してください」

力いっぱい振り下ろしたはずの剣は、ほろろと返される。攻撃している内に息が上がってきた。

汗が滝のように滴り落ちて、口で呼吸しなければ追いつかない。肩で息をしているリウヒを見て、控えていたトモキが声をかけた。

「そろそろ休憩にしませんか」

シラギは無言で剣を下ろす。リウヒも女官たちが待っている長椅子に向かった。

差し出された小布で勢いよく汗を拭う。

「早くわたしも、御前試合の黒將軍のようになりたいものだ」

からかいを含めてシラギを見ると、講師は僅かに眉を顰めた。未だにあの掛け声を根にもっているのだろうか。とリウヒは小さく笑う。三年前、御前試合で圧倒的な剣術を披露した二人は、誰からともなく黒將軍、白將軍と呼ばれるようになった。あの試合をいたく氣に

入ったリウヒに、カガミがニコニコしながら言った。

「今度シラギさんにあつたら、いよつ、黒將軍つていつてごらん。面白いものが見られるよ」

そして実行したら、シラギは戸惑ったような顔をして「ありがとうございます」とうろたえた返事をした。その顔が面白くてリウヒは笑いかみ殺していたが、隅の方でもトモキと女官三人が苦しうに震えていた。シラギ一人が、苦虫を噛み潰したように慄然としていた。

「それにはもつと体力をつけないといけませんね」

「お食事はしっかり召されているのに、おかしいですね」

「トモキさんとの追いかけてで体力はあるはずなのにね」

リンたちも可笑しそうに微笑む。そして温かい茶を注いでくれた。

「そういえば、兄さまは見つかったのか」

宴で声をかけてきてくれた優しい兄は、二日前いきなり行方不明になった。赤茶色の髪に翡翠色の瞳の、美しい兄だった。初めて見たのは例の試合の席だが、その時は試合が終わってすぐに東宮に帰った。父王が恐ろしかったからだ。しかし、父は昔のことなどなかったように、リウヒに無関心だった。

君がリウヒかい。

兄は目線があうように、片膝を折って声をかけてくれた。少し怖かったが、この人に嫌われたくないと思ったりリウヒは、気合いをいれて踏ん張り猫を被った。

ごきげんよう、兄さま。

すると爽やかに笑った。

そう堅苦しくなることないよ。東宮の君たちの追いかけては中々に楽しそうだね。今度わたしも参加させてもらおうかな。リウヒもつい笑ってしまった。

ええ、いつでもお待ちしております。よい隠れ場所をご案内いたしますわ。

わたしの妹は面白い事を言う。

二人でクスクス笑いながら話している様子を、トモキが少し離れた場所で嬉しそうに見ていた。多分内容を知ったら、呆れるだろうが。どうして兄は突然消えたのだろう。誰かに攫われたのだろうか。それともかつての自分のように宮廷が嫌だったのだろうか。そんな気配は微塵にもしなかったけれど。

「スザクまでの消息は分かったのですが、そこからぱったり消えてしまいました」

シラギがため息をつきながら言う。目の下にはうつすら隈がある。きつと激務で大変なのだろう。宮廷の兵を統べる右將軍の責任問題だつてある。すこし可哀そうになった。

「きつと兄さまは、どこかに散歩に行っただけだろう。すぐ帰られるよ」

「ずいぶんと長い散歩ですな」

小さく苦笑したシラギは、ではそろそろ始めましょうか、と広場の中央に歩き出す。慌ててリウヒも剣を取り、その後を追った。

時計を見ると、九時半で慌てた。どうやら目覚ましを寝ぼけて止めていたらしい。飛び起き脱ぎ捨ててあったジーンズに両足を突っ込む。ベッドの中から寝ぼけた女の声がした。

「どっかいくの？」

「昨日言つたろ。友達の付き合い」

顔を洗いつつ、歯を磨き、ケータイを探す。バイト仲間の女はぼんやりとシギを眺めていたが、あたしはもう少し寝ている、と再び布団に潜り込んだ。

「じゃ、鍵はいつもの所に入れといてくれ」

「はい。あ、ねえ。今日も入ってんでしょ」

「ああ、遅番で」

「いつてらっしゃい。また今晚」

手だけが布団の中からひらひらと振られた。

階段を音をたてて降りる。カスガの家まで約十五分、ぎりぎり間に合った。

女友達はもう寝ていることだろう。シギには女友達が複数いる。現代は女の方が強く奔放だ、先程のバイト仲間の女もちゃんと彼氏がいる。そんな中、肩に手を回したくらいで、うろたえまくるリウヒは珍しい存在だった。本当に珍しい。

あの赤い顔を思い出して、シギは歩きながら小さく思い出し笑いをした。

夏の太陽は、まだ午前中だというのにサンサンと照りつけて自己主張をする。数分歩いただけでも、汗が噴き出てシャツを濡らした。

「ああ、来た来た。おはよー」

カスガは、ジーンズにＴシャツ、パーカー姿で、助手席で地図帳を見ているリウヒはカーゴパンツにぴたりとしたシャツを羽織っていた。

「おはよ。早いな、お前ら」

「シギが遅い」

「時間通りじゃねえかよ。ああ、そうか。おれを待ちくたびれていたんだろ」

藍色の長い髪に手を伸ばそうとすると、リウヒは地図で殴りつけようとした。

「はいはい、そこまでにしておいていきますよ」

カスガが運転席に乗り込んで、リウヒが助手席のドアを閉める。シギは後部座席に陣取った。片隅にはトートバッグやらコンビニの袋やらが積まれていた。

「なにこれ」

ビニール袋をガサガサさせながら覗きこむと、コーヒーやらジュースやら菓子袋やらが入っている。トートバッグの中は、使い捨て容器に入った弁当だった。

「リウヒがコンビニで買ってきたものと、ぼくが作ったお弁当」

用意がいいな。シギが感心するとリウヒが歌うように言う。

「旅は能動的じゃないとね」

「旅なんて、大げさなものじゃないけど」

カスガが車を発進させながら苦笑した。

「じゃあ、遠足？」

「遠足だな」

「バナナはおやつに入りますか」

「今どきそんなネタ……」

三人は声を上げて笑った。

車はすべらかに走る。

コーヒー貰うぞ。あ、ジュースとって。ばくお茶がいい。ラジオつけようか。すごい、カスガ。詩吟のテープがあるよ。この車カーナビ付いてないのかよ。時代遅れの親父の車なんだよ。しばらく車内は騒がしかったが、次第に寛いだ空気が流れだした。

カスガは性格どおり気持ちのよい運転をし、リウヒは的確に地図を見ながらナビをし、シギは煙草をふかしながらのんびりとコーヒーを啜っていた。

窓の外は、町中から段々緑が多くなってくる。

ああ、夏だな。

青空に広がる入道雲を見ながら、シギは窓から入ってくる空気を吸った。景色は一気に開けて海が出現した。夏の太陽に水面が反射して、遠く跳ねるように輝いている。

「うわあ……！」

リウヒが感嘆の声を上げた。その顔があまりにも嬉しそうで、思わずシギは見とれてしまった。慌てて、視線を海に転じる。海原は、誘うように波の音を響かせていた。

「ねえ、カスガ！ ちょっとだけ、海に行かない？」

「えー？ 宮廷跡につくの、遅くなっちゃうよ」

「おれも海に行きたい」

後ろからの援護に、一瞬リウヒは驚いた顔をして振り返ったが、味

方を得たとばかりに甘えた声を出した。

「ねー。おとうさーん、お願い」

「わたしを海に連れてってー」

「それか、ちよつと逆いつてスザクにいこー」

「お買い物がしたいのー」

「今、話題のスイーツが食べたいのー」

ヒナのように騒ぎ始めた二人に、運転手は一喝した。

「駄目です！ 今日駄目！」

シギとリウヒはゲラゲラ笑い、再び海に行きたいと合唱した。

「君たちはもう……。仲がいいんだか悪いんだか分からないよ……。ちよつとただだよ。子供にねだられた父親のごとくカスガはため息をついて、ハンドルを切った。

子供のような歓声を上げて、リウヒとシギが海辺に走り寄る。

車を止めた所は遊泳禁止区域で、老人やカップル、小さな兄弟を連れた母親がポツポツといるだけの静かな場所だった。そんな中、はしゃいで走ってゆく二人は非常に目立った。カスガは後ろからついてゆきながら、小さく笑う。まるであの二人は能天気なカップルのようだ。上に「バ」を付けようか。

件の二人は靴を脱ぎ、波打ち際に立つと、何故か仁王立ちになって彼方を見ている。

その斜め後ろでカスガはゆっくりとストレッチをした。手を組んで上に伸ばしながら、リウヒはともかくシギが我儘を言うなんて珍しいと思う。海を見ているその顔は、いつものひねた表情はなく無邪気な子供そのものだった。

リウヒも同じ事を感じていたらしい。

「シギは海が好きなの？」

「ああ、大好きだ」

その視線は相変わらず彼方を見ている。

「海なんて、数回しか来たことないのに、その度に胸がギュってなる。何て言っていいかわからないけど……血が騒ぐってゆうか……」

「もしかしたら、シギの前世は海の男だったかもしれないねー」

カスガの声に二人は振り向いた。

「ティエンランの海軍だったかもしれない」

「この辺を荒らし回っていた海賊だったかもしれない」

リウヒとカスガにシギも笑った。

「以外と漁師だったかもしれない」

あははと声を上げて笑う。

遠くで小さな兄弟がじゃれて弟が泣きだした。母親が兄を怒っている。老人夫婦が手をつないでのおんぴりと散策をしている。高校生のような少年と少女が寄り添って海を眺めている。

「いこうか」

カスガが言くと、二人は大人しく歩き出した。

「ティエンランの海軍って強かったんだろう？」

「うん、元々はすごく弱かったんだけど、白將軍カグラが育て上げた海軍は、近海に名を轟かせるほど強くなったんだよ。ジン国が最初に侵略した時大活躍したし、次の国王ヒスイは……リウヒ、何しているの」

「いくつ入るか、試しているの」

リウヒがカスガのパーカーの襟に石を入れていた。

「止めてよ、重いよ、苦しいよ！」

カスガは身をよじって逃げまとうが、リウヒは石をもって追いかける。その様子をシギは煙草に火を点けて、呑気に見ていた。

「お前ら、本当に兄妹みたいだなあ」

「ちよつとシギ、見ていないで助けて！」

首が締まるー！ カスガの絶叫が浜辺に響いた。

まだ痛いよ。と不機嫌なカスガに、リウヒは首をすくめ地図で顔を隠した。

「ごめん。もつと小さな石を入れれば良かった」

「そういう問題じゃないだろう」

運転手は変わってシギがハンドルを握っている。性格とは裏腹に誠実な運転だった。

「リウヒは免許持っていないのか」

「うん、わたしは助手席専門だから。ナビをしたり、運転手にお茶やガムを渡したり、お菓子を食べたり、居眠りをしたりするのがわたしの仕事」

「じゃ、ガムをくれ」

さつそく注文が入った。

やっぱりこいつはえばりな奴だ。

小さく息を吐き、銀紙を剥いて手渡そうとすると、ハンドルから手を離さずに口を開ける。放り込めという意味なのだろう。素直に手を伸ばして入れると、素早く口が閉じた。逃げ遅れた人差し指がくわえられたまま、ちろり、と舌で舐められる。

「ぎやつ！」

色気のない悲鳴を上げてリウヒは手と身を引いた。勢いで窓に頭をぶつけた。

「リウヒ？ どうしたの？」

カスガが驚いた声を出したが、恥ずかしくて状況説明ができない。

「ななななんでもない！」

シギは、ニヤニヤと嫌らしく微笑んでガムを噛んでいる。

ああ、腹が立つ！ この男はわたしをからかって遊んで楽しんでいるのだ。

悔しさのあまり、リウヒは窓下に拳を何度も打ちつけた。

この馬鹿にも腹が立つが、海で見た無邪気な笑顔と、その喉仏に一瞬見とれてしまった自分にも腹が立つ！

「いいけどさ、あんまり暴れて車壊さないでよね」

「この道は真っ直ぐでいいのか」

「えっ？ ええと、ええと、三つ目の信号を左に入って」

「了解」

海は消えて、また町中に入った。もう少しでティエンランの宮廷跡に着く。ただの山の中腹の、形ばかりの宮廷跡に。

宮廷跡 2

駐車場に車を止めて、三人は弁当を持って歩き出した。世間はまだ平日だからか車は四、五台のみで人の気配もあまりなかった。蝉の大合唱だけが耳につく。

「暑いー」

「お腹空いたー」

テンション下がり気味のリウヒとシギに比例して、カスガは弾むような足取りで歩く。

「早くー。行くよー」

「何であいつはあんなに元気なんだ」

「ティエンラン大好きっ子だから……」

目的の場所は、山の中腹にある。そこまでは果てしなく伸びる大階段があった。黙々と登る。

「あのさ。変な気がしない？」

カスガの声に、リウヒも頷いた。

「昔、登ったことがあるような気がする。なんか早く上に行きたくて、すごく焦っていて、誰だ、こんな階段を作った奴はって思った」「ぼくは、誰かの背中を見ながら、すごく誇らしげに登った気がする」

「おれは分らん」

「小学校の遠足でそんな事を思ったのかな」

「シギは遠足でこなかった？」

「来た。でも全然覚えてねえ」

階段の中ほどで、いったん息を整えて再び足を動かす。

登りきった先は、閑散とした風景が広がっていた。建物の後すらい。木々が生い茂って、大きな公園みたいな所だ。

わたし、後宮の方についてみる。とりウヒは一人で歩きだした。昔、来た時もその場所に惹かれた。山の傾斜にあるにもかかわらず、小

さな島が密集しているような小山の群れで、橋がいつぱいかかっていて面白かった。

一人でずんずん歩いて橋々を渡り、足を止めた。そこは少しだけひらけた所で、下の町がよく見える。そのまま歩を進め、ひらけた場所の先端に行く。

いきなり懐かしい感情が、足先からザアツと広がった。

延々と続く町、その奥に連なる山、そして端に見える海。

この光景を知っている。そうだ、わたしはこの光景を愛していた。

胸が絞られるような、血が騒ぐような変な感じがする。

ああ、それはさっきシギが海を見ながら言っていたではないか。

わたしの前世はここにゆかりのある人だったのだろうか。

「お前、こんな所にいたの」

声がして振り返った。シギがオレンジ色の頭をかきながらやってきた。

わたしは、この場面も知っている。デジャブ？ でも確かに知っている。

心臓が跳ねて、ドキドキし出した。嬉しいという感情があふれてくる。

「いい眺めだな」

横に立って遠くを見る男の顔が、ふと変わった。何かを思い出すような。

「ねえ、何か変な感じがしない？」

リウヒが掠れた声を出した。

「わたしたち、ここで会ったことない？」

そんなはずはない。初めて一緒にここに来た。でも、確かに昔、ここに立って二人でこの景色を見た。遠い、遠い、遙かな昔。

シギが振り返ってリウヒを見る。

「変な事言っつなよ」

その顔は普段の顔ではなかった。痛々しいような、呆然としたような。

「お前が変な事言うから、おれまで変な感じになってきたじゃねえか」

二人は見つめあったまま、動かなかった。

いけないで、と自分の中から声がする。それは泣いていた。泣きじやくっていた。

お願い、わたしの前からいなくならないで。あなたがこのまま、わたしを残して去っていくのならば、一緒についてゆきたい。でも、それは叶わない。恋する男について行く事もできない。全てをかなぐり捨てて、ここを出て行く事はできない。

「あ……」

切なさが溢れ涙が出てきた。胸が締め付けられて、痛い。

シギの片腕がリウヒの腰に回った。いつものからかいの表情はない。切実なほど悲しい顔をしていた。

そのままゆっくりと引き寄せられた。リウヒもシギの背に手を回す。男の片手が自分の頬を撫でる。大切のものを触るように。手は顎へと滑り、静かに上げられた。リウヒが目を閉じる。

ああ、狂おしいほどあなたが好き。

二人の唇が重なった。何度も重なるそれは、次第に深くなってゆく。その時。

「ママ、みてー。あの人たち、チューしてるー」

「こらっ！ ミーちゃん、ダメでしょう！」

ハッと現実に戻った二人は目を見開くと、お互いを突き放すように離れた。少女が母親に引きずられながら、自分たちを見ている。

「えっ……？」

今、わたしは何をしていた？

シギを振り返ると、呆然として自分の口に手を当てている。その顔は真っ赤だった。

先ほどまでの、悲しいような痛いような気持ちはすっかり消え去り、段々とリウヒは混乱してきた。

今、わたしはこの男と何をしていた。キスをしていた。

愕然をへたり込む。

わたしの、わたしのファーストキスが、こんなナンパ野郎と……！
膝を折って座りこんだ放心状態の肩をシギが叩いた。

「おい」

「ぎゃーっ！」

悲鳴を上げて、飛び上がったリウヒはそのままアワアワとシギから離れた。

「お前。そんなに驚くことないだろう！」

「来ないで！　お願い触らないで！」

「何だよ、さつきはノリノリでおれに抱きついて、キスしていたくせに」

「あれは……！」

あれはなんだったんだろう。あの痛いほど切ない気持ち。いかな
いで、と言っていた。ついて行きたいけどここから離れられない、
とも言っていた。

まるで誰かが乗り移ったような。

背筋がぞくつとした。そうだ、あれは自分じゃなかった。他の誰か
だった。じゃなきゃ、誰がこんな男に抱きついてキスするものか。

「とにかく、来ないで、触らないで、あっち行ってスケベ男！」

手を振って叫ぶリウヒに、さすがにシギはムッとしたようだった。

「そんなんだから、男ができないんだよ。可愛くねえ女！」

「なによ」

「なんだよ」

先ほどの甘い雰囲気はどこへやら、火花を散らして二人は睨み合う。
先に折れたのはリウヒだった。腹が減ったのである。

「と、とりあえず、カスガ探してご飯にしよう」

「そして飯かよ。本当に色気のない女だな」

フンと鼻を鳴らしてリウヒが立ちあがり、服に付いていた草を払っ
た。

「シギもリウヒもどうしたのさ。さっきからおかしいよ、君たち」

「別に」

「なんでもねえよ」

本殿跡地の芝生に、レジャーシートを広げて三人は弁当を食べていた。しかし、シギとリウヒはお互いそっぽを向いて、顔を合わせないように座っている。

カスガは怪訝そうにしていたものの、ティエンラン講釈を語りだし、リウヒが相手をしていた。

あれは何だったんだろう。シギは握り飯を口に運びながら、半ば呆然と考える。

先程リウヒを見た瞬間、懐かしいような、悲しいような、嬉しいような感情が広がった。並んで立った時、それをより強く感じた。

ねえ、何か変な感じがしない？

ああ、おれもだ。

わたしたち、ここで会ったことない？

ある。いつかは分らないくらい、遠い昔に。

そしてリウヒと見つめあっている内に、不思議な感情はどんどん膨れ上がってきた。

この娘と離れたくない。でもこいつはここから動けない。おれはここでは生きていけない。

自分の中で声がした。それは悲しく、痛いほどの葛藤を抱えていた。なあ、おれと一緒に来てくれ。おれだけのものになってくれ。お前を愛しているんだ。

けれども、言えない。言えばお前は困るだろう。

体験したことのない愛おしさが溢れ出て、身を引き裂かれそうだった。

気が付けば、リウヒを抱きよせてキスをしていた。

あの時の自分と、リウヒはきつと普通の状態じゃなかった。まるで

誰かが二人の体の中に入り込んで、感情を支配しているような感じだった。
思わず寒気がする。シギは腕をさすった。かすかに鳥肌が立っている。

二人の前世に関係あるのか。

それにしても、腹ただしいのはその後のリウヒの態度だ。まるでゴキブリに対するような態度で自分に怯え、しかもスケベ男と叫んだ。最終的には「ご飯にしよう」。

飯に負けたのかよ、おれは！

シギのプライドは痛く傷ついた。今まで声をかけてきた女は結構いたし、不自由はしなかった。そのおれがゴキブリ扱い。本当に可愛くない、色気のない女だ。

シギは腹立たしい気持ちのまま、握り飯をたいらげ、手についた米を舐めた。

「お握りも、唐揚げも、卵焼きも、お浸しも、お漬物も、全部おいしかった。ごちそうさま」

リウヒが手を合わせると、カスガも手を合わせた。

「はい、ども」

「ごちそうさまでした」

シギが頭を下げる。

「これ、捨ててくるね」

リウヒがゴミを回収して、立ち上がる。

「ねえ、さっき、なにかあったの？」

遠ざかる後ろ姿を見て、カスガがシギを見た。

「なんで？」

「君もリウヒも様子がおかしかったから」

二人とも、心あらずという感じで、顔が赤くて、そのくせ険悪な雰

困気だった。

シギがためらいつつも、つかえながら説明した。

「何か、自分が自分じゃない感じだった。誰かが入り込んだような、変な感じがした。多分、向こうもそうじゃないかな」

「不思議なこともあるもんだね。君たち、遠い昔は恋人同士だったんじゃないの」

「何かしらの理由があつて、離れ離れになったとか。まあ、前世は前世で、おれはおれだけだな。だったら初めてリウヒを見たとき、どこかで会ったような気がしたのも納得できる……」

「え？ なにそれ？」

なんでもねえよ、とシギが首を振った。

「どちらにしても、リウヒにとっては初キスだったんだよ」

「えええ！」

あの子は我儘で色気も可愛げもないが、夢見る乙女な部分も一応は持ち合わせていたらしく、その昔カスガに言ったことがある。

「初めてのキスは、夕日の見える公園で、大好きでたまらない人になりたいな」

それが可哀そうに、こんな所で、こんな男と。

「あいつは天然記念物か」

「そんな人、いっぱいいるよ。むしろ君の女性関係を知りたいね」

「特定の女はいねえよ」

「不特定多数の女はいるわけだ」

あのね、シギ。

「君の女性関係に文句を言うつもりはさらさらないけど、リウヒには遊びで手を出さないでね。傷つけたら承知しないよ」

「頼まれなくても出さねえよ。あんなガリガリで、色気も可愛げもない女」

へっ、とシギが吐き捨てるように言った。

そうかな。結構気に入っているように見えるんだけどな。そう思ったが、口には出さずペットボトルのお茶を飲んだ。

蝉や小鳥の鳴き声がする。古代の宮廷でも、夏になると蝉は大声で鳴いていたのだろうか。

「カスガ、シギ」

リウヒが戻ってきた。

「あっちに下に降りる小道があったの。もしかしたら、駐車場にく近道かもしれない」

「あの長い階段はおりたくねえなあ」

まだ足が痛い、とシギが長い足を上げる。

「じゃあ、時間はあるし、散策がてらその道を行ってみようか」

そして、三人は見事に道に迷ってしまった。

宮廷跡 3（前書き）

今回、ちょっと長いです。すみません（汗）。

宮廷跡 3

「誰だよ、駐車場にいく近道なんていったのは」

「わたしだけど、二人とも賛成したでしょう」

シギとリウヒが睨みあう。

本殿後から、歩きだしたリウヒたちは山の中の小道へと入った。が、いくら歩いても麓にはたどり着かなかった。来た道を引き返した方がいいが、今度は本殿後にも出ない。延々と山道は続いている。

「ケータイは圏外だし……」

「もしかして、これは遭難したんじゃない」

「そうなんですよ」

「ダジャレかましてる場合か！」

シギがイライラと舌打ちする。

ああもう限界。リウヒは足をさすった。大階段で疲れ果てた足は、長時間歩いてジンジン痺れてきている。

「ごめん、ちょっとだけでいいから休憩していい？足が痛い」

情けない声をだして、適当な場所に座り込んだ。ふくらはぎを見るとパンパンにむくんでいる。

「五分だけだぞ」

シギも疲れていたのか、隣に身を投げ出すようにへたり込む。ポケットをまさぐって煙草を取り出した。カスガは一点を見つめている。

「どうしたの」

「なんだろう、ここ……」

二人が座っているすぐ横に、洞窟があった。高さは二メートルぐらいで、横幅は大人四人が並んで通れるくらいの大きなものだった。

「やめてよ、カスガ。まさか中に入る気じゃ……」

洞窟を覗き込む幼馴染の目が好奇心に光っていて、リウヒはうろたえた。先ほどの誰かに体に乗っ取られた恐怖がせり上がってくる。シギが立ちあがって、同じく覗きこんだ。

「あんまり深くなさそうだな」

煙草をふかしながら言う。

「いってみようか」

「おう」

「ちよつと待つて、今、そんな状況じゃないでしょ。どうして、そんな所に入ろうとするの」

「楽しそうだから」

「面白そうだから」

リウヒは泣きそうになった。どうして男子はいくつになっても、こんなしょうもない所に行きたがるのだ。

「お前、怖いならそこで待つてろよ。すぐ戻るからさ」

馬鹿にしたようなシギの言い草にムツとする。だからこいつは嫌いだ。

「嫌だ、わたしも行く」

腰を上げると、カスガのパーカーに掴まっておそろおそろ中を覗いた。

「いくぞ」

三人で歩き出すと、ひんやりとした空気が体を包む。湿気とカビ臭い匂いがした。

「暗いね」

「以外と深いな」

「カスガあ、なんか踏んだ……」

「ぼくの足だよ」

先は真つ暗闇で見えない。洞窟の外の明かりも奥へ進むごとに、どんどん小さくなっていった。それでも三人は取りつかれたように、暗闇へと向かって行った。

入口の明かりがテニスボールほどの大きさになった時。

突然、リウヒは奇妙な感覚に捕らわれた。足が空をかいた思ったら落下したのである。何かに引っ張られるように。

「えっ……。ああっ！」

「どうし……うわあ！」

「うおっ！」

それぞれ悲鳴を上げて、闇間へと落ちて行った。

「痛あ……」

倒れた状態のまま、リウヒは頭を押さえた。したたか打ちつけたが、怪我をしている様子はなくて、ホツとした。

わたしは、どうしたんだろう。洞窟に三人で入って、穴かどこかに落ちたような気がする。ゆっくり目をあげると、意外と近くに丸い光が見えた。

あれ、落ちてないのかな。じゃあ、どうして倒れているんだ。そう
だ、カスガとシギは。

「どけよ」

シギの低い声が下から聞こえる。ああ、無事だったんだ。

「お前の乳がおれの顔に当たってんだよ。早くどけ、この貧乳！」

「ひっ、人が気にしている事を！ 変態！」

慌てて上半身を反らす。

「おれの上におっかぶさつといて、変態よばわりかよ。お前が押しつけてきたんだろう！」

「いいからさ、二人とも早くどいてくれないかな」

苦しそうにくぐもった声が、さらに下から聞こえた。

「ぼく、死にそう……」

「死んでも嫌」

今日の昼餉は、大嫌いな菜飯だった。リウヒは食べる事は好きだが、これだけは好きになれない。青臭くて不味い。誰がこんなものを作り出したのだろう。

トモキが残さず食べるよう注意をしたが、リウヒはツンと横を向い

て拒否をした。

「じゃあいいです」

ため息をついて、トモキが食事を続ける。愕然とした。今までそんな事はなかった。あっさり引き下がった目の前の教育係に、逆に不安を感じた。

呻きながら不承不承、茶碗を手に取る。

「ほらほら、ちゃんと食べないと大きくなれませんよ」

リンが笑いながら言う。シュウとシンも微笑んだ。

「だって、この青臭いのが嫌いなんだ」

一口食べて顔を顰めた。やっぱり不味い。でも全部食べれば、トモキは褒めてくれるに違いない。必死になって、茶で流しながら菜飯をたいらげた。

どうだ、食べたぞ。得意になってトモキを見ると、片手に箸、片手に碗をもって明後日の方を向いている。今日はなんだかおかしい。

「どうしたのだろう。熱でもあるのかな」

リウヒの言を受けたシュウが首をかしげて、トモキの横に立った。

その額に手を当て、もう片方の手を自分の額に当てる。トモキが初めてはつとしたように顔を上げた。

「お熱はないようですが」

「大丈夫か」

心配そうに聞いても、何も言わない。リンとシンが目の前の食器を片付け始める。茶碗もきれいに空なのに、ぼんやりと見ているだけだ。

「すみません、もういいですごちそうさま……」

トモキは一人でフラフラと外に出て行ってしまった。ほとんど手を付けていない昼餉が残っている。

「あっお前、人に食べるよう言っておいて残しているじゃないか、卑怯者！」

思わず叫んだが、無視された。どうしてだ、聞こえているはずなのに。

「どうしたのかしら、トモキさん」

「今日は何かおかしいわねえ」

リンとシュウも不思議そうにその後ろ姿を見送る。

「もしかして恋煩い？」

シンがにやりと笑った。きゃー！ と三人娘は声を上げる。

リウヒがまさかと青ざめた。トモキの関心が、自分でない他の誰かにいくなんて。

「そういえば、きれいな女の人と、よく一緒にお話しているらしくてよ」

「トモキさんもお年頃ですものね」

「温かく見守りましょう。ね、殿下」

「知らないぞ、そんな話！」

リウヒは混乱していた。今まで、一身に受けていた愛情がよそにくのは、寂しくて耐えられない。むしろ恐怖だった。いつの間に恋人ができたのだ。

「相手は、相手は誰なんだ」

「宮廷一の踊り子だとか。わたくしも詳しくは分からないのですが、とにかくきれいな方だそうです」

宮廷の恋愛事情に敏いシンが、空を見ながら言う。

「そ、その女がトモキを誑たぶらかしているのか」

「まあ、殿下。どこでそのような言葉を覚えたのですか」

リンが呆れながらリウヒを見た。

「トモキさんも、いいお年ですもの。恋愛の一つや二つ、あっても良いではないですか。それに、あの人の殿下に対する気持ちは、恋どころじゃございませんのよ」

「殿下が恋をする方は誰なのでしょうね」

シュウがうつとりと言う。

いまいち、恋というものが分からない。リウヒは首を捻る。

「この人と、ずっと一緒に居たいと思うことです」

分からない。トモキか？ でも違う気もする。

「この人になら、ついてゆきたい、なんでもしたい、と思うことです」

分らない。トモキか？ でも違う気もする。

「この人でなければ、嫌だと思うことです」

分らない。トモキか？ でも違う気もする。

頭を抱えたリウヒを見て、侍女たちは

「殿下も、いつか必ず分かるときがきますよ」

とさざめくように笑った。

夏の陽光が窓から入って、娘たちを包み込むように照らした。

光が差し込んでいる。暗闇の中から見る楕円形のそれは、眩しくて目が痛くなった。

「お前ら、怪我ないか」

「うん、大丈夫」

「ぼくも」

おかしい。シギは光の先を見ながら思う。

おれらはもつと先まで進んだはずだ。そして何かに引きずられるように暗闇に転げて落ちていった。どうして、こんなに入口が近いんだ。

光に向かって歩き出す。

「ねえ、こんなに入口近かったっけ」「もつと奥まで進んだはずだけど」

同じような疑問をリウヒとカスガも口に出した。

洞窟を出ると、目の前に赤い土の道が横切っており、草原が広がっていた。遠くに小さく集落らしきものがあつて、その先に山が連なっている。絵本の挿絵のような、あつけらかなとした風景だった。

「え……」

ひんやりとした風が吹いた。空の色が、南国の島のように濃く青い。

所々に雲がぼつかりと浮いている。

「なんで……」

洞窟に入った時は、確かに森の中だった。なんで平地が広がっていで、なんで……。

「街がないの……。てゆうか、ビルがないの……」

リウヒの小さな声がする。

視線を巡らすと、山沿いのはるか左手に白い壁が延々と続いていて、町らしきものであるのが分かった。振りかえって出てきた洞窟を見ると、洞窟と言うよりは洞穴だった。奥に壁が見える。

「おかしくないか」

おれは夢を見ているのだろうか。頬をつねってみたが、しつかり痛かった。リウヒもカスガも呆然としている。

「ここはどこ……」

その時、間延びした動物の鳴き声が聞こえた。弾かれたように三人が振り返ると、ロバみたいな馬を連れた男が、のんびりと赤い道を歩いてくる。変な服を着ていた。レントゲンを撮るときに着せられるような上着に、ゆったりしたズボン。そして帯を締めている。

カスガがその男に駆け寄って、ここはどこかと聞いた。男は驚き、意味不明な言葉を連発しながらロバに乗って駆けて行ってしまった。

「外国人？」

カスガが真つ青な顔をして、戻ってくる。

「今の言葉、聞いた？」

「何ていつていたの、今」

シギは知っている、その言葉を。大学の授業で習った。何を言っていたのかは分からない。でも、知っている。

「こ……」

そのカスガの声はほとんど枯れて、掠れていた。

「古代語だった……」

古代語は、五百年も前にジン国がティエンラン国を滅ぼした時に消滅した。今、現代で暮らす国はかつてティエンランだったが、ジンだ。そして、カスガたちが普通に使っている言葉も、ジン語だ。

ということとは、ここはティエンランなのか。もしかして、ぼくたちは

「タイムスリッ……」

「いやいやいやいや！」

リウヒとシギが声を上げた。

「タイムトラベ……」

「いやいやいやいや！」

再び、二人は必死になって声を上げる。

「ないよ！ あり得ないよ、そんなの！ 映画じゃないんだから！」

リウヒが声を荒げる。悲鳴に近かった。

「とにかく、ここでウダウダしてても、しょうがない。あそこにい

かないか」

シギが顎をしゃくった先は、白い壁が連なる町らしきところだった。

かなり大きい。

「行こう」

「うん」

三人はほとんど呆けながら、よたよたと歩きだした。

歩けども歩けども、白壁は中々近づいてはくれなかった。おおよそ二時間ほど歩いて、ようやく到着したはいいが、今度は門までが遠かった。その白壁は山のふもとを囲むように半円形状になっていて、一つしか門が見当たらなかったのである。丁度、楕円の先端にあつた。

疲労の為に三人ともうな垂れて、下を見ながら歩を進める。唯一の救いは、吹く風が心地よいこと、日差しが緩やかなことだった。空を飛ぶ、鳥たちの鳴き声でさえ、疲れた体には耳障りに聞こえた。

「ああっ！」

大きな門の下についたカスガたちは、今度は思わず叫んでしまった。石畳で整備された町が広がっており、自分たちがいる門から真っ直ぐ大きな通りがある。両側には柳のような木々が、通りに沿って植えられていた。それよりも通りの先に見える建物である。

山の中腹にあるそれは、遠目からでも分かる巨大な城だった。屋根が太陽を浴びて燦然と輝いている。中央にドンと構える平屋造りの建物を中心に、右手に小山が密集しそれぞれに小さな宮が建っている。それをぐるりと取り囲むように楕円形状の細長い建物がある。対する左側は、品のある住宅地のように家がずらずらとならんでふもと近くまで続いていた。こちらもそれらをぐるりと取り囲んで半円形状の建物が立っている。

大口を開けて城を見上げるカスガたちに、門番らしき男がなにやら話しかけてきた。

「すごいだろう。我が国が誇る、天の宮だ」

「こ……こ……ここはティエンラン……なんですか」

「ああ、そうだよ。ようこそティエンランへ」

門番はニコニコしている。自慢の天の宮に、驚愕した旅行者がよほど嬉しかったのだろう。

「カスガ……」

心細そうなりウヒの声に、我に返った。

胸が高鳴る。ぼくは時代を超えて憧れの国にいるんだ。

「ぼくは今、ティエンランにいる！」

そう叫んだ後、カスガはぶっ倒れた。

第三章 古代 1

「ぎゃー！ カスガ！」

リウヒは飛び上って仰天した。こんな訳の分からないテーマパークで、頼りの男が目の前で倒れたのだ。駆け寄って抱き起こすと、その顔は幸せそうに笑っていた。

「ちよつと、起きて！ ねえ、起きてよ！」

シギも不安そうにカスガの頬を叩く。

「ムカつく顔でねてんじゃねえよ、おい、起きろ！」

先程カスガと話していた男が、心配そうに何やら話しかけてきて、しきりに身ぶりについてこいと言っている。

「なんて言っているか分かる？」

「多分……泊まれる所に案内してくれるみたいだ」

カスガの腕をシギが抱えて、リウヒがそれを助けつつ支える。そして素直に男について行った。ぐったりしている体を支えて歩きながら、町の人々が物珍しそうに自分たちを見ている事に気が付いた。

みな古代の民族衣装のようなものを着ている。

ここはテーマパークじゃなくて、民族博物館？それとも、町ごとコスプレイヤーなのか？

いやいや、全てがドッキングした新しいイベント会場か？みんな古代マニアなのか？

ああ、どうでもいいから、早く家に帰りたい。自分の居心地のよい部屋へ。

こんな変な所、もう嫌だ。しかし、カスガは目を覚まさない。

男はある建物に入ると、リウヒたちを手招きした。主人らしき親父に何かを説明し、上に来てと身振りと言う。

一室を開けると、そこは質素な部屋だった。粗末なベッドが三台、中央に小さなテーブルとイスが二つ。シギがベッドの一つにカスガを横たえる。男は笑顔で一言二言言つと、そのまま出て行こうとし

た。

「あ、あの！ ありがとうございました！」

リウヒが頭を下げると、シギも下げた。男は一瞬びっくりしたが、いいてことよ、という風に手を振ると、扉を閉めた。シンと静かになる。

「ああ、カスガ……」

相変わらず、笑顔で伸びている男の頬を撫でる。

「しばらくしたら、起きるだろう。それよりもさ、ここ、どこだと思っ」

シギの顔色も悪い。蒼白だった。

「き……巨大テーマパーク？」

「そうだよな。どっかの国のテーマパークだよな……」

二人は窓に走り寄ると、焦ったように首を巡らせる。通りには娘の二人組や、男が歩いている。子供が団子になって声を上げながら走って行った。みな、リウヒたちのような格好をしているものは一人もない。古代民族衣装だった。

遠くに見える城は、相変わらず存在感を放ちながら鎮座している。それは歴史の教科書で見たティエンランの宮廷復元図とよく似ていた。

「ちょっと懲りすぎだよな」

言葉も古代語、衣装まで徹底している。入場料もいらなかった。すごくお金はかかってそうな所なのに。

「でも、やっぱり変じゃないか」

テーマパークにありがちな、作り物めいた感じが全くない。アトラクションもない。第一、このホテルのそっけなさといったらどうだ。忠実すぎるだろう。どっかの国ならどうして言葉はティエンランの古代語なんだ。それにビルや現代の建物が全くない。

「あの洞窟で、なにが起こったんだ……」

「入って行った時は、大分奥に行つて、何かに引っ張られるように落ちた」

「目が覚めたら、お前の貧乳がおれの顔に当たっていた」

リウヒがシギの頭を思い切りはたいた。気にせずシギは続ける。

「洞窟をでたら、この訳の分からない外国に来ていた」

「古代の衣装、建物、宮廷、町並み、言葉」

「カスガはティエンランにいるって叫んだ」

「ああ、もう、頭がパンクしそう！」

藍色の長い髪をかきむしって、リウヒが悲鳴を上げる。

「おれ、ちよつと外に様子を見に行ってみる」

シギが窓から離れる。

「えっ、あつ、ちよつと、おいて行かないでよ」

「お前はカスガの横にいる。すぐに戻るから」

そのまま、戸の向こうへ出て行ってしまった。

「カスガあ……」

よろよると、ベッドに寝ている幼馴染の元へ行く。カスガは呑気に寝息を立てていた。

ここは、本当にティエンランなんだろうか。そう思う方が自然な気がする。

ではわたしたちは、時空のはてへ飛ばされたのだろうか。

リウヒは頭を振る。

まさか、そんなはずはない。今まで平凡に生きてきて、事件らしいことも体験しなかった。普通の生活を普通に営んできた。大勢の中に埋没した一人だ。

ゲームやマンガや映画の世界では、選ばれた人間だとか特別な能力をもった主人公が、過去に行って世界を救ったり、大活躍をしたりする。

でも、わたしたちはそんな大層な人間じゃないんです！ ただの子大生と、古代オタクとナンパ野郎なんです！ だから家に返して！ 頭を抱えて、足をばたつかせたりウヒはほとんど気が狂いそうだった。

「リウヒ？」

「カスガ！ 気が付いたの？」

ガバツとベッドによると、目を開けてぼんやりと幸せそうな声を出した。

「とても楽しい夢をみたよ。リウヒとシギと三人で、ティエンランにタイムスリップしたんだ。あの宮廷を実際に見られたんだよ。すごく嬉しかったんだけど、そこまでしか覚えていない」

「そうだよ、これは夢だよ！ 現実にはあり得ないもんね！」

「どうしたの、リウヒ。顔が怖いよ。それにここはどこ……」

リウヒは男に連れられて、ここに来た事を説明した。今までグルグル考えていた事も全部。

カスガは黙って聞いていたが、その顔は歡喜に輝き始め、飛び起き窓に走り寄った。

仁王立ちになって、しばらく停止した後感動したように体を震わせた。

「ああ、やっぱりここはティエンランだ！」

再びひっくり返ろうとする幼馴染を、リウヒは慌てて揺さぶる。

「やめてえ！ また別の世界に飛び立ってしまったわね！ 落ちて着いて！ 落ちて着こう！ いや、まずわたしが落ちて着け！」

「あわわ、痛い！ 痛いよ！」

「お前ら、なにやってんのお！」

帰ってきたシギが仰天し、慌ててリウヒとカスガを引き離す。

「ごめん。ちよつとパニックになっちゃって……」

咳きこむカスガの背中をさすりながら、リウヒが申し訳なさそうな顔をした。

「どうだった、外は？」

シギは首を振る。

「ここはティエンランだ。テーマパークなんかじゃなかった」

自分と同じ、現代の格好をしている者は一人もいなかったし、水道や電気、交通機関もない。井戸から水を汲んでいた。片言の古代語でここはどこかと聞いても、帰ってくる返事は同じだった。

「じゃあ、タイムスリップしたってこと……？」

リウヒが呆然としたように言う。

窓の外から鳥の鳴き声がする。顔を上げると、空が夕暮れに染まっていた。

「あの洞窟に行ってみようぜ」

また三人で飛び込めば帰れるかもしれないだろう。シギが言つと、リウヒも頷いた。

「帰らなきゃ」

「明日にしようよ。今、むやみに行つて道に迷つたらさらに大変な事になるかもしれないよ」

「だけど、おれはバイトがあるんだよ。遅刻なんてしたら店長に怒られる」

「何時からなの？」

「六時」

「もう六時だよ。うまいこと現代に帰れたとしても間に合わないよ」カスガがケータイをしまいながら言った。

沈痛な沈黙が広がった時、リウヒの腹が鳴った。グューキュルルと飯を催促している。

「いや、その、あの、生理的欲求が」

シギとカスガは絶句し、それから同時にため息をついた。

「今はお前のその呑気さがうらやましいよ」

「リウヒはどこにいてもリウヒだよね」

「どこに座つてもいいって」

取りあえず下に降りて、ヒゲの親父と流暢な古代語で話していたカスガが二人の元へ帰ってきた。どうやらここは宿屋で、一階は飯を食べたり酒を飲んだりする所、二階は宿泊場所となっているらしい。「お金がないっていったら、簡単な手伝いをしてくれたら大丈夫だ

つて。飯を先に食えっていつてくれた」

「ここは親切な人が多いね」

感心したようにリウヒが言う。宿に連れてきてくれた門番といい、昼間、外でここはどこだと聞いた人たちも確かに親切だった。

「豊かな国だからね。住んでいる人たちも余裕があるんだろっね」

「あんまり信用するなよ。うまい話にや裏があるってゆうから」
ヒゲ親父がなにか話しかけながら、飯を持ってきてくれた。

「美味しそう！」

リウヒが歓声を上げる。

ホカホカの白いご飯に、野菜がたっぷり入った汁、分厚い肉と漬物、そして蒸した芋だった。

「いただきます！」

猛烈な勢いで平らげてゆく。その顔はとてつもなく幸せそうで、まるで子供のようだ。

親父はびっくりして見とれていたが、なにか言うと笑いながら奥へ引っ込んでいった。

「なんて言っただんだ」

「そこまで喜んでもらえるなんて光栄だつて」

シギとカスガも箸をとる。滅茶苦茶にうまかった。素材がいいのか、腕がいいのか、それともよほど腹が減っていたのか。

「科学調味料が一切はいつてないからね」

「無農薬なんだろうね」

見事にたいらげた三人は、その後台所を手伝った。慣れないことだらけだったが、リウヒはともかく男二人は要領と器用は良かったので親父に重宝されていた。

そして、風呂に戸惑った。風呂場は、ある程度のブースのような間隔で、木板で仕切られており、カーテンみたいな布が付いていた。其々にタライが一個ずつ置いてある。勿論シャワーなんてものはなく、シャンプーやリンス、石鹸もなかった。浅いタライに湯を張り、その中に入って糠袋をつけて体を洗っていく。歯ブラシもない。塩

を指に取り、直接歯に擦りつける。

全てを終わらせ部屋に戻ったシギたちは、ぐったりと疲れていた。

「ドライヤーも、化粧水もない……」

「テレビも、パソコンもない……」

せめてパジャマに着替えたい、とリウヒが泣きそうな声で言う。

「あつ、そうだ。カスガ」

走り寄って、赤い顔してその耳に何か囁いた。

「売ってないよ。この時代の人はそんなものはいてないしさ」

「わー！ わーっ！」

真つ赤な顔して、手を振るリウヒにシギがニヤニヤした。

「もしかして、お前パンツはいてないの」

「だって、だって、お風呂に入って新しくないのをはくの、嫌だもの！」

「それはおれに襲ってくださいっていつてるんだな」

「どうしてそうなるの！ この変態スケベ男！」

「はいはい。もういいよ」

リウヒがベッドに潜り込もうとして、今度はそこで暴れ始めた。

「あああ、もう！ 髪が乾いてないのに、寝るのは嫌！」

「なんで？」

「決まってるでしょ、傷んじゃう」

女の子は大変だね。男でよかった。シギとカスガは顔を見合わせた。ふと、ポケットに手をつ込んだ。ケータイを見ると、十一時を回っていた。電池はあと二つしかない。

「おれ、ケータイの電池切つとくわ。もったいないしな」

すると二人もごそごそとケータイをとりだして電源を切った。

煙草を吸おうと、パッケージを取り出す。窓辺にいくと、ふときな臭い匂いがした。視線を巡らしたシギの目が、驚愕に見開く。

「どうしたの？」

「きつ………宮廷が燃えている………！」

「ええっ！」

「うそっ！」

カスガとリウヒも窓辺に走り寄り、三人で身を乗り出した。

昼間、その圧倒的な存在感でシギたちを驚かせた宮廷は、天に昇るような炎を上げて燃えていた。

「リアルだ……。リアルすぎる……」

リウヒが、目線をそらさず呆然と言った。

古代 2

大きな音をたてて扉が開き、リウヒは瞬時に目を覚ました。あの老人が来たと思ったのである。枕の下に用意していた別珍の袋を素早く左手で掴むと、低い声を出した。

「誰だ」

「トモキです」

薄布が捲くられて、青い顔をしたトモキが息を弾ませていた。

「謀反が起きました。ここから逃げます。急いでください」

驚いている暇はなかった。急いで別珍の袋を帯下に差し込む。二人で部屋を飛び出した。

「どこに向かうんだ」

「城下へ！」

叫び、走るトモキの後を必死になってついてゆく。外にでて、息を呑んだ。本殿が燃えている。炎が絶叫するように、天に舞う。まるで紅い巨人が喜んで踊り狂っているようだった。

いきなり、地響きのような音が聞こえた。思わず振り返ったリウヒは声を上げ、立ち止まってしまった。

本殿が崩れた。紅い巨人は、調子に乗って足を踏みならす。

トモキに促され、再び走り出した。正門をくぐりぬけ、長い階段を降りる。足が縛れそうになるのを堪え降りきると、そこは蜂の巣を突いたような大騒ぎであった。みな、一様にどこに向かえばいいのかわからず、どうしたらいいのかも分からず、大声で叫びながら右往左往しているだけだ。下端の者たちだった。

「外へ！ 城下へ避難せよ！」

リウヒが叫ぶ。彼らはうるんな目で自分を眺め、それから弾かれたように大門へ向かって走り出した。夢中で走っている内に、息が上がり始めた。気が付くとトモキがいない。

立ち止まろうとした瞬間、ものすごい勢いで上から掴まれた。一瞬

息が止まって、体が恐怖に震える。身をよじって暴れると、後ろからトモキの声がした。

「暴れないでください。今落ちると死にますよ」

猛然と走る馬の上に押し込められたリウヒは、安心したが密着する体で悪寒が止まらない。そのまま、馬は真っ直ぐに大通りを走って行った。

城下の野次馬を蹴散らして、トモキは馬を走らせる。途中、不思議な衣を着た三人組を曳きそうになった。

「あっ！」

彼らは泡を食ったように、声を上げて逃げ惑った。一瞬で遠ざかる。トモキを見上げると、今まで見たこともない必死な形相をしていた。怖いくらい真剣な顔だった。

この人のそばにいれば、わたしは大丈夫。

しかし、その心とは裏腹に体の震えは止まらなかった。

夜が明けた。都から大分と離れて、トモキも安堵したのだろう、馬を歩に変えた。

が、リウヒはそれに気が付かないほど、苦しかった。震えが酷くなっている。息苦しい。ほとんど肩で息をしていた。

トモキが馬を降りて手綱をとった。とたんに息苦しさは消えた。呼吸が楽になる。

その代り、悲しみがじわじわと広がってきた。トモキは好きだ。大好きだ。暗闇に閉じこもっていた自分の手を引いて、光の中へ導いてくれた。ものすごく感謝もしている。だけど、体が拒否をする。しかし、それをどういっていいのかわからずに、黙って下を向いているしかできなかった。

ふと、後ろを振り返った。

美しい天の宮は消滅している。ただ黒い煙が、立ち昇っているだけである。

「宮が……」

リンたちは無事なのだろうか。カガミたちは、シラギは。昨日の昼は、あんなにのんびりしていたのに。リンたちと、恋の話をして笑っていたのに。

馬の速度が上がった。トモキが手綱を引っ張っている。

「これから、どこへ向かうのだ」

「シシの村へ」

トモキがリウヒを見上げて、にっこりと笑った。

「ぼくの生まれた家へ」

「生きててよかったー。マジで死ぬかと思った……」

リウヒがまだ言っている。カスガは動悸が未だ止まらない。ほとんど一睡も出来なかった。

昨夜の火事をよく見ようと大通りにでたカスガたちは、ものすごいスピードで突進してきた馬に轢かれそうになった。まるでトラックが突っ込んできたような迫力に、ちびりそうになった。慌てふためいて逃げたものの、馬はそのまま走り去っていった。

だけど。

ベッドに胡坐をかきながら思う。

あの火事は、ジン国の戦のものではない。それならば、この町も焼かれているはずだ。そこでカスガは愕然とした。

ここは、いつの時代のティエンランだ。憧れの国にいる事に浮かれて、一番大事な事を忘れていた。

火事。謀反。間一髪逃げた王女。

「ねえ、馬に乗っていた男の人、カスガにそっくりだったよね」

「あのスピードで、よく男の顔なんて分かったな」

「わたし、動体視力はいいんだ」

「世界に自分とそっくりの……おい、カスガ！ どうした！」

喘ぐように、カスガは呼吸していた。喉がヒューヒューとなってい

る。

顔色を変えて駆け付けた二人に、苦しそうな声を出す。

「ねえ、リウヒ。昨日の馬には、男一人だった？」

「えっ？ ええと、ええと……うん、もう一人いた。二人乗っていた」

「そのもう一人は、どんな人だった……？」

「ええっ？ どんなつて……」

「どんな人だった！」

ほとんど吠えるようなカスガに、リウヒは驚いて身を引き、シギが庇うようにリウヒの前に腕を出した。

「落ち着けよ、お前どうしたんだよ」

「……な、長い髪だった。多分女の子だと思う。男の人に抱きかかえられていた」

「リウヒだよ……」

シギとリウヒはきょとんとして、目を合わせた。わたし？ とリウヒが自分を指す。

「違う。王女だよ。ぼくらは伝説の王女とすれ違ったんだ」

突然カスガが絶叫して、突っ伏した。シギとリウヒは飛び上って、ヒッシと抱き合った。

「あああ、もう！ ケータイで撮っとけばよかった！ ぼくのバカバカバカ！」

「カスガ、カスガ。落ち着いて」

「あの速さで撮れるわけないだろう。下手したら轢き殺されるところだったんだぞ」

二人の声も、カスガには届かなかったらしい。突っ伏したまま両手で頭をポコポコと叩いている。

しばらくたって、ようやく我に返った。

「ごめん。ちよっと興奮のあまり……」

「うん、びっくりした。色々と」

「おれも」

だけどさ、とシギがいぶかしむ。

「あれが王女とは限らないだろう。ただ、今の時期に宮廷から逃げたっただけで」

「いや、教育係のトモキって人が一緒に馬で逃げたんだよ。王女の兄的な存在で、その成長に一役買ったんだ。後に、初の民間出の宰相となる。トモキの弟が、これまた……」

「カスガ、話がずれている。昨日の馬に乗っていたのが、トモキと王女だったわけ？」

「そう」

「じゃあ、カスガはそのトモキにそっくりってこと？」

「そう……なるのかな。ぼくはちゃんと見たわけじゃないから、分からないけど」

「おれも全然分からなかった」

もしかしたら、カスガの遠い前世かもしれないねー、とリウヒが笑う。

「さてと。朝飯くって、帰ろう」

シギが立ちあがって伸びをする。

「そうだね。早く帰らなきゃ」

リウヒも腰を上げた。

「なんで帰るのさ」

同時に二人が振り返った。うるんな目でカスガを見ている。

「今から面白くなるのに、なんで帰るの」

「帰るよ！ 当たり前でしょう！ わたしたちの住む所は、現代であって古代じゃないでしょう！」

「おれも、おれの生活があっちにあるんだよ！ 学校もバイトもあるし、母親だって向こうにいるんだよ！」

じゃあ、二人で帰ればいい。とカスガが腕を組んで、どっかりとベツドに座り込んだ。

「もう、カスガ。我儘言わないでよ。帰ろうよ」

ほとんど泣きそうな声でリウヒがカスガの襟を掴んで揺さぶったが、

動かない。

「ねえ、お願い」

動かない。

「ほつとけよ。いこうぜ」

突き放すようにシギが言つて、リウヒの手を引いた。

「じゃあ、いくからね。本当にいくからね」

「うん。いつてらっしやい」

さすがにリウヒはムツとしたらしい。ツンと横を向くと戸の向こうへ出て行つた。

数秒後、ものすごい勢いで帰ってきた。

「どうして、一緒にこないの！」

「ぼくはここにいていつたろう。早く行きなよ。シギをまたしているんだろう」

「カスガあ……」

「向こうに帰ったら、ぼくの両親によろしく言っておいて」

「もう知らない！ 馬鹿！ 馬鹿カスガ！」

涙をためて、走って行ってしまった。

窓からのぞくと、通りで泣いているリウヒの肩を抱きながらシギが何かしら言っている。本当にこうして見ていると、あの二人は恋人同士みたいだ。中々にお似合いじゃないか。そのまま歩いて行つた。どうやら朝食を取ることを忘れているようだ。あのリウヒが。

カスガは伸びをして、深呼吸をした。空気がおいしい。夏真っ盛りだというのに、纏わりつく湿気がなくてカラッとしている。

朝ごはんを食べて、その辺を探索しよう。飽きたら、宿の親父を手伝おう。

弾むような足取りで、階下に向かう。

あの二人は、きっとここに戻ってくる。現代に帰れずに。何となくだが、確信に近かった。

何をやっても無駄だった。二人で走ってみても、立ってみても、ジヤンプしてみても、後ろ歩きで歩いてみても。やけになってスライディングまでしてみた。

ただ、服が泥だらけになっただけだった。

「やっぱり三人そろわなきゃ、無理なのかな」
「多分」

洞窟の中で、疲れ果てて座り込んでしまった。シギも壁にもたれて
いる。

カスガの馬鹿。

腹ただしいような、泣きそうな悲しみが胸を刺す。あんなカスガ、
初めてだった。生まれて初めて拒否された。

「おい、血が出てるぞ」

その目線をたどると、腕に擦り傷ができて、血が滲んでいた。

「ああ、多分唾でも付けときゃ治る……」

と、シギがスタスタとやってきて、リウヒの目の前にしゃがんだ。
腕をとって、いきなり舐めた。

「な、なにをするの！」

顔に血が上るのが分かった。手を引こうとしても、びくともしない。

「大丈夫だから！ 後で洗えばいいから！」

「ああ、こら、暴れるな。擦り傷甘くみていると、膿んで痛い目み
るぞ」

「えっ……」

それは嫌だ。しぶしぶ、腕の力を抜いた。

シギの舌は、自分の腕を味わうようにゆっくりと舐める。奇妙な感
覚が体を駆け巡った。

「んっ……」

声が出た。男の口は半分開いていて、舌が出ている。白い肌の上を
這っている。

それは大層色気があって、リウヒの顔は赤くなった。心臓がドキド

キして止まらない。

「あつ……、や……」

うおおい、なんて声を出しているんだわたしは！ 思わず目を閉じてしまう。すると、舌の感覚はますます鋭くなって、奇妙な感覚もますます強くなってきた。

「なに？ お前、感じてんの？」

目を開けると、シギがこちらを見ていた。例のからかいの目で嫌らしく笑っている。今度は恥ずかしさに、頭に血が上った。

「馬鹿！ そんなんじゃない、ちよつとびっくりしただけで！」

「へえ」

腕を振り切ると、今度は素直に離れた。

「あの、ありがとう……。ねえ、どうしようもないから、とりあえずまた宿に戻ろう？」

「だな」

立ち上がると、リウヒに手を差し伸べた。

「何？」

「助け起してやろうってんだよ。親切心の分からない女だな」

「すみませんね」

素直にその手を取る。引つ張られて立ち上がり、二人は歩き出した。手を繋いだまま。

わたし、なんでこの男と手をつないで歩いているんだろう。からかっているのは分かっているのに、なんでいつものように怒れないんだろう。

空が遠く青い。ピールルルルと鳥が鳴きながら香氣に旋回している。

多分、疲れてもうどうでもいいからだ。朝ごはん食べそくなって、お腹がとつてもすいているし、好きでも何でもない男と手を繋いでいることくらい、腕を舐められた事くらい、どうだっていい。

心の隅っこに小さく芽生えた甘い気持ちは、無視することにした。

古代 3

「お帰り」

疲れ果てて宿に帰った二人は、カスガのその姿を見て絶句した。さつそく古代の衣を着て、時代に馴染んでいる幼馴染にリウヒががった声を出す。

「なに？ その恰好。馴染み過ぎて気持ち悪い」

「ありがとう。褒め言葉として受け取っとくよ」

ゲンさんが、お下がりをくれたんだ。君たちの分も貰ったから、着替えたら？ と上を指す。この男は、自分たちが帰れないことが分かっていたのだ。しかも誰、ゲンさんって。腹が立ったが、今日はもうあの洞窟にいく元気はない。今夜何とかカスガを説得して明日、また行こう。何より、この泥だらけの服を脱ぎたかった。

「いたせりつくせりで悪いね」

皮肉を言ったつもりだったが、カスガはニコニコしている。

部屋の中には、二着の服が並んでいた。それを広げて、じっくり観察する。昨日、今日と見た限りでは、男女でどうやら服が違う。ヒダの入った長いスリップのようなものに、長着を巻きつけ襟を左が上になるように左右を合わせる。そして帯を締めるのが女性。

男性はスカートではなく、ゆったりしたズボンのようなものだ。後者は一緒である。

どちらにしても綿でできていた。帯は紺と濃い黄色だった。

「おれはこれだな」

シギがさつさと服を取ると、シャツを脱いだ。いきなり裸の上半身が出現して、リウヒは口から心臓が飛び出そうになった。細いが筋肉がしっかり付いていて、均等が取れている体だった。

「なに見てんだよ」

「いつ、いきなり脱がないでよ！」

慌てて、自分の分を取って隅に移動する。服を脱ごうと手にかけて

振り返ると、シギはリウヒに気にする事もなくベルトを外そうとしていた。急いで顔を背ける。

どうしようか、トイレで着替えようか。いや、臭い。

風呂か。いや、清掃中だった。

ここで着替えるしかない。

「こつち向かないでね」

言いながら、勢いよくシャツを脱ぎスリッパを被った。モソモソとブラを外す。ささやかな胸だが、なんだか心もとなくて不安になる。長着を巻きつけカーゴパンツを脱ごうとして、ふと自分はパンツをはいていなかったことを思い出した。

わたし、もしここで暮らすことになったら、ずっとノーパン、ノーブラなんだな。侘しい気持ちになりながら、帯を締める。丈はかなりの長さで、踝の辺りまでであった。シャツとカーゴを畳んで、振り向くと、シギがストレッチをしている。どうやら、こちらは見ないでいてくれたようだ。

「靴はないのかな」

「多分、身分の高い人しかはかないんじゃないの。取りあえず、下に行こうか」

「うん」

歩き出そうとして、裾が纏れて蹴躓き、したたかに膝を打ちつけた。

「痛……」

「なにしてんだよ」

「すごく歩きにくい、これ」

リウヒは滅多にスカートをはかない。ましてや超ロングスカートなんてはいったことがない。

踝までであるこの丈は、歩きにくくて仕方がない。

「蹴るようにして歩けば？ ウエディングドレスを着た時、蹴るようにして歩いたって女友達が言ってた」

実践してみると、確かにその方が歩きやすかった。しかし、女友達ってなんなんだ。あんたには既婚者の女友達がいるのか。胸がチリ

ツとしたものの、何も言わなかった。

下に降りると、カスガが髭親父と談笑しながら台所で豆のさや抜きをしていた。

「ああ、二人ともすごく似合っているね」

嬉しそうな顔に再び腹が立ったが、もう言い返す気力もない。シギも同様らしく、

「なんか手伝う」

と台所に入って行った。リウヒも後に続いた。

夜、二人は必死になって、カスガへの説得を続けたが、頑固なこの男は首を縦に振らなかった。

「ぼくは、ここに残りたいっていつてるんだ。あの王女の上意の礼を、見てみたい」

「それは二年後なんだろう。それまでここにいてゆうのかよ」

「現代っ子には辛すぎるよ。わたしたちのすむところは、あっちなんだよ」

話しは堂々巡りで中々、終着点が見えない。ついにリウヒが泣きだした。

「お願い、カスガ。明日、一回だけでいいから、一緒にあそこに行こう」

しゃっくりをあげながら、ベッドによじ登ってカスガに抱きつく。その体にカスガの手が回った。なんだか甘い恋人同士のように見えて、シギは思わず嫉妬してしまった。抱きつくことはないだろう、抱きつくことは。カスガも腕まわしてんじゃねえよ。

「でも、やっぱりぼくはここに残りたいんだ。外の世界に出た王女をこの目で、実際見られるチャンスだし」

「明日で無理なら、もう諦めるから。シギもそれでいいよね」

「しょうがねえな」

それよりも、早く離れろってんだ。胸がむかついて気持ち悪い。

「分かったよ」

カスガがため息をついた。

「明日、一緒にあの洞穴へいこう。でも、もし帰れなかったら、二年間ここにいます。それでいいね」

「うん。ありがとう、カスガ」

嬉しそうな声をだして、リウヒが離れた。顔を洗ってくる、とそそくさと扉の向こうへ消える。ちらりと見たその顔には、涙の跡はなかった。あいつ、ウソ泣きを使っていたのか。シギは笑いだしそうになって、慌てて口の中を噛んだ。

女って怖いー。

一方の幼馴染にだまされたカスガは深刻な顔をしている。

「リウヒがあんなに気弱にいうなんて、初めてだ」

痙攣する頬を隠すため、煙草を掴んで窓際にゆく。最後の一本。

煙を深く吸いながら、ふと昼間の事を思い出した。洞窟で、腕を舐めた時に上げたリウヒの小さな声。妙に可愛らしくて、つい欲情してしまった。そんな場合じゃないだろうと正気に戻り、軽口で誤魔化したものの、なんとなく離し難く、手を繋いで宿に戻った。いつもはうるさい女も静かに黙っていた。

この部屋で着替えた時。その後ろ姿をじっくりと眺めた。勢いよくシャツを脱いだ裸の背中とはなまめかしく、細いながらも腰はなだらかな曲線を描いていた。胸は見事に貧乳だったが、中々に小ぶりで可愛らしいと鼻の下がのびた。

リウヒが振り返る直前、ストレッチをする振りを見ると、見られていた事に気が付きもせず、「靴はないのかな」と無邪気な質問をしたのに微笑ましさを感じた。

おれは、あの子を気に入っているんだろうか。いやいや、今の状況がおかしいから目につくだけだ。第一、シギの好みはポチャ系だ。細い女なんて固いだけで全然柔らかくないじゃないか。そうだよ、異様な状況だからただ、あいつが目立つただけだ。

一人納得して、吸殻を携帯灰皿にしまった。

翌日、再び洞窟内で知恵の出る限り頑張ったが、やはり無駄だった。
「ああ、もう嫌！」

泥だらけになったリウヒが頭をかきむしり、座り込んだ。

「もついい。わたしもここで暮らす」

「馬鹿、何言ってるんだよ、お前、自分の親や心配している人がいるんだろ」

「だって、帰れないじゃん」

「それは……」

それでもシギは気になる。母は心配しているだろう。バイトは、大学の単位は。

「なんとか現代と連絡が取れたらいいんだけどね。ケータイは圏外だし……」

本当にこの古代で生きていかなければいけないのだろうか。

想像がつかない。でも、帰れない。諦めるしかなかった。

「宿に帰ろうぜ」

その声は、自分でも驚くほどあっさりしていた。ほとんどやけっぱちといっていい。

「となると、君たちは古代語を習得しなきゃいけないね」

カスガが嬉しそうに言う。うげっ、とシギとリウヒは首を絞められたような悲鳴を上げた。

「いつまでも、ゲンさんにお世話になっている訳にいかないし、他でもバイトを探そうよ。実践学習、能力もアップ、金も入る。一石三鳥じゃないか」

踊るようなカスガの後について歩きながら、シギとリウヒはがっくりとうなだれた。

「ドナドナでも歌いたい気分だ……」

「思いのほか、思いのほかでした……」

第四章 都の生活 1

記憶というものは、匂いとともに思い出すのかもしれない。

トモキに連れられてその生家に入った瞬間、懐かしい匂いがリウヒを包んだ。

それぞれの家がつ、独特の匂い。

「あ……」

わたしは以前ここにいたことがある。

ここに住んでいた。

そうだ、ここは帰りたくて仕方なかった場所だ。

嬉しさもつかの間、記憶は連鎖するように、思い出しくなかつたことまでやってきた。

闇闇。老人の顔。耳にこびりつく笑い声。

あの手、あの感覚、あのおぞましさ。

幸せな気持ちは瞬時に消え、ねっとりした闇が足元から這い上がってきた。

かあさんの顔を見ても、心配そうなトモキの声も聞こえなかつた。

「トモキ、もう寝たい……」

夕餉の後そういうと、子供部屋に案内された。粗末な寝台が二つ、小さな小さな寝台が一つ。

ああ、あれはわたしの寝台だ。毎朝、にいちゃんを起こした。トモキはにいちゃんだったんだ。

「に……」

寝台を整えているトモキの背中に手を伸ばした瞬間、その腕に汚い黒いものが付いているのを見て、リウヒは息を呑んだ。汚れているわたしは汚れている。にいちゃんに触れない。

「リウヒさま。大丈夫ですか？」

心配そうに覗きこむトモキに、慌てて眼をそらして蒲団に潜り込んだ。お休みなさいませと声が聞こえたが返事をしなかつた。

帰りたくてしかたのなかった場所は、苦痛の場所になってしまった。古い記憶は鬼火のようにリウヒを取り囲み、じわじわと苦しめていった。ついには熱まで出た。あがいても、あがいても、闇の中に引きずられてゆく。

助けて。誰か助けて。

それでも、ふと目を覚ました時、トモキやかあさんが横にいた。誰かに優しく髪をかきあげられた。トモキの手。かあさんの手。

その日も、顔に張り付いている髪を誰かの手がそつと拭ってくれた。にいちちゃんだ。安堵して薄目を開けると、その背は部屋を出ようとする。

不安になった。置き去りにされる、そんな感じがした。フラフラする体を無理やり起こし、壁に伝いながら後を追う。

「まずは知ることが大事。そう教えてくれたのはカガミさん、あなたですよ」

外から馬の蹄と、トモキの声が聞こえる。まさか。

「リウヒさまを頼みます」

「うん。頼まれた。行っておいで。無事を祈っているよ」

カガミの声が聞こえた。なにを言っているんだ、馬鹿オヤジ、勝手に頼まれるな！

「どこにいくのだ」

息をするのもしんどかったが、精一杯の声を振り絞ってリウヒはトモキを睨みつけた。

戸口に立っているリウヒを見て、トモキは顔色を変えた。

「お前はわたしをおいて、どこに行くつもりでいる」

行かないで、わたしを置いてどこかに行ってしまうな。

トモキは聞いてくれるはずだ、だってわたしを一番に思ってくれている。

しかし、その思いは裏切られた。

「ここで待っていてください」

馬の首を巡らせてトモキは叫んだ。

「必ず戻ります」

そのまま、こちらを振り向きもせずに馬を駆けて行ってしまった。砂煙だけがあとに残った。

そんな。呆然と見送っていたリウヒはズルズルとその場に座り込んだ。カガミが慌てたように母を呼ぶ。

そんな、まさかトモキがわたしを置いて、どこかに行ってしまうなんて。

古い記憶が、闇が、また底からゆっくりと這い上がってきた。

思考とは関係なしに、後から後から溢れるように。

わたし、古代で生活するなんて思ってもみなかった。

リウヒは宿のおかみさんに頼まれて、市場へお使いにいつている最中である。

あれから数日が経った。宿の髭親父、ゲンさんは事情を説明すると屋根裏部屋の部屋を格安で貸してくれると申し出てくれた。二階の部屋に比べると狭く天井も低いが、ちゃんとベッドは三つあり、小さなテーブルもあった。

古代語はカスガの超がつくほどのスパルタ教育のおかげで片言だけは話せるようになった。

「祭りに行きます……行きました？」

「学校に行きます……行きました？」

「違あーう！」

にわか講師は手でバーンと机を叩いて怒鳴った。

「いいかい、古代語は失われたティエンラン語といわれているけど、厳密には違うんだ。この大陸は元々全ての国で、古代語を話していた。だけど、小国が集まって形成されたジンだけは独自の言語が発展していったんだね。だから今の時代、古代語はティエンラン、クズハ、チャル力で話されいている。まあ、一千年後は全てジン語に

なっっちゃうんだけど……」

「先生、熱弁しているとところをごめんなさい」

「今日はこれ以上覚えられません」

しかし、講師の話は続く。

「ティエンランは太陽信仰だけど、それはこの地が農耕民族だからなんだ。太陽は西に消えて東から生まれる。だから、ぼくたちが当たり前前に考える輪廻転生という発想が生まれた。太陽神エトという存在は後世のもので、今現在はまだ「天」としか言わない。つまり天イコール神なんだね。収穫を祝う民の歌の中でも「おてんとさまにいのろかな」ってゆうフレーズがあるんだよ。ちなみにはつきり太陽神エトが確立されたのは、これから百年後の飢饉と伝染病のせいなんだ。なにか継る物を形作りたかつたんだろうね」

「先生、止まってください」

「もう脳みそ限界」

それでも、何を話しているかは理解ができるようになった。シギは早速よそへバイトにいつているし、カスガはゲンさんのお気に召したらしく、宿の仕事を手伝っている。賃金ももらっているようだ。そしてリウヒは、ゲンさんのおかみさんから色々な事を教わっている。自分の壊滅的な料理の腕に呆れたおかみさんは、そんなんじや嫁の貰い手がないよ、と悲しげに首を振った。そして、この娘を教育する事が己の使命だと感じたらしい。徹底的指導をされている。現代でも、めったに台所を手伝ったことなかったリウヒは、時代を超えて花嫁修業をしていた。

白菜と人参と芋と葱と鶏肉。頭の中で何度もくり返す。メモはできない。この時代、紙は貴重品で庶民には手の届かないものだそうだ。市場への道へ折れようとして、いきなり名前を呼ばれて振り返った。カスガが、真っ青な顔して立っている。

「どうしたの、カスガ。そんな怖い顔して」

しかし、幼馴染は古代語をまくし立てている。なんでこんな所にいるんだ、あの家で待っているって言っただろう。

「なにを言っているの？ おかしいよ、ちょっと……」

その腕に手をかけると、カスガは驚いたように身を引いた。そしてリウヒをマジマジと見て、違う人だと言った。

「馬鹿な事……」

その顔を覗きこんだリウヒの顔も、青ざめた。

違う。この人はカスガじゃない。短いと思っていた髪の毛は後ろで括られている。

「あ、あなたは、誰？」

我ながら間抜けな質問だと思いつつも古代語で聞くと、トモキ、と返ってきた。心臓が飛び跳ねた。

じゃあこの人は、王女の教育者で、わたしたちを馬で轢き殺そうとした人か！

男は申し訳なさそうに礼をすると、早足で去って行こうとした。が、兵らしき男たち数人に取り囲まれ、あつという間に連れ去られてしまった。

「なにあれ……」

周りの人たちも、呆然としてそれを見送っていたが、何事もなかったように日常に戻った。リウヒもしばらくぼんやりとしていたが、再び歩き出した。

トモキは王女と逃げたはずだ。なんで都に戻って来たんだろう。わたしを誰と勘違いしたんだろう。王女？ まさかね。リウヒは頭を振る。伝説の王女は、超美人だ。間違われるはずはない。カスガに聞いてみようか。いやいや、下手に聞いたらあの男の事だ。王女とその一行をストーカーしたいとか言い出すかもしれない。だけど、本当にカスガそっくりだった。

市場へゆく足を速める。早くお使いを済ませて帰らなきゃ、おかみさんが待っている。

「子守りですか？」

おかみさんは、にこにこして頷いた。知り合いの家が、子守りを探

しているから、行ってみないかと言う。裕福な家だから、お手伝いさんは別にいるし、家庭教師もいるそうだ。

中々に楽そうではないか。リウヒは了承した。

「リウヒがベビーシッター？」

屋根裏部屋で。カスガが笑いを噛み殺しながら酒を注ぐ。シギも猪口を口に付けながら苦笑している。

「どんなところなの、そこ」

裕福な商家で、子供の数は五人。その子供たちの遊び相手をすればいいそうだ。

「シギはうまくいつてんの？」

昼間は別々に行動をする三人は、カスガの古代語講座が終わった後にいろんな話をする。テレビがない分、とにかく盛り上がる。こんな時間を過ごしていると、現代でカスガの家でつるんでいたときみたいだ。

お父さんとお母さん、元気かな。会いたいな。ふと思った。会えなくなると、無償に恋しくなる。

「……だから結構種類が少なくて……おいこら、リウヒ！ おれの話聞け！ 自分から振つといて、なんだその態度は！」

いきなり首に手が回って、引き寄せられた。

「ぎゃー！ ごめんなさい！ 乙女にヘッドロックをかまさないでー！」

「この部屋のどこに乙女がいる！」

「本当に君たちは仲がいいよね」

「カスガ、見てないで助けて！」

「はいはい。ぼく、もう寝るから。あとはお若いお二人で。おやすみー」

「いやいやいや、カスガ！ ……ちょっと、どこさわってんの、

工口河童！」

「何だと、この貧乳娘！」

どこからか、犬の遠吠えが聞こえた。ティエンランの夜は更けてゆ

く。

夜明けとともに、起きて下に行く。井戸に水を汲みにゆき、かまどに火を入れる。

朝一番のカスガの仕事だ。現代に帰ることを諦めてから、数日が経った。リウヒもシギも、この時代に徐々に慣れつつあると思う。それにしても、現代では当たり前のことが、今では不思議に思う。水は蛇口をひねれば出てきた。火はガス栓を押せば付いた。電気もスイッチをつければついた。今や、井戸に水を汲みゆく。火は火打ち石でおこす。夜はロウソクの灯りが頼りだ。とにかく体を動かさなければ、何もできない。

宿の一階は酒場も兼ねており、旅人だけではなく地元の間人も一杯飲みに行ってくる。町中に独立した酒場もあるがシギ曰く「女が歌っていたり、舞台上で小さなショーとかもあって、宿よりはちょっと敷居が高い感じ」だそう。

シギは酒屋でのバイトをしている。結構色々な所に配達に行ったりして地理に詳しい。たまに酒をもらってくる。

リウヒは、ベビーシッターの仕事を始めたが、どうも家庭教師の男と反りが合わないようだ。

「大学生でさ、すつごくわたしを見下してんの。年下のくせに！」

わたしも女子大生だったの！」

鼻息荒く文句を言っ、飲めない酒をあり、うえーと顔を顰めた。宿の扉を開けて外に出ると、いい天気だった。遠くに焼け焦げた宮廷の残骸が見える。

それは、青空の下ではやけに痛々しく思えた。

「おれたちの天の宮が、あんな姿になっちゃって」

「あ、ゲンさん。おはようございます。あの宮廷の中は、どうなっているんでしょうね」

勿論、知っているが、おくびにも出さない。

「国王はご無事だそうだが、今はシヨウギさまが政治を代行されているらしい」

王族はすべて亡くなられたそうだ。ゲンさんは顔を歪めた。

「でも、上が誰になっても、おれたちの生活は変わらねえよ、さあ、仕事だ」

微笑んで、カスガを促す。

変わるんだな、これが。宿に入りながら、心の中でほくそ笑む。

カスガは全てを知っている。なんだか自分が神さまになったみたいだ。上からものを見ているような優越感が心をくすぐった。

ぼくは歴史の傍観者なんだ。今現在、起こっている出来事、未来に起こる出来事を知っている。なんて気持ちの良いことなんだろう。

この時、カスガは気付いてなかった。自分たち三人も歴史の一部として、古代で生活している事を。

都の生活 2

宿の食事を済ませると、リウヒは食器を台所に下げて、外に出た。バイト先の商家は、高級住宅街にある。大通りを歩いていると、否応なく宮廷の黒い残骸が見えた。修復工事はすでに行われているらしい。かすかに木を打ちつける音が響いている。

目的地に近づくと、憂鬱な気分になってくる。面倒を見ている子供たちは可愛い。十歳の少女を筆頭に、コロコロとリウヒに懐いてくれる。名前も覚えた。少女二人は、キキとネネ。少年たちは上から、ラン、クジャク、タイ。奥さんも、お手伝いさんのシゲノさんも良い人だ。ただ、ハヅキという家庭教師が嫌いだった。大学の授業との兼ね合いなのだろう、来る時間は日によって違う。だから、心の準備ができないのだ。

物静かな少年なのに、なぜかリウヒにだけきつく当たる。あからさまに冷たい、見下したような態度を取る。

わたし、何かしたかな。心当たりがさっぱり無いんだけどな。ため息をつきつつ、家の門をくぐる。

「こんにちは」。リウヒです」

すると子供たちが転げるように、歓声を上げてやってきた。可愛いなあ、もう。思わず、ほほ笑んでしまう。

「違うよ、リウヒ。まだ朝だからおはようございます、だよ」

「今日は、庭で遊ぼうよ」

ちびっ子たちに囲まれて、手を引かれながら庭に出た。広い庭園は木々がざわめき、色とりどりの花が咲き誇っている。

小さな手が射す方向のものを古代語で答えてゆく。

空。花。椅子。分からない。木。子供？ 違うよ、ぼく、タイだよ。一斉に笑う。

「あのね、リウヒにご本を読んであげようと思って」
えらく立派な本を持って、キキがやってくる。専門書かと一瞬びび

ったが、どうやら童話集らしい。ふつくらした手が、文字を辿りながら、拙い声で読み上げてくれる。胡坐をかいたリウヒの足の中にタイが座り込み、キキを中心に団子になった。リウヒと子供たちは朝の陽だまりの中、庭の片隅で物語の世界に入って行った。

どれほど時がたっただろうか。

「みなさま。お勉強の時間です」

低い声が聞こえて、リウヒたちが振り返ると、家庭教師のハヅキが立っていた。相変わらず冷たい目で、自分を睨みつけている。

来たか。今日はまた随分早いお時間で。

リウヒも負けじと睨み返す。少年は鼻で笑って子供たちに言った。

「早く、こちらにおいでなさい。そんな女の近くにいと、馬鹿が移ってしまいますよ」

「馬鹿で悪かったなあ！ 馬鹿っていうほうが馬鹿なんだから！」

思わず、現代語で怒鳴ってしまった後、慌てて口を押さえた。

子供たちは一瞬ぼかんとして、感嘆の声を上げリウヒを取り囲んだ。

「すごい、リウヒ！ それジン語？」

「今、なんていったの！？」

ジン国からの旅人、ということにしているが、現代語は絶対に使うな、とカスガに言われている。現代と古代でジン語は異なるそうだ。

「べ、勉強、先！」

急いでハヅキを指差すと、子供たちは、後で絶対教えてよね、と念を押しながら少年の元へ行った。家庭教師は、驚いてかたまっていたが我に返ると、子供たちを引き連れて家の中へ消えた。

ああ、やばかった。いや、ちびっ子たちにどう言い訳をしよう。頭を掻きながらリウヒも家の中へ入っていった。子供たちが勉強をしている間、シゲノさんの手伝いをするようになっていく。

酒屋の配達をしている間に裏通りまで詳しくなってしまった。道と道とのせまい通りを、酒瓶三本持って歩いてゆく。お届け先はこの道のドン突きだ。

酒の配達です、と裏口から声をかけると、いつもの娘が笑顔で顔を覗かせる。結構な美人で、年の頃は一緒ぐらいだ。ただ、化粧が濃かった。

「ご苦労さま。ねえ、今日は父さんも母さんもいないの。良かったら上がっていかない？」

「すいません、仕事があるんで」
あからさまな誘い文句を、苦笑して断る。ふてくされた娘に、またご贔屓に、と言い残し来た道を戻った。現代の娘は自由奔放だが、古代の娘も中々に奔放だ。

ここに来てから、一か月余りがたった。ネックだった言葉も、カスガのお陰で日常会話は完璧にできるようになったし、たやすく聞き取れるようになった。

言葉は大事だ。よく「言葉はなくとも通じ合える」などいうが、それは嘘だとシギは思う。自分の意思をきちんと伝えなければ、コミュニケーションはできない。相手には分かってもらえない。たとえそれが恋人であろうと、夫婦であろうと。他人との関係は、全て言葉で繋がってゆく。読み書きも勉強しようかな、カスガはそこまで知っているかな。

こんな所に来て、学ぶ喜びを知るなんて。現代にいる時は、ただテストが終わればそこで知識は消えていたのに。とクツクツ笑った。
「読み書き？ 簡単なものしか分からないけど、いいよ。あ、でも紙がないから結構難しいかも」

「そうか。じゃあ、また今度でいいや」
夜の屋根裏部屋。三人はそれぞれにくつろいでいる。シギは窓際で濡れた頭を拭いており、カスガはテーブルで酒を飲んでいた。リウヒはベッドの上に凭れてぼんやりしている。

「めずらしいね。シギがそんな事をいうなんて。ねえ、リウヒ」

返事がない。明後日の方向を見て、枕を抱えている。

「おい、どうしたんだ」

近づいて、顔の前で手を振ってみると、目の焦点が合った。

「あ、う、ううん、なんでもない。ごめん、わたし先に寝る」

そのまま蒲団の中にこそそと入ってゆく。いつもは髪が傷むからといって、乾くまでガンとして寝ない女が。枕には水がしみ込んでいる。

「お前どうしたんだよ。おかしいぞ」

からかい半分で、その濡れた髪を梳いてみた。

「やめて」

固い声がかえってくる。手が止まった。なんだか自分を否定された気分だった。胸の中がジリジリと痛い。

なんだよ。突っかかってこいよ。いつもみたく、顔を赤らめておれをなじれよ。

「最近、なんか、変なんだ」

リウヒが静かな寝息をたててから、カスガがポツンと言った。

「バイト先の事も、前みたく言わないし……。なにかあったのかな。いじめられているとか」

「そんなんでへこたれる弱い女じゃないだろう」

「まあ、いじめられることは、昔からよくあったんだけど。名前のせいでね。でも、ぼくにもなにも言わないなんて、初めてだ」

「ホームシックかもしれないねえな」

うう、とカスガが頭を抱える。

「一回、みんなで酒場にいつてみねえか。ちょっとは気が晴れるかもしれない」

大学が夏休みに入った時、リウヒは三人で外に飲みに行きたがった。それを思い出した。

「シギってさ」

「ん？」

「……いや、なんでもない。ぼくも、そろそろ寝るね」

「おいおい、途中で辞められたら気になるし！ 何だよ、一体」

「いや、リウヒが好きなのかなって思つて」

じゃあ、お休み。早々にベッドにもぐりこんでしまった。

シギはため息をついて、テーブルに突っ伏した。

バイト先に向かう足取りは軽く、前みたく、憂鬱にため息をついたりしない。

ハヅキに怒鳴つた二、三日後、帰り道に本人から声をかけられた。付いて来てほしいという。警戒したが、申し訳なさそうな顔をしている少年に少しだけ心を許して付いて行つた。町中に大きな園がある。そこで、ハヅキはリウヒに深々と頭を下げ、暴言を許してくれたと言つた。

「君は、ぼくの妹に似ているんだ。名前まで一緒なんだ」
遠くを見るように少年は語つた。

その子は、赤子の頃にハヅキの家に預けられた女の子だった。嬉しかったが、大好きな兄が自分より妹に夢中になった。今まで、当たり前を受けていた兄の愛情は、あっさりと妹へいった。妹も、自分より兄に断然懐いた。

幼心にとてつもない疎外感を感じた。母に言つても、取り合つてもらえなかった。ところが妹は、五つになった頃突然消えた。居るべき所に歸つた。ハヅキは悲しかったが、どこかで安心した気持ちもあつた。これで兄はぼくをみてくれると。

しかし、兄はおかしくなった。心あらずで、一緒に遊んでくれなくなった。その内、妹がいる所へ行つてしまった。自分と母を置いて兄がそこへ行つたことによつてしかるべき金額が支払われ、そのおかげで大学まで進むことができた。でも、妹と兄に対しては複雑な心境を今でも抱いている。

話している事は、完全には分からなかったけど、気持ちは何とな

く分かる。わたしもカスガの関心がよその人にいったら、すごく悲しいだろう。

「分かるな、それ」

そう言うのと、弾かれたようにハヅキはこちらを向いて、もう一度頭を下げた。

「ありがとう。それから、ごめん。あれは、八当たりだった。今までの態度を許してほしい」

「じゃあ、これから友達だね」

リウヒが笑うと、ハヅキも笑った。手差し伸べられて、握るとさらに乾いていて温かった。

これで、脅威は去った。

今日はくもり空で、今にも雨が降ってきそうだ。天気予報なんてものはない。つくづく便利な世界に住んでいたんだな、と思う。

商家の門をくぐって声をかけると、ちびっ子たちが駆け寄って出迎えてくれる。古代語が話せるようになったのは、カスガとこの子たちのお陰だ。

「ねえ、今日はリウヒがご本を読んで」

「駄目よ。今日はリウヒの髪を結ってあげるんだから」

子供たちにもみくちやにされた。これは子守りというより、玩具にされているんじゃないだろうか。結局、リウヒはたどたどしく本を読みながら、少女たちに髪をいじられている。

「リウヒの髪はとつてもきれい。どうして結わないの」

「面倒くさいから」

容姿には自信がないが、髪の毛だけは自慢だ。藍色の太くて癖のない髪は、手入れのかいもあって、艶もこしもある。そういえばこの時代の人は、みんな髪の毛が長い。男も女も。庶民は短髪もいるが、裕福になると断然長髪だ。そして女性はきれいな簪で美しく結われている。もしかして、それがステータスなのかもしれない。

この家の少女二人も、簪を三つ四つ差している。

「出来た！」

「すごーい！ 可愛い！」

鏡を見せられて、リウヒも感嘆した。キキとネネの見事な技術に。どこをどうしたのか、たつぷりとした髪は、両サイドに一房ずつ残したまま、高い位置でゆったりと結われて、小さな飾りのある簪が二本突き刺さっている。

少女たちを褒めると、嬉しそうに笑い声をあげて調子に乗ってしまった。

「お化粧もしよう！」

「それはいいって……ぎゃー！」

「ああ、もう、動かないで！」

もう完全に玩具だった。

「完成！」

「うわあー！」

全くの別人が、鏡の中にいた。誰これ。わたしかこれ。少女二人はお互いの健闘を称えあっている。そして、なにやら相談を始めた。すぐに戻ると言い残して部屋を出て行く。

「キキとネネはどこにいったのかな……」

分らない、と少年たちは首を振る。不安が広がってゆく。まさかとは思うけど、まさか。

「母さまの衣借りてきたー！」

やっぱりそう来ましたかー！ リウヒは卒倒しそうになった。

「頭も化粧も完璧だもの、衣もそれなりじゃないと！」

「あなたたちは外にいなさい！」

少年たちは追い出された。もういいから、勘弁してー。泣きそうな自分の声は見事に黙殺された。少女たちに無理やり服を脱がされて、美しい衣を着せられる。淡いブルーの衣は絹独特のしっとりした肌触りで心地よい。下衣は濃い茶色で、金色の刺繍が入っている。帯はピンクだった。こちらもビーズのようなものが付いており、動くとたびに静かにシャラシャラと音がした。

「素敵！ 宮廷のお姫さまみたい！」

キキとネネは、手を取り合って喜んでいる。リウヒは恥ずかしくて仕方がない。

「いいよー。入っておいで」

ランたちとともに、ハヅキも入ってきた。なんであんたがいる！
どうやら、勉強の時間になっても、入れず扉の外で足止めをくらっていたらしい。呆然と自分を見ている。

「君……、すごくきれいだ……」

その言葉に、顔から火が出そうになった。

「あ……ありがとう……」

モジモジしている二人をみて、子供たちはクスクスと笑い、肘を突き合った。特に少女たちは鼻高々だ。今まで、大好きなリウヒに冷淡にしていたハヅキが、その娘に見とれている。そして娘を美しく着飾ったのはあたしたちなのだ。

「べ、勉強の時間なら、わたしはお邪魔だから……」

「ちょっと、リウヒ！ どこいくの！」

「シゲノさんのお手伝いだよ。今までもそうだったでしょ」

「駄目！ リウヒはここにいろの！」

「そんな恰好じゃ、お手伝い出来ないよ！」

子供たちは憤慨して声を上げる。

「いいじゃないか、君も一緒に受ければ」

ハヅキ、あんたまで！ 結局、リウヒが折れて、シゲノさんと奥さんに断りを入れに出ることは許された。早く帰ってきてね。送り出されて、廊下に出る。

「あらあらまあまあ、可愛いこと。お気になさらないでください。

あなたの本業はお嬢さまたちのお相手なのですから」

シゲノさんは福々しい顔で笑った。

「あああ、その衣、あなたの方が似合うのね。差し上げるから、そのまま着て帰ったら？」

奥さんは、お茶を啜りながらにつこりした。

「いやいや、駄目ですって。こんな高価なもの、いただく訳に行き

ませんって！」

「いいのよー。と奥さんは手をヒラヒラと振って、片目をつぶった。

「また、新しい衣を主人にねだることができるもの」

子供部屋に戻ると、キキたちが歓声を上げてリウヒを出迎えた。一緒にいって授業を受ける。それでも、ハツキの目線が自分に注がれているのが分かって、顔が上げられなかった。

バイトから帰ってきたリウヒを見て、カスガは目を点にした。別人かと思った。

「どうしたの、その格好。リウヒじゃないみたい」

「子供たちに玩具にされた」

なんじゃそりゃ。ゲンさんとおかみさんも、顔をほころばせて褒めている。

「いつもは、これから台所を手伝ってもらうけど、今日は無理だね」すぐに着替えてくるというリウヒを笑って押しとどめる。今日はお姫さまでいなさい。

「まさか、この年になって、お姫さまごっこをすると思わなかった」リウヒが苦笑した。カスガも昔を思い出して笑った。

幼稚園の頃、幼馴染はお姫さまごっこにはまった。母親の長いスカートをはいて、裾をつまんで得意げになって歩き、気取った言葉で話した。勿論、カスガも無理やり付き合わされ、嫌々ながらお姫さまになった。今となっては懐かしい記憶だ。

シギが帰ってきてその姿を見た時、一瞬見とれたのにカスガは気が付いた。しかし。

「馬子にも衣装だな」

「悪かったな」

本当に、この男は素直じゃないな。

「いつも、そんな恰好をすればいいのに」

屋根裏部屋に戻り、カスガが笑いながら言うと、リウヒも小さく笑った。

「結構、楽しんだけど頭が痛い」

ベッドに腰かけながら、簪をゆっくり抜いてゆく。その度に癖のない髪の毛が、サラサラと落ちてゆき、なんともいえない色気があった。ちら、とシギに目線を走らせると食い入るようにリウヒを見ている。

「バイト先でも評判良かったんじゃないの」

「うん、嬉しかった」

「天敵の家庭教師は、どんな反応だった？」

「あ……。う、うん……。よかった」

お風呂に入ってくる、とそそくさと部屋を出て行った。ほんのり顔を赤らめながら。

「リウヒもついに、春到来かー」

「なんだよ、それ」

煽るように一人ごちると案の定、シギが食いついてきた。

「別に。ああ、そうだ。酒場に行くのは明日にしようか」

「いいけどさ。なんなんだよ。春到来って」

睨みつけるようにカスガを見る。

「分からない？ バイト先の家庭教師の男の事、前はあんなに腹立っていたのに、今じゃ、顔を赤らめて恥ずかしそうに部屋を出て行った。ここ最近、ぼんやりしていたのも、その男の事でも考えていたんじゃないの」

「ありえねー」

シギは鼻で笑ったが、その顔は引きつっていた。

都の生活 3

リウヒが、赤い顔でベッドに倒れている。時々、苦しそうに咳をする。

「大丈夫かよ」

「喉が痛い……」

飲みに行く話にリウヒは喜んで賛成したものの、しばらくお預けになった。風邪をひいて熱を出したのである。久しぶりにバイトが休みで、外をぶらつこうと思っていたシギは、なんとなく部屋に残った。カスガは下で働いており、部屋の中には二人だけである。

「どうりで最近だるくて、しんどかった……」

痛そうな咳を連発した。椅子を立って、リウヒのベッドに腰掛け背中を叩いてやる。ついでにさすると、体が異様に熱くて驚いた。

熱をだしている女って色っぽいな。

上気した赤い顔も、汗に濡れた体も、潤んだ瞳も、礼を言う掠れた声ですら。

カスガが、お粥と薬を持ってきた。おれがやるからと受け取ると、につこり笑って引っ込んだ。

「食えるか？」

「んー。食欲ない……」

「食えよ。そんなんじやいつまでたっても直んねえぞ」

しぶしぶ起き上がったリウヒの口元に、粥を一匙掬って差し出す。黒い瞳が戸惑うように揺れた。口を開くとシギは僅かに顎を上げて、自分の口を小さく開き身振りで示す。リウヒの唇が、おずおずと開いて匙をくわえた。手を引くと、その間から匙が引き抜かれる。何度もそれを繰り返す。時々、舌がちろりと出て、自分の唇に付いた粥を舐めた。シギの心の奥底に引っ込んでいた保護欲が、静かに浮上してきた。この女が可愛くて仕方がない。

粥が無くなった。薬は碗に入った液体である。不味いから嫌だ、と

ただをこねるリウヒを抱きかかえて、腕を口に付けた。ゆっくりと休憩をいれつつ流しいれる。

全てを注ぎこむと、吐息が漏れた。

寝かせると今度は水に濡らした布で、顔や首の汗を拭ってやった。

「髪、上げる」

「うん……」

長い髪がうなじに何本も張り付いている。体の奥から湧き上がる小さな欲望を押し殺しながら、シギは手を動かした。いつもは叩く軽口も、その応酬もない。

「ああ、すごく気持ちいい……」

その顔と、声と、言葉に胸がキュウと鳴る。そのままリウヒは寝入ってしまった。シギはしばらく寝顔を眺めていたが、身を屈めると赤く上気している頬にそつとキスをした。

目を覚ますと、シギが自分の腰に手を回すようにして寝息を立てていた。肩が小さく上下している。焦ったものの、つい、その顔をじっくりと観察した。意外にまつげが長くて、うつすらとそばかすがある。唇は薄くて隅がちよつと乾燥してめくれていた。なんとなくオレンジの髪をさわると、水気がなくてパサパサしている。しばらくその頭をなでていたが、またトロトロと意識が沈んでいった。

熱が下がり、完全復活するのに五日かった。不思議な事に、シギがずっと看病してくれていた。

「ありがとう。シギのお陰で元気になった」

礼を言くと、につこり笑って頭をくしゃりと撫でられた。

「また、寝込んだら看病してやるよ……なんだよ、その顔」

「あんた、本当にシギ？ 人格変わってて気持ち悪い……」

「失敬な女だな！ 人の好意を無駄にしやがって！」

「季節外れの雨季が来るね……ぎゃー！」

両手で頭をグシャグシャにかき回され、悲鳴を上げた。

バイト先の商家にいくと、子供たちが文句を言いながらリウヒを取り囲んだ。さびしかったの、つまらなかったの、もう元気なのと上がる可愛らしい声に苦笑しながら謝る。

「ハヅキも、リウヒがいなくて元気が無かったよ」

キキが含み笑いをしながら、何故か嬉しそうに言う。まさか、と笑った。そのハヅキは大学が試験期間に入っているらしく、しばらく来ないという。昔も今も、一緒なんだ。夏休み前の猛勉強を思い出した。

また、わたしはあそこに戻れるのかな。お父さんたち、心配しているだろうな。時間の経過は、同じくらいなんだろうか。それなら、もう三か月くらい経ってしまっている。

ぼんやりしているリウヒを見て、少女たちは変に勘違いをしてしまったらしい。クスクス笑いながら、目配せをしていた。

「これから、酒場にいこうよ。リウヒも元気になったことだし」

カスガの声に、三人で夜の盛り場に繰り出した。

酒場の扉を開けると、喧騒が包む。酒とつまみを適当に注文して、辺りを見渡すと、色んなタイプの人たちがいた。恋人同士や親子連れ、大工の集団らしき男たち、仕事上がりらしい親父の二人連れ。現代の居酒屋みたいだ。隅の方では、若い女が可愛い丸いギターのようなものをつま弾きながら、歌を歌っている。

「この時代、新聞なんてないだろう。だから、ああいった歌い手がニュースとか話題のことを楽器と一緒に歌うんだよ」

カスガのうんちくにふたりは感心した。

「へー。風流」

「テレビやラジオもねえもんね」

「一番早いのは、宿とか酒場の噂話なんだけどね」

注文していた品がやってきた。自分の前には、男二人とちがった陶器のコップが置かれる。

「なあに、これ」

「果実酒を水で割った奴。お前、酒、弱いだろう」

「古代にも、こんなものがあつたんだ」

「少しだけ口をつけてみると、甘くてさっぱりしている。」

「すごい、おいしい！　さすが酒屋でバイトしてるだけあるね」

「ふふん」

乾杯して、三人は大いに盛り上がった。バイトの状況や、現代の話題。毎晩話しているのに、話題は尽きない。しょうもないことでもゲラゲラ笑う。この酒場の雰囲気がそうさせるのだろうか。

その内、カスガがトイレいつてくる、と言い残して、店の隅に歩いて行った。

遠ざかるカスガを見送って、横にいるリウヒに目を転じると、よほど果実酒が気に入ったのか、お代りを頼んでいた。

「あんまり飲みすぎんなよ。病み上がりなんだから」

「最近、シギはどうしたの？」

リウヒが振り向く。目の下がほんのり赤く染まって、妙に艶があった。

「どうしたってなにが」

「変に優しい。シギじゃないみたい」

「おれはいつだって優しい男だつての。それに一々突っかかってんのはそっちだろ」

頬をつねると、いひやいと声を上げた。その顔がおかしくて、からかっていたら突然、見知らぬ少年がこちらに早足でやってきた。

「リウヒ！」

「ハヅキ？」

どうやら知り合いらしい。ハヅキと言われたその少年は、シギには一瞥もくれずにリウヒだけを見ている。

「しばらく会えなかったから、どうしていたのかと思っていた、体調は大丈夫？」

「ありがとう、もうすっかり元気。ハツキは試験終わったの？」

「今日で終わって、友達と飲みに来ているんだ。ちょっとだけ来てくれないか。みんなに紹介したいんだ」

リウヒが戸惑ったように、こちらを見る。

「いってくれば？」

自分でも、驚くほど低い声が出た。

「行けよ」

「すぐに戻るから」

少年は、シギに小さく一礼をすると、リウヒの背中に手を添えながら、酒場の奥に歩いて行った。

畜生、なんで素直に行ってしまうんだよ。矛盾した苛立ちが胸に立ちこめた。

遠くから見ながら、イライラと酒を飲み干してゆく。ああ、無償に煙草が吸いたい。この苛立ちを、ニコチンでごまかしてしまいたい。

「ただいまー。あれ、リウヒは？」

黙って、顎でしゃくる。先には、四、五人の身なりの良さそうな男たちに囲まれたリウヒの姿がある。その背中には、相変わらず少年の手がかかっている。

「あー……。あれが例の家庭教師かー。結構カッコいいね。……あつ。酒を注文されました！ どうやら一杯だけだと言っておるようですが、果たして一杯ですむのでしょうか。そしてリウヒの背中に回されている手は、一体いつになったらどくのでしょうか！ どうでしょう、解説のシギさん」

「だれが解説のシギさんだ。お前は気になんねえのかよ。大事な妹なんだろう」

「うーん、だけど、ちょっと嬉しい。よそのグループに溶け込んで、あんなに楽しそうな顔しているなんて初めて見たよ。何か、こう……」

……」

成長した娘を送り出す父親の気分だ。明日はお赤飯かね。そう言つて、袖で涙をそつと拭つた。

このエセシスコンが。シギは舌打ちして酒を煽る。

そんな間近で目を合わせるんじゃないやねえ。ハラハラする。そんな楽しそうに笑い声を上げるんじゃないやねえ。ムカムカする。

「気持ちとは分かるけどさ、少し落ち着いてよ」

「おれは落ち着いてる」

「じゃあ、その貧乏ゆすりをやめてほしいな」

「そんなんじゃないやねえ。あの歌のリズムをとってんだ」

「嘘だね。そんなにアップテンポじゃないよ」

いい加減自覚したら？そんなカスガの視線を避けるように、ため息をついて壁に凭れる。

再び視線をリウヒに向けると、少年は藍色の長い髪を触っていた。ゆつくりと愛おしそうに梳いている。我慢の限界だった。

「帰ろうか」

勢いよく立ち上がると、へいへい、とカスガも腰を上げる。会計しといてくれと言が残し、酒場の隅に向かった。

「帰るぞ」

リウヒの肩を小突くと少年たちは、驚いたようにシギを見た。

「ごちそうさま。すごく楽しかった。また明日ね、ハヅキ」

席を立つリウヒにそれぞれ声がかかる。もつとあればいいのに、とか送るのに、とか。シギは全てを無視して、ハヅキとかいう少年に小さく頭を下げると、見せつけるように千鳥足のリウヒの肩を抱いて扉へ向かった。

「お前、飲み過ぎだ。フラフラじゃねえか、馬鹿」

「うー。眠くなってきた……」

肩を引き寄せて耳元で囁いてもよほど眠いのか、いつものように突っぱねない。

ちらりと後ろを振り返ると、男たちは明後日の方向を見て何か話していたが、ハヅキだけはこちらを見ていた。その目が燃えるように

睨みつけている。

ざまあみろ。

鼻先で小さく笑って、肩を抱く手に力を入れた。

商家の庭先で、リウヒは子供たちと本を読んでいた。大分と読めるようになった。今、試験を受ければ、間違いなく満点だろう。

「リウヒの声は、低くてとてもきれい。大好き」

クジャクが、リウヒの髪をいじりながらうつとりと言う。この整った顔の子は将来、大層なプレイボーイになるに違いない。

「ありがとう。わたしも、クジャクのきれいな紫の髪、好きだよ」子供特有の、しっとりした頭を撫でると、ぼくもわたしもと周りから声上がる。五人で一斉にもみくちやにされて、芝生の上に引っくり返ってしまった。ああ、わたしってやっぱりこの子たちの玩具なんだわ……。勢いで、小さなダンの体を抱え上げると、悲鳴を上げて喜んでいいる。また、ぼくもわたしもとちびっ子たちがのってる。

「無理です！ 体力の限界！」

「なにをしているのですか」

声をかけられて、振り向くと、ハヅキが目を点にして立っていた。

「あれ、ハヅキ。今日は早すぎるよ」

勉強はお昼からでしょう。どうしたの、時間を間違えたの。

「分かった」

キキがにやりと言う。

「早くリウヒに会いたくて、たまらなかつたんでしょう」

当たり。とハヅキが笑った。笑顔のまま、こちらに向かってくる。焦ったのはリウヒだ。

「いやいやいや。昨日、酒場で会ったでしょう！ 話したでしょう！」

「ぼくは君とあまり話せなかったよ。あの男は何？ 恋人？」
誰？ シギのこと？ ああ、あの人はいつもそうだから、と苦笑する。

「恋人なんかじゃないよ、ただの友達」

ひっくり返っていた身を起こす。ハヅキも、リウヒの横に座った。

「そうは見えなかったけど。本当に恋人じゃないの？」

「本当に違ったら」

つい笑いだしてしまった。

「ふうん……。ところでなにをしているの」

本を読んでいたのだといったら、ぼくも居ていいかなとにつこりする。子供たちはクスクスと嬉しそうに笑っていた。

「じゃあ、今度はキキが読んで」

ダンがりウヒの膝に座り込むと、横にネネが甘えるように身を寄せてくる。クジャクは自分の髪がよほど気に入っているのか、一房とって遊んでいる。ハヅキはリラックスしたように胡坐をかいていた。ランが寝ころんで肘をつき、キキが可愛い声で物語を読み始める。

鉛色の空から雨が降り始めた。シギは構うことなくイライラと歩を速めて、酒瓶を抱え直す。苛立ちの原因は分かっている。

あの天然女。

最近リウヒの帰りが遅い。いつもはシギの方が遅く宿に着くのに、大体同じ時刻か、それ以上に遅れて帰ってくるときがある。聞けば、例の少年と仕事上がり公園で、話し込んでいるらしい。

「暗くなったら危険だろうが。早く帰ってこいよ」

「ううん、宿まで送ってくれるから大丈夫」

だから、そいつが一番危険だったの！ 思わず声を荒げると、
「なんで？」

ときよとんとした。お前の天然さにはお手上げだよ、全く。ともかく心配で堪らない。でも、何故か負けたような気になって言えない。

あの鈍感女。

数日前から髪を結うようになった。横に一房垂らして、緩やかに巻いている。いつも同じ簪を一本挿していた。

「めずらしいね。滅多に髪はいじらなかったのに」

カスガが笑うと、リウヒも笑う。

「簪をもらったの。つけないと悪いかなって思って」

「そ、そ、それはあの男からか！」

「うん」

そんな毎日つけたら、そいつは勘違いするだろう！ ついとがった声をだすと

「なにを？」

と目を丸くした。お前の鈍感さには泣きそうだよ、本当に。

深いため息をついたシギの後ろで、カスガが酒を啜りながら「ご愁傷さま」と呟いた。

得意先の戸を叩くと、化粧の濃い別嬪娘が艶やかに顔を出す。

「雨宿りしていけば？ 温めてあげる」

胸元が広く開いていて、ふくよかな素肌がこぼれ見える。うっかり喉を鳴らしてしまった。

ここに来てから、三か月もご無沙汰だ。このまま何も考えずに誘惑に乗っけてしまおうか。

無意識に娘へ踏み出そうとした一步を、くるりと返す。

「仕事があるんで。またご贔屓に」

詰る声を後ろに聞きながら、足を速めた。髪から頬から水滴が絶え間なく滴り落ちていく。

それでも気にせず、シギは歩く。

違う、あのケバいい女じゃない。やっと自覚した。してしまえば楽だった。いっそすっきりした。

おれが欲しいのは、藍色の髪のウルトラ天然馬鹿女だ。

都の生活 4

「簪をありがとう。お陰で毎日髪を結うようになった」

いつものように二人、公園で世間話をしている時にそう言うと、お礼は何度も聞いたよ。とハヅキが笑った。

この少年は、出会ったところからは想像できないくらいに優しくなった。朝、早い時間からバイト先にやってきて、リウヒと共に子供たちと遊び、勉強の時間になると、同じように丁寧に教えてくれる。

本を読み上げる声は、静かで耳にすんと馴染み、その心地よさについ、うたたねをしてしまったことがある。ふと頬を撫でられる感覚に目を覚ますと、ハヅキが手を自分の頬に付けたまま、「いねむり厳禁」と微笑んだ。恥ずかしさのあまり、慌てて本で顔を隠すと、子供たちから冷やかしの声が飛んだ。

仕事が終わるとここの公園で、色々な話をして、帰りはわざわざ宿まで送ってくれる。

なかなか苦労人らしい。

この時代、大学は金も時間もかかる為、貴族の者か、ものすごく裕福な者しかいない。学校に通いつつもバイトをしているのはハヅキだけだそうだ。それでも全て兄の金で補われるのは嫌だと、勉強と仕事を両立している。仲の良い友達もいるが、どうしても育ちの差を感じる時がある。幼いころは、兄と妹に疎外感を感じて育ってきた。その兄、妹も今はどこにいるのか分からないらしい。生きているのかでさえ。

きつと、色々寂しくて辛いんだろうな。だから、こんなにボディータッチが多いのだろう。

横のハヅキは、リウヒの手を両手に包みこみながら、何か話している。

いいよ、いいよ。手ぐらいどんどん触ってくれて。その横顔を見ながらお姉さんになったような鷹揚な気持ちになる。わたしは年上な

んだし。

「ねえ、ジン語を覚えてくれないか？ 君の国をよく知りたいんだ」
深い茶色の目に覗きこまれて、リウヒは戸惑った。自分の言葉と今の言葉は違う。それに、君の国と言われても、出てくるのは現代の世界だ。空には飛行機が飛んでいて、町には車や電車が走っていて、マンシヨンの一室に暮らしています、なんて言えない。

「わ、わたし、田舎育ちで訛っているから！ それに、話せるようないい国じゃないよ……」

現代が誇れるものって何だろう。便利さぐらいしか思いつかない。この時代に慣れれば慣れるほど、現代の良さが分からなくなってくる。

「じゃあ、二言だけ、教えてほしい」

それぐらいなら大丈夫だろう。頷いて了承した。

「君が」

「君が」

「大好きだ」

「大好きだ」

男の子にしてはロマンチックな事を聞く。思わず微笑んだ。ハヅキは口の中で、二、三度繰り返して覚えた、と呟いた。

「そろそろ帰ろう」

手を引っ張ると、そのまま絡めてきた。本当にこの子は、淋しがり屋さんだ。クスクス笑ってハヅキを見ると、少年も嬉しそうに笑い返した。

宿に入ると、カスガとシギがご飯を食べて酒を飲んでいた。

「今日もおそかったじゃねえかよ」

「うん、ちよつと話し込んだじゃって」

急いで、おかみさんの手伝いをしようと台所に入ると、もういいからご飯を食べなさいと笑われた。申し訳なさに、頭が下がる。ハヅキとの時間をもっと早く切り上げたほうがいいのかもしれない。

空腹のため、夕飯を夢中になつて食べていると、二人がこちらを見ていることに気が付いた。

「なに？ お肉はわけてあげないよ」

「馬鹿」

シギがため息をつく。

「そろそろさ、ここから出て他へ旅してみようかなと思って」

つい箸を落としてしまった。そんなバイト先の子供たちや、ハヅキと別れなきゃいけないなんて。

「ど、どうして？ ずっとここにいれば、その内王女は帰ってくるんでしょ」

二人で話し合つたんだけどさ。カスガが猪口に酒を注ぐ。

「ずっと、ゲンさんの好意に甘えている訳にはいかないし……。ここだけじゃなくて、外の世界を見たいんだ。それに、あんまり一つの所に居て、慣れ過ぎるのもよくないし」

「どうして慣れ過ぎるのが悪いの？」

「あくまで、ぼくたちは現代の人間なんだよ。歴史の中に関わり過ぎるのはまずいんじゃないか」

ほら、よくあるだろう。変にいじくつてしまつて、辻褄合わせに必死になる映画とか。

「だ、だけどさ」

リウヒは食い下がった。

「以外と好都合に出来ているものじゃないの？ 時間つて。あれ、こんな感じだつたつけ、とか、実はパラレルで他の時間軸にいつちやったりして、とか……」

「時間は君たちが思っているほど、甘くはないんだよ」
厳かな顔でカスガが言う。どこかの映画のセリフか？

「ぼくたちの未来は、ほんの些細の出来事や誰かの一言の積み重ねで、大きく変貌していく。じゃあ、現代は？ 過去をちよつといじつただけで大きく変わるんだよ」

「う……」

「仮にリウヒが言うように、ここがパラレルワールドだったと考えよう。そして、ぼくらが好き放題したとしよう。この時代にはない知識をたくさん持っているわけだから、与える影響は滅茶苦茶大きいよね。だけど、絶対的な確証はないだろう。未来に帰った時に、もし全く違う世界だったとしたら？　それが自分のせいだとしたら？　リウヒはその責任に耐えられるかい？」

言っている事はよく分かる。分かるけど、あの子たちと離れたくない。

「じゃあ、二人でいったらいいよ。わたしはここに残りたい」
固い声がでる。

「お前も一緒に行くんだよ。カスガの話を聞いてなかったのかよ」

「聞いてたよ。だけど、行きたくない」

「我儘いうんじゃない。ハイかイエスかどっちだ」

「それ選択の余地ないじゃん！」

あのかな、とシギの声が一転して柔らかくなった。

「おれたちは、三人でチームだろう。一人でも欠けたらチームじゃなくなる」

「ぶふっ！」

思わず、ご飯を吹いてしまった。

「汚ねえな！　米粒を飛ばすな！」

「チッ、チームって、チームって……センスなさすぎ。それにシギがそんな事をいうなんて……」

素直に君と離れたくないと言えはいいのに、とカスガが呟き、シギがその足を蹴ったが、リウヒは笑いが止まらずに気が付かなかった。ようやく体が痙攣するほどに収まった時、カスガが静かな声で諭す。「別に、今すぐ遠いどこかに行くわけじゃない。また、都に戻ってきた時に会えばいいじゃない。それに、いつかは別れなきやいけななんだよ」

「うん……」

言っている事は痛いほど分かるけど。

だけど、わたしたちはまた現代に戻れるのだろうか。

もし、帰れなかったら、またこの都で暮らしたい。あの子供たちと、ハヅキの近くに居たいと思う。

そうだ、ちよつと離れるだけなのだ。ただ、それだけなのだ。

「分かった。わたしも一緒に行く」

目の前の二人が安堵したように、息を吐いた。

「三日後ぐらいに出ようと思うんだ。色々と準備もあるからね」

カスガたちの話を聞きながら、あの子たちにお別れの品でも買ってやろうかなと、ふと思いついた。明日、早退して市場にいつてみようか。リウヒは、食器をまとめると台所に下げに行った。

リウヒが同意して良かった。本当に良かった。

ベッドから上半身だけを起こして、斜め前で寝息を立てているリウヒを見る。月明かりに照らされて、布団にくるまれた体が僅かに上下していた。

小さなため息をつく。

自分の気持ちを自覚したものの、今度はそこから動けずにイライラしている。なんてことはない、今まで人を好きになったことがなかったのだ。

彼女はいた。告白されて、なんとなく付き合って、いつの間にか自然消滅したり、別れたりした女たち。

女友達もいた。ただ体を重ねるだけで、恋だの愛だのは全くなかった。

だから、どうしていいのか分からない。下手に動いて嫌われることが恐怖だった。

おまけに相手は見事な鈍感ときている。さらに、ハヅキがリウヒに好意を持っていることは分かっている。ほとんど毎日二人で、公園で話し込んでいることも。

一度、屋根裏部屋の窓から、少年と手をつないで帰ってくるリウヒを見た。心臓が雑巾のように絞られたような痛さを感じた。別れを告げて宿に消えた女を、ハヅキはしばらく見て、踵を返して去って行った。浮立つような足取りで。

カスガがそろそろここから出ようかと言った時、チャンスだと思った。あの少年とリウヒを引き離すことができる。

おれは、なんて卑怯者なんだろう。

再び、小さなため息をつく。

だけど、お前と一緒にいたいんだ、なんて言ったらリウヒは大笑いするに違いない。笑われることすら恐ろしい。自分を否定されることが怖くて堪らない。

あの少年のように、真っ直ぐに好意をぶつけることができずに、こうやって己の中でモヤモヤと考えを巡らせることしかできない。傷つきたくないのだ。

おれはなんて小心者なんだろう。

好意を素直に見せようとすれば、シギじゃないみたいと目を丸くされる。驚かれる。結局は軽口やからかいに逃げてしまうのだ。

好きだから、ちょっかいをだしていたのか。小学生か、おれは。いや、今日び小学生の方が大人でスマートだろう。

本日何度目か分からないため息について、シギは布団の中に潜り込んだ。

扉の前で、リウヒはため息をついた。

旅に出るから、もうここには来られないというと、子供たちは泣いて縋った。泣き通しが通用しないと分かると、今度は怒って、部屋に閉じこもってしまった。

「どうしよう、今日で最後なのに…」

隣でハヅキも詰るような目で自分を見ている。

「ぼくも、あの子たちのように君を責め立てたいよ。どうして旅に
でるの」

「ハヅキまでそんなこと言わないで」

わたしだってみんなと離れたくないのに。

奥さんは、悲しそうに微笑んで頷いた。

「子供たちがあんなに懐いたのは、あなたが初めてだったから、ず
っといて欲しかったのだけど。仕方ないわよね。また近くを通りか
かったら、遊びにいらっしやいな」

「ありがとうございます。あの、これをみんなに渡してください」
ちびっ子たちへの餞別だった。少女たちには珊瑚の簪を、少年たち
には帯を。随分慎ましいものだが、半日かけて一生懸命選んだもの
だった。

「わたしはてつきり、あなたはハヅキと結婚するものだと思ってい
たのに」

「はい？」

「庭であなたたちがいた光景は、とても微笑ましくて、幸せそうだ
ったから」

思い出すように奥さんはクスクスと笑った。えらく突飛なことを言
う人だなど、リウヒも引き攣りながら笑った。もう一度頭を下げて、
子供部屋へ向かう。ハヅキが扉の横壁に凭れて、腕を組んでいた。
こちらに気が付いても、拗ねたように横をむく。

「みんな、ごめんね。もう行くよ」

返事はない。

「キキ、ネネ、ラン、クジャク、タイ。本当にありがとう。今まで
すごく楽しかった」

タイの小さく押し殺した泣き声が聞こえた。胸が痛む。

「さようなら。みんな、元気で」

子供たちの嗚咽が聞こえたが、扉は開かなかった。小さく息を吐い
て、そのまま下がる。

「ハヅキも、色々ありがとう」

手を差し伸べると、少年はそのまま手を取り、リウヒをひっぱって歩き出した。

「えっ、ちょっと、どこいくの」

「公園」

「だって、まだあなたの仕事は終わってないんでしょう!」

「こんな状態じゃできないよ。君のせいで」

それを言われるとつらい。黙って手を引かれながら、ついて行った。商家を出ると、空が茜色に染まっている。毎日通っていたこの家に、もう明日はこないんだと思うと、涙が出てきた。

公園のいつも話し込んでいる場所で、ハヅキが向き直る。

「本当に、いっちゃうの?」

「うん……」

「本当に、いっちゃうんだ」

濃い茶色の目に真っ直ぐ見詰められて、頷くことしかできない。

「そうだ、これ……」

懐から、小さな根付を取り出した。ハヅキへの餞別が思いつかなくて、結局根付にした。銀色で三連の大小の輪が連なっており、細長い棒状の飾りと小さな鈴がついている。根付は女性のアクセサリーだが、このユニセックスなデザインなら男の人でもいけるかなと思った。

いつもはシンプルな装いのハヅキだが、この根付を帯にさしたらさぞかし映えるだろう。

「そんな高価なものじゃないけど、良かったらもらって」

少年に近づいて、その帯に差し込む。予想通り似合っていた。

「ああ、良かった。やっぱり似……」

突然ハヅキの腕が背中に戻って、抱きしめられた。息が止まる。腕の中に閉じ込められたまま、しばらくどうしたらいいのかうろたえてしまった。

「リウヒ」

「……なに?」

耳元でハヅキがゆつくりと囁いた。教えてあげた、現代の言葉で。

「君が」

胸が締め付けられた。

「大好きだ」

痛くて堪らない。

自然と腕が上がって、ハヅキの背に手を回した。しばらく二人はそのまま抱きあっていた。

「もう一つ、もらっていい？」

「え……」

頬に手がかかり、上を向くとハヅキの唇がおりてきた。大切なものを愛しむような、優しいキスだった。

夕日が沈んで辺りが暗くなりはじめても、離れがたかった。

「宿まで送っていく」

リウヒは静かに首を振った。大丈夫だから。本当に、離れたくなくなってしまうから。

「ぼくが送っていきたいんだ」

もう一度キスをする、手をとって歩きはじめた。しつとりと温かい手に、自分から指を絡める。するとぎゅっと握り返された。

「ハヅキに貰った簪ね」

「うん」

「一生、大切にする。おばあちゃんになっても持っている」
クスクスと少年は笑う。

「じゃあ、リウヒに貰った根付、ぼくは生まれ変わっても持っていよう」

「そんな大げさな」

リウヒも笑った。

「いつか、君の国にいくよ。また会いたい」

「ハヅキはいつまで大学にいるの？」

うーん。国試資第だな。もし近くにきたら必ず大学を訪ねる、と約束した時に宿の前についた。

「じゃあ、元気で」

「ハツキも」

頬に一つ、唇に一つ、優しくキスを落とすと、ハツキは静かに離れた。

大丈夫、また会える。

リウヒは小さく笑うと、手を振って宿の中に消えた。少年はそのまま佇んで、扉を見ていたが、踵を返すと肩を落として歩きはじめた。

第五章 外の世界 1

赤毛の少女が今日もやってきた。かあさんと笑いながら台所で、話している。

そこに加わりたいのに、どうしても足が動かなかった。ただ、居間でぼんやりとその光景を見ているだけだ。

キャラというその少女は、リウヒをちらりと見ると、フン、と鼻で笑った。思わずムツとする。

帰りがかった家はもう苦痛でしかない。トモキも自分を置いて出て行ったままだ。わたしを捨てて。

母とカガミはリウヒの為を思っただけで、都へ行ったのだと諭したが、リウヒは捨てられたと感じていた。

「そんな訳ないじゃないか。いいかい、トモキくんはトモキくんなりに色々考えて行動しているんだよ。それは全て君を守る為なんだ」でも、帰ってこないじゃないか。必ず戻ると言っただけに。

「リウヒ、あなたも手伝って」

「あ、おばさん、それ、あたしがします」

この子はなんなのだろう。なぜ、こうしょっちゅう、この家に来てわたしを憎々しげな目で見るのだろう。

いたたまれなくなつて、外に出た。裏ではカガミが薪を切っていた。丸い体が、あぶなつかしく動いている。手伝う訳でもなく、リウヒは壁に凭れてぼんやりとその姿を見ていた。

トモキに会いたい。わたしの大切なにちゃんに。

リンたちや、講師たち、シラギのいた東宮に戻りたい。あの平和な部屋の中に。

カガミの丸い輪郭がかすんできた。したたる涙をそのままに、リウヒはズルズルと座り込むと身を守るように膝を立てその間に顔をうずめた。

後ろでリウヒとシギが楽しそうに言い合いをしている。

「チームなら名前を決めないとねー。何がいいかなー」

「だから、もうそれを言うなって……」

「全員、二十歳だからチーム20？ それともチームカスガ？」

「なんでカスガなんだよ」

「だってカスガが隊長だもん」

「チームって隊だったのか」

「班長？ 工場長？」

「どっから出てきた工場長！ どの工場出身？」

ティエンランの都を出たカスガたちは、一番近い村を目指して歩いている。現代の服やリウヒがもらった絹の衣やは、ゲンさんに預かってもらった。親切な髭親父とそのおかみさんは、元気でいっておいでと弁当まで持たせて見送ってくれた。

空は青く遠く、どこまでも続いている。赤土の道を、イタチのような小動物の親子が横切った。

「ちよつと寒いけど、いい天気だねー」

リウヒの明るい声が聞こえる。シギが何か言って、また二人で笑い声を立てた。

「たいちよー！」

後ろから走ってくる音が聞こえて、腕を取られた。

「そろそろ、お弁当にしませんか」

「まだ、お昼じゃないよ、リウヒ。それに隊長ってなにさ」

「だって、シギがチームカスガって言うから。お腹が空いたであります、隊長！」

しゃちほこばって敬礼をするリウヒを、シギが後ろから技をかける。「おれはそんな一言もいってねえぞ！ お前だ、お前！ そんなだっさい名前を付けたのは！」

「きゃー！ 乙女にコブラツイストはやめてー！」

はいはい、行きますよ、とカスガは苦笑した。この二人は朝からずっとこんなテンションだ。

「あの先の木陰についたら、お弁当にしよう。それまではキリキリ歩くように」

まだじやれている馬鹿二人をほっておいて、再び歩き出す。

そろそろ王女たちも動き出す。伝説の少女と、その六人の仲間をこの目で見ること、そして接触することが、カスガの最大の目的だった。リウヒとシギには言っていない。反対されるのは分かっていたし、二人はそこまで王女に固執していない。

「ねえ、カスガ。王女たちが外を旅していた時のルートは知っているの？」

考えを見透かされたような、リウヒの声に、ドキリとした。

「あ、う、うん。大体はだけど……」

「トモキっていう人は、同行しているわけ？」

「いや。最初の一年は兵に捕まって、もう一年は王女の兄の海賊船に乗っていたから、ほとんど一緒じゃなかったけど。そのトモキを探して王女たちは旅をしていた訳だし……。でも、どうして？」

「カスガは、王女とその一行を追跡しようと思っているんですよ。もしくは会おうと思っているんですよ。絶対やめといたほうがいいよ」

思わず、足を止めてリウヒをみた。幼馴染は、真剣な目をしている。

「トモキはカスガに、瓜二つだもの。ばれたら大混乱になるって」

「なんでそこまで言い切れんの？お前、一瞬見ただけだろう」
シギも目を丸くしている。

「ティエンランの都で、トモキに声かけられたことあるの。わたし誰かと勘違いされて。でも、そのあとすぐに兵に捕まって、連行されていった。髪の長さは違ったけど、カスガと間違えたぐらい似ていたの」

「なっ、なんでもっと早くそれを……！　しかもリウヒばかりずるい！」

思わず声を荒げると、そうくると思ったから言わなかったんだとい返された。

「歴史の中に関わり過ぎるのはまずいつてゆったのはカスガじゃん」
カスガは完全にパニックになった。リウヒの肩を掴んで鼻息荒く迫る。

「ちょっとだけ。ね？　ちょっとだけだから！」

「どこのエロオヤジのセリフだよ！　ああ、もう、離せ！」

シギが顔色を変えて二人を引き離そうとした。

「お願い！　ちょっとだけでいいから！　じゃないとここに来た意味がないんだよ、ぼくにとっては！」

「カスガ、目が怖い……」

「その手を離せつての！　なんでそこまで王女に執着するんだよー」

「ほらほら、カスガ、木陰についたよー。お弁当にしようよ。ちょっと落ち着いてよ」

「弁当なんぞ食ってられるかー！」

道の脇にそびえている大樹にカスガは抱きつき、悲しげな声を漏らした。

「ああ、せっかくタイムスリップしてこんな素敵な時代に来たのに、なんで王女とその一行に会うことができないんだ、ぼくは……。どうしてトモキとそっくりなんだ……」

切なげに幹に語りかける古代オタクに構うことなく、リウヒとシギは弁当を食っている。

「お茶とつて」

「ん」

「この時代の水筒って竹なんだねー。エコだ、エコ」

ブツブツと陰気に木に向かって語っていたカスガが突如振り返った。

「リウヒはトモキに、だれと間違えられたの！」

その勢いにリウヒが驚いてむせた。

「よく分かんない。どうしてここにいるとか、あそこで待ってるっていったらどうとか言われた」

「もしかして……王女？」

「まさか！」

ケラケラと笑う。

「王女は絶世の美女なんでしょう？あり得ないって！」

「お前は腐っても美女じゃないもんな」

頷くシギの頭をリウヒが殴った。

「痛え！ なにすんだよ！」

「他人に言われるとムカつく！」

「いや。この二人は王女の辿ったルートを知らない。こつそり後を付ける手もある。最悪二年後にスザクに行けば、セイリュウケ原の合戦に参加することだってできるのだ。そしてあの上意の礼を見ることができる。よしよし、なにも馬鹿正直に言わなくてもいいのだ。『そうだね、リウヒの言う通りだ。大人しくぼくたちで旅をしよう。あれ、ご飯は？』

「わたしの胃袋の中でありませう、隊長！」

「弁当なんぞ食ってられるかって言ったのはお前だぞ」

ゲンさん心づくしの弁当は、カスガが嘆いている間にシギとリウヒの腹に納まってしまっていた。

あのさ、トリウヒがシギの髪を切りながら声を上げる。

「ゲームみたいだよ、これって」

小さな村にたどり着き、夕食後宿の部屋でゴロゴロしている時だった。カスガは早速酒を飲んでいる。

「ゲームって？」

この時代の人間は長髪が多いが、短髪に慣れているシギとカスガは、度々髪を切り合っている。リウヒが下手糞なのは台所関係であって、散髪は意外と上手かった。

「うん。ほらRPGの世界って、仲間がいて、モンスターを倒しな

がら、旅するでしょう？ 何か似ているなつて。勿論モンスターなんかいないし、お金を稼ぐのはバイトで、経験値があがるわけじゃないけど……」

「レベルアップもないし、ファンファーレならないし、悪いボスもないし」

「世界を救うために旅をしているわけじゃないし」

むしろ内の一人は、ストーカーしようとしているし。リウヒの目線を受けて、カスガが鼻を鳴らす。

「わたしが悪の王になっちゃおうか」

「おれが世界に君臨したら、男はパンツ一丁、女は裸だ」

「変態」

「最低」

リウヒとカスガが同時に声を上げた。

「世界征服は大変だよー。あれも努力しなきゃいけないからね」

「じゃあ、やめた」

シギがあっさり放棄する。

「なんの能力があるわけでもないしさ」

「女子大生と古代オタクとエロ河童だし」

「……おい、ちよつとまで。自分だけいいように言うなよ。お前は女子大生っていうより貧乳だ」

「坊主にするぞ、こら」

「すんません、嘘です」

「魔法が使えるわけじゃないし」

「あー、でも一度行った町にいく呪文は欲しいなあ」

「歩く速度も最速ぐらいにしたいなあ」

「死んでも生き返らないし」

「……ゲームの中の人たちって、中々に大変な生活を送っているんだね」

「死ぬのは嫌だよな、痛そうだし……」

「死んでも速攻生き返らされて、戦わされるなんて嫌だねえ」

のんびりした旅で良かった。リウヒは笑い、はい終了。と片付けると風呂へ行った。

「リウヒさあ、今日妙にはしゃいでいたけど……」

「から元気だろう」

さっぱり短くなった髪を払いながらシギが答える。

それくらい分かる。妙に明るく振舞っても、たまに都を振り返っては痛々しいため息をついた。その目にうつすら涙さえ溜まっていた事も。

「から元気も元気。その内、元に戻るさ。それでもいつかは別れなきゃいけないんだから」

本当にそうだろうか。おれたちは、本当に現代に戻るんだろうか。でも、もう戻れなくてもいいやと思う気持ちもある。母親のことは心配だが、今は初めて好きになった女と一緒にいたい。帰っても帰なくても、リウヒが横にいればそれで幸せだ。

「ふーん」

「なんだよ、その目」

「ううん、何でも。ぼく、ちょっと外の風に当たってくるね」

カスガが部屋を出て行くと、シギも風呂に入ろうと腰を上げた。

部屋に戻ると案の定、リウヒは窓から都をみてぼんやりしている。

「風邪ひくぞ。そんな濡れた髪で」

横に立つと、遠くに密集した小さな灯りが見えた。冷たい風が緩やかにふいている。

「ねえ、シギ」

「ん？」

「現代で宮廷跡に行った時、その……キスしたよね」

「ああ……」

今更、なんなんだ。横のリウヒを見ると、視線は相変わらず外に向けたままだった。

「あの時、自分が自分じゃなかったような、誰かに体を乗っ取られ

たような気がしなかった」

「した。すごく切なくて、痛い声が自分の中から聞こえた」

「わたしも」

そのまま黙ってしまった。

「どうしたんだ、今頃になって」

「じゃあ、あれは、わたしじゃなかったってことだよな」

「まあ、そうなるんだろうな」

「なら、いいや」

部屋の中に戻る。昼間のから元気はどこへやら、ため息をついて髪をふいた。昼間さしていた、ハヅキの簪を小さく指でなぞる。

「お前、まさか……！」

ツカツカと歩くと、リウヒの両肩を掴んだ。黒い目が驚きに見開く。「あの男とキスしたんじゃないだろうな！」

リウヒが固まった。燃えるような嫉妬がシギの胸を支配する。苛立ちのあまり、肩をつかんだまま、細い体を壁に押し付けた。

「痛いよ、シギ……」

「したのか？　なあ、言えよ」

低い声がでた。自分でも驚くような醜い声だった。肩を掴んでいる手が、小刻みに震える。

「なんで、そんなことシギに言わなきゃいけないの」

喉が詰まった。お前が好きだからに決まっているだろう。それがどうしても言えない。

その代り、肩を掴んでいる手にますます力が入ってゆく。痛みの為かりウヒの顔が歪んだ。

「離して」

「嫌だ」

至近距離で二人は睨み合った。鼻と鼻がふれ合うくらい近い距離だった。

「あの男が好きなのか」

「だから、どうしてシギに言わなきゃいけないの。関係ないでしょ」

本当に鈍感な女だな、こいつは。苛立ちは頂点に達した。

「お前が……！」

その時、部屋の扉の外でカスガのくしゃみが聞こえた。シギが慌てて身を引き、手を離す。

「いやー。夜はやっぱり冷えるねー。明日はもっと寒く……どうしたの、二人とも」

漂う異様な空気を察知して、カスガが目を丸くした。

「別に」

「なんでもねえよ」

「君たちは、本当に仲がいいのか、悪いのか分からないねー」
呑気に言うカスガが、もう一度、派手にくしゃみをした。

外の世界 2

都の外に出てから一か月が経った。ゲンブに入った途端、今度はシギが風邪をひいて寝込み、リウヒはその看病をしていた。今はカスガだけが外にいつている。

現代でバイトに行っていた店や、賑やかな都会の繁華街の面影は全くなかった。ちょっと色々探索してみたい気もしたが、目の前ではシギがしんどそうにベッドで寝ている。

「馬鹿は風邪ひかないって嘘だったんだね」

「誰がば……！」

苦しそうに咳きこむ男の、背中を叩いてやる。子供をあやすように病気で寝込んだ時の心細さは、実体験で分かっている。特に、自分一人で誰もいない部屋で寝ているとこのまま死んでしまうんじゃないかと不安になるものだ。

勿論あの時のシギには、いまでもリウヒは怒っている。誰が好きだろうが、キスをしようが、シギには関係ないではないか。男に掴まれた肩は、翌日になっても痛かったし、あれから幾日たってもこの馬鹿は、謝らなかった。

でも、これとそれとは別だ。自分が寝込んだ時は看病してくれたし、病気の友達をほっておくことはできない。なんたってチームカスガだもんね。リウヒは小さく笑った。

「水、飲む？」

「飲む」

水差しからコップに注いで、上半身を起してやる。ものすごい汗をかいていて、寝巻きが濡れていた。後で着替えさせよう。乾いた唇に、コップを付けると水をゆっくり流しいれる。シギの喉がなる。この男のきれいな喉仏がリウヒは好きだった。つい、いつも見とれてしまう。

「たくさん汗かいて、早く治してね」

「ああ」

寝かせると、水に浸した布で汗を拭ってやった。

しばらくベッドに腰かけていたが、昼になってリウヒの腹が鳴った。
「シギ、ちよつとご飯たべてくるから、待ってて」

立ち上がるうとすると、手を取られた。引き寄せられてバランスを崩し、男の胸元に倒れこんでしまった。

「ちよ、ちよつと……」

「行くな」

そのまま抱きつくように体に手が回る。

「行かないでくれ」

思わず顔を覗き込むと、縋るような目で見つめられた。胸がドキドキする。男の人って基本的に、甘えたで淋しがり屋なんだろうか。こんなシギを見たのは初めてだ。母性本能がキュムツとくすぐられた。

「すぐ戻るから。シギのご飯も持ってくるから。ね？」

抱きつかれた状態で、優しく髪を撫でると、しびしびという感じで腕が緩まった。

階下に行つて、猛スピードで昼飯をたிரげ、お粥と薬を持って部屋に戻る。

ベッドのヘリにかけると、再びシギの上半身を起こさせ、粥を一匙掬って口元に運んだ。

「あつ……」

「ああ、ごめん。熱かったね」

息を何度も吹き掛けて、冷ましてから食わせる。鳥のヒナに餌をやっているみたいだな、これ。いつもはこうるさい男が大人しく、さすがままになっっているのも、野良猫に懐かれたような気分だ。なんだか可愛い。

粥が空になると、液体の薬を飲ませた。喉仏が動く。うつかり凝視してしまい、シギがむせた。

「ごめん、ごめん！ 大丈夫？」

慌てて背中に手を回して、片手に腕、もう片手で撫でさする。抱き締める形になった。ところがシギは、そのまま甘えたようにリウヒにもたれ掛かる。腰に手が回り大いに焦った。

ど……どうしよう……。この状態。

誰かに助けを求めるように辺りを見渡したが、当たり前なことに誰もいない。

窓の外で、子供たちが声を上げて走って行く。ふと意識が飛んだ。キキたち、元気かな。またあの庭で団子になって本を読んでいるのかな。ハヅキも……。

「なにを考えてんだ」

「えっ……？」

下からくぐもった声がした。掠れていて若干低い。腰に回っている手に力が入った。思わず体が弓ぞりになる。

「なにを考えている」

「し、シギは意外と甘えただなんて思ってた……！」

驚いたように、シギが身を離れた。病人とは思えない素早さだった。「えっ？ あ、わたし、なんか変な事いった？」

なぜか冷汗が、滝のように背中を流れる。目の前の男は、マジマジと自分を見つめている。

「そうだよな、おれは病人なんだし」

クスクスと笑いながら、再びリウヒにもたれ掛かる。両手も背中に回った。

「いやいやいやいや、ちょっとー？」

「甘えさせてくれるんだろう」

「こらこらこらこら、薬がまだ残っているんだって……！」

「不味いからいらねえ」

「飲みなさい！ そんなんじやいつまでたっても治らないよ！」

「別に治らなくていい」

「こんの……！」

馬鹿者！リウヒの拳がシギの頭に落ちた。ゴンと音がした。

「痛てえな！ 病人に何をする！」

「さつさと飲んで、さつさと寝る！ 病人は大人しくしなさい！」
頭を掴んで、無理やり上を向かせ、薬を注ぎ入れた。ウゲツとシギがむせたが今度は全く構わなかった。腰に回っている手をほどくと、ベッドに押し込むように横たえる。

下に食器を下げに行き、部屋に戻るとシギが待ち構えていたようにリウヒを呼んだ。

「おれを一人にするな」

そんだけ元気があったら、もうほつといて大丈夫じゃないのと言え
ば、お前は病人を看病する優しさがないのかと拗ねる。優しさとい
うより、我儘なだけじゃないかと思っただが、仕方がない。つきあっ
てやることにした。

「あのさ」

「ん？」

「本当にこの体勢が落ち着くの？」

「うん」

リウヒは枕の上に座り込み、膝の上に男の頭が乗っている。なんと
なくオレンジ色の頭を梳くと、シギが気持ちよさそうに身じろぎし
た。本当に猫みたい。その内、小さな寝息が聞こえて下を見ると、
安心したような顔で寝ていた。

居間でカガミとかあさんの声が聞こえる。リウヒはそつと壁に身を
寄せると、聞き耳を立てた。

「じゃあ、トモキくんはゲンプの町にいるってことだね」

「……さんも、確証はないっていつているのだけど……。見かけた
というだけだし、トモキかどうかも……」

「ぼくがいつてみるよ。王女さんはここにいた方がいいな」

「でも、あの子だとしたら、なぜそんな所にいるのかしら……」

心臓が止まるかと思った。今すぐその町に走って行って、トモキを捕まえて文句をいいたい。一でも十でも百でも、次から次へと怒りの言葉は出てくる。

ところがカガミは一人で行こうとしている。冗談じゃない。

トモキへの腹ただしさは、もう限界だった。ここで残されて待つているよりも、外に出て探しに行った方がましだ。

カガミは薪割りをしに裏へ回ったらしい。外に出て声をかけた。

「王女さん。どうしたの」

「なあ、カガミ。どうしてカガミはわたしと一緒にここにいるんだ？ 心配している家族はいないのか」

丸いオヤジは一瞬詰まった。

「トモキくんは、王女さんをよろしくお願いしますって言われたからね。それにぼくに家族は……息子が一人いるけど、もうりっぱな大人だし、心配いらないよ」

「そうか」

ところで、と声色を変えてにつこり笑うと、カガミもにつこりした。「そろそろ、ここを出ようか」

につこりしたままのカガミの顔が青くなって、仰天した顔になった。器用なオヤジだ。

「でも、トモキくんはここで待ってろっていったよね」

「戻ってこないじゃないか」

リウヒが鼻を鳴らす。

「ゲンブの町でトモキに似た男が見つかったのだろう？」

「な、なぜそれを」

「そして、カガミもそこに行くつもりなのだろう。冗談じゃない、わたしも一緒に行く」

「それこそ冗談じゃないよ、君はここに残りなさい」

「嫌だ。トモキに会って散々文句を言ってやる」

「ゲンブの人が彼だって確証は、全然ないんだよ」

それでも、ここでやきもきして待つよりマシだ。それにガンと言

続ければカガミが折れることをリウヒは知っている。結局、一緒に
ゲンブへ行くことになって内心ほっとした瞬間、木陰から赤毛の少
女が飛び出してきた。

「あたしもついて行く！」

なんで？ 驚愕の余り、リウヒは凍りつき、カガミはひっくり返
ってしまった。

次の村に行く道を歩きながら、ふと後ろを振り返った。町が遠くに
見える。

一千年後の、あの街でおれはバイトをしていたんだ。なんだか奇妙
な感じだな。

当たり前だが繁華街の面影は全くなく、ほのぼのとした雰囲気が漂
っていた。

「ゲンブじゃ全然働かなかったもの。次の所はがんばるよー」

「都会のゲンブも、この時代は呑気な所だったんだねー」

「北のゲンブ、南のスザク。スザクはこの時代も賑やかだったんだ
ろうな。ちっちゃい時さあ、あそこのモールでカスガと迷子になっ
たよねー」

「そうそう、二人でギャンギャン泣いてさ。でも、あれはリウヒが
……」

前に行く二人のんびりした会話と、笑い声が聞こえた。藍色の髪が
揺れている。

久方ぶりに風邪をひいて寝込んだ時、リウヒは献身的に面倒をみて
くれた。だからぞんぶんに甘えた。異常なほど甘えた。向こうが仕
事をせずにつきつきりでいた事をいいことに、ほとんど離さなかつ
た。本人は、なんだかんだ言いつつも、我儘を聞いてくれた。カス
ガも「ぼく、ここにいていいのかな」と呆れながらも笑っていた。
トロトロとした眠りから目を覚ますと、リウヒは対外、椅子に座っ

て本を読んでいた。

昼間の静かな部屋の中、本に目を落としている姿はそこだけ違う空気が流れているようで、とても美しく見えた。時々、ページをめくる音がする。

窓の外からは、人々の生活の音が遠く微かに聞こえていた。

子供たちのはしゃぎ走り去る音、おばさん連中の井戸端会議、物売りの声。

このうらかな優しい時間帯が、シギは好きだった。愛していたと
いっていい。

まるでスノードームに閉じ込められたような美しい時間。

リウヒの名を呼ぶと、本から顔を上げてこちらを見る。ゆっくり微笑んで、近寄ってくる女の頬に手をかけると「どうしたの」と柔らかい声を出した。

夜はシギが寝るまで、横に付いていてくれた。

しかし、リウヒの意識が時たま遠くへ行くことに気付く。シギの傍にしようが、本を読んでいるときだろうが。あの少年を思い出しているのだと、すぐに分かった。

自分を見てほしくて余計に甘えると、クスクス笑って受け入れてくれた。

そうだ、あの少年はもうはるか遠くの都にいる。リウヒの横にいるのはこのおれだ。

風邪は一週間ほどで引いたが、喉が痛い、体がだるいの、不調を大げさに訴えて、しばらくはベッドから出なかった。

「もう、熱は下がったんだし、自分で食べられるでしょう」

小さく笑いながら、昼食を箸で口元まで運んでくれる。

「まだしんどい。食べ終わったら、体拭いてくれないか」

「いいよ。でも全部たべなね」

身体を拭いてもらう事も嬉しかった。上衣を脱いで、濡れた布が肌の上を拭ってゆかれるのは気持ち良かったし、初なりウヒが恥ずかしそうに顔を赤らめるのを見るのも気に入っていた。

「シギ」

晴天の下、おれの名を呼んでいとしい女がこちらに向かってくる。風が緩やかに藍色の髪や自分のオレンジの髪を揺らす。前方では友人が微笑みながらこちらを見ている。

シギは幸せを感じて、笑みを漏らした。

ゲンプの町は大分小さくなっている。

ゲンプにトモキはいなかった。

金がどうのこうのと相談しているカガミとキャラに、ずっと持っていた宝珠を見せたら、二人は息を呑んで目を見開いた。

「よくこれだけのものを持ち出せたね」

「うん。武器の代わりになるかなと思って」

あの老人がまた寢室にきたら、これで殴ろうとずっと枕の下に隠していたものだった。

カガミとキャラは、何故か同時に絶句し、それからため息をついた。そして同行者が二人増えた。宮廷の踊り子だったマイムと、左將軍だったカグラ。二人は知り合いらしく、お互いを牽制している雰囲気だった。宿の一室でリウヒに礼をし、顔を上げたカグラは自分を見て微笑み、片目をつむった。

ゴミでも入ったのだろうか。

その後、カガミと話合った結果、一緒に旅をすることになったという。まあ、人数が多い方がいいのかもしれない。わずらわしいと思っただのも事実だが。

「あーあ。トモキさん、どこにいつちゃったのかなあ」

隣でリウヒと同じく畑を耕していたキャラがため息をつく。

カガミに「働かざる者食うべからず」と言われて色々な仕事をこなすようになった。ただ、大人組と子供組では見えない壁があり、リウヒはほとんどキャラと仕事をする。苦手な赤毛の少女と共に。向

こつも自分を嫌っている。理由は分からない。

「どこに行ったか分からないから、探しているのだろう」

「そんなこと分かってるわよっ！」

一々がこの調子だ。リウヒは小さなため息をつく。早く帰りたい。トモキと追いかけてこをした、懐かしい東宮に。みんな、無事なのだろうか。

宿に戻り湯を浴びて、部屋に入るとマイムが窓の外を見ていた。ヘリに腰掛け、腕を組んで凭れている様子はまるで絵のように様になっている。

「なあ、マイム」

「なあに」

目線を逸らさずに返事をかえされた。

「宮廷一の踊り子を知っているか」

初めてこちらを向いた。なあぜ？ と微笑んで首をかしげる美女に、リウヒもつられて首をかしげる。トモキの恋人がその人らしい、よく密会しているそうだ。恋煩いというものにもかかっていた……。リウヒの説明を聞いているマイムの顔がだんだん歪んできた。

「だから、その女がトモキを誑かして……どうした、具合でも悪いのか！」

マイムは苦しそうに、窓の棧に手をかけてうずくまって震えている。

「すぐに医師を……！」

「違うの、違うの。大丈夫」

ああ、おつかしいと目に涙をためて笑う女に、リウヒはぽかんとした。

「小さな王女さま」

目じりの涙をぬぐいながらおかしそうにマイムは話す。

「確かにその女はトモキと二人で会っていたわ。でも内容は、ほとんどあなたのことだったのよ。トモキは、それはもう嬉しそうに、楽しそうに話してくれた。本当に王女を大切に思っているのだから、てうらやましくなっただわ」

「えっ……」

「やきもちをやいていたのね、可愛いらしい」

クツクツとまだ笑う元宮廷一の踊り子は、愛おしげにリウヒを見た。顔が赤くなった。

「いや、その……すまなかった」

「あやまることはないのよ。さ、髪の毛を乾かしてもう寝なさいな。あたしはタヌキとキツネの相手をしてくるわ」

笑顔を一つ残して、マイムは部屋を出て行った。ぽつんと取り残されたリウヒは、窓べに立つ。遠くに見える都の灯りを見ながら、早くトモキに会いたいと切実に願った。大好きで大切ないちちゃんに。

外の世界 3

道の真ん中でシギが大きな声で宣言した。

「いいか、よく聞け」

リウヒとカスガは、うるんな目でオレンジ頭の男を睨みつけた。

「ここをキャンプ地とする」

同時に、二人の荷物がシギめがけて投げつけられる。

「キャンプ地ならテントを出せつての！」

「だからぼくは、もつと早く出ようつて言っただんだ！」

「ごめんつて！ おれが、おれが悪かった！」

村から町へ、町から村へ転々としている内に、旅慣れてきたチームカスガ。だが、その油断がいけなかったのか、道に迷って野宿をする羽目になってしまった。目指す町は、遠くに小さな小さな灯りが心もとなく光っているだけだ。

「シギが、ちゃんとナビしないから悪い！」

「お前がまずは飯だつていつて時間をくつたのもあるだろう！」

「喧嘩している場合じゃないよ、もう」

ため息まじりのカスガの声に、毎度のことながらリウヒとシギが睨みあう。

幸いな事に、気候は初夏だった。少し肌寒いが冬よりマシだ。それにしても、お風呂に入りたいとリウヒは思う。古代に来てから一年近く経つ。ノーパン、ノーブラも慣れて平気になってしまった。人間の適応能力って恐ろしい。

道横の林に入って適当な場所を見つけたチームカスガは、火を焚き取り囲むように座った。

「わたし、野宿って初めて」

「おれも」

「ぼくも」

慎重しく燃える火を見ながら、ぼつぼつと話している内に、誰から

ともなく眠りに落ちていった。

ふと眠りから目を覚ますと、リウヒがいなかった。カスガは目の前で静かな寝息を立てている。薪の燃える小さな音が聞こえるだけで、辺りは静寂に包まれていた。

身をおこして見渡しても人の気配はしない。焦りと緊張が押し寄せてきた。

もしかして、攫われたのか。それとも拉致されたのか。心臓の音がうるさい。ああ、自分がちゃんと道を確認していれば！

月明かりの中、林の奥に目を凝らすと、ぽっかりと開けている場所があった。立ち上がって歩き出す。木々が円形状に開いていて、月明かりが注がれているその場所は、ひどく幻想的に見えた。円形の中央ぐらゐまで歩いた時、なにか柔らかいものを踏んだ。

「痛い」

「お前……！」

なにやってんだよ！シギの荒げた声は、芝の上に寝転がっているリウヒに向かって発せられた。

「月見」

視線は動かずに、返事をする。上を見上げると宝石をぶちまけたような夜空が広がっていた。左端に巨大な月が引っかかっている。

「すげえ……」

シギも、リウヒにならい寝っ転がる。しばらく二人は、そのまま空を見上げていた。横を見ると、自分の手の近くに白い手がある。伸ばして絡めせると、小さな手は一瞬戸惑ったが応ずるように絡まってきた。

静かな空間に、リウヒの低い湿った声がかすかに響いた。

満天の空に浮かぶは十五夜とただ美しい君の顔

「なにそれ」

「歌の一節」

「歌って」

満天の空に浮かぶは十五夜とただ美しい君の顔

手を伸ばして掴もうとはしてみても

夜空の彼方に君は遠く離れてしまう

伝えたくて堪らなかった一言は

なぜか伝えられずに

ぼくの口から紡がれる言の葉は

風に流されはらはらと散って行った

もどかしさだけが先行するけれど

それでもいつかは知ってほしい

この小さな胸の淋しい切なさを

この恋い焦がれる悲しい痛みを

君の耳に届くようにいつまでもここで歌うから

星と十五夜と共に聞いてほしい

頼りないような細い声が、静寂の中をゆらゆらと漂い、まるで星空に吸い込まれるように儚く消えてゆく。

シギは手を繋いだまま、体を一回転させると、リウヒの顔を覗きこんだ。濡れたような黒い瞳が自分を見つめている。

「お前の声が好きだ」

月明かりを浴びて、芝の上に散った藍色の髪がぼんやりと輝いていた。

「お前の髪が好きだ」

しなやかなシギの手が伸びて、長い髪を梳く。そのままリウヒの頬を指の腹が這った。

「お前の顔が好きだ」

指はふつくらとした唇を撫でる。

「おれは」

ゆつくりと唇を落とした。小さく吸う。

「リウヒが大好きだ」

特に好き嫌いがあつた訳ではないが、楽な仕事は嬉しいものだ。

とある町で請け負つたのは店番だつた。その主人は昼間よそへ用事があるらしく、午前から夕方にかけて店に座っていればいいだけの話だつた。

「まあ、大抵ヒマだから。あと昼餉は台所にある物を適当にたべておくれ。君ともう一人、お願いしている子がいるから仲良くしてあげてね」

奥には、橙色の頭をした痩せぎすの男が座っていた。なぜかリウヒを見てかたまっている。

カガミといい勝負の丸いオヤジは、じゃ、よろしくといつて出かけて行つた。

橙男と反対側の椅子に座る。ぼんやりと外を見ている内に、雨がポツポツとふつてきて、あつという間に辺り一面を濡らし始めた。道行く人々が列を乱された蟻のように逃げ纏う。

宮廷を出て、一年近くが経つた。相変わらずトモキの行方は知れない。早く会いたい焦燥感はある。なぜ、これだけ探しているのに、見つからないのだろうか。似ている男がいると噂を聞きつけても、ガセばかりだ。

それでもリウヒは外の世界に大分馴染んできたと思う。

苦手で仕方のなかつたキャラとは、お互い適度な距離を保って接している。マイムは基本的に自分に興味が無いし、なにより王女として見てくれない所がいい。カグラは何を考えているのか分からない男だが、マイムは「いい？あの男は天性の女たらしなの。だから、

何かいわれてもホイホイとついていっちゃだめよ。分かったわね」と諭した。

カガミは相変わらずだ。しかし、大人たちは、リウヒとキャラを子供として扱い、夕餉がすむと二階の部屋へと毎回追いやった。

夜更けは、子供の知らない素敵な別世界が広がっているように思えた。

一度、キャラと共同線を張って、部屋からこっそりと出たことがある。下ではカガミが、知らない旅人らしき男と楽しそうに飲んでいた。宿の外に出ると裏でカグラとマイムが話していた。銀髪の男は壁に凭れて腕を組み、金髪の女はすぐその横で向かい合うように、男に何かを囁やかれていた。

あまりにも親密な空気に、少女二人は凍りつきそれから慌てた。見られている事に気が付いていないカグラとマイムは、至近距離で見つめあっている。その距離はゆっくりと狭まっていき、男と女は目を閉じた。リウヒが固唾をのみ込んだ瞬間、キャラに襟首を引っ張られた。

「なにするんだ、キャラ！」

「しーっ！ これ以上見るのは野暮よ！ 母さんが言ってたもの、ヒトノコイジヲジャマスルモノハウマニケラレテシンジマエって」

「なんだそれ。呪文？」

「あたしだって知らないわよ！」

小声で言い合いをしながら、転げるように部屋に戻った。寝台に潜り込んで、蒲団をかぶっても動悸は治まらなかった。あの二人の醸し出していた雰囲気当てられたように、顔が赤くなる。

「リウヒ」

キャラの声がして、蒲団から顔を出すと、これまた赤い顔が真剣に自分を見ていた。

「見ていた事を、誰にもゆっちゃ駄目よ。外に出たことがばれちゃうからね」

コクコクと頷く。

「だけど……」

リウヒの寝台に寄りかかったキャラはうつとりと夢見るように言う。

「あたしもいつかあんなことをするのかなあ……」

わたしもそうなのだろうか。

殿下が恋をするお相手は誰なのでしょうね。シュウの声がする。

その時、階段を上る足音が聞こえて、藍色の頭はヤドカリのように蒲団に引つ込み、赤毛は慌てふためいて、自分の寝台に飛び込んだ。

「あら、やだ。あんたたち、まだおきていたのー。早く寝なさい」
返事をしながら蒲団から覗いたマイムの姿は、先ほどの濃い雰囲気は全くなく、リウヒは幻をみたのだろうかと思えた。早く首をかしげた。

雨音が強くなって現実に戻る。となりの男は、ずっと視線を自分に向けたままだ。なんだか気持ち悪い。

「わたしの顔に何かついてるのか」

不機嫌な声で聞くと、少し不思議な発音で返事がかえってきた。

「米粒」

振り向くと、男は己の口下を指す。慌てて口元に手をやると、なるほど米粒が一つ、ポロリと落ちた。

男はひっそりと笑うと、表に視線を向ける。リウヒも同じ方向に目を向けた。

雨はやむことなく降り続く。知らない男と二人、まるで雨の檻に閉じ込められているみたいだった。

「雨が続くね」

宿で朝ごはんを食べている時。リウヒとシギに声をかけると、返事が返ってこない。顔を上げるとリウヒはぼんやりと隣の男の食膳を見ていた。

「なんだよ。やらねえぞ」

「馬鹿」

なんでもない会話に、甘さが含まれている。カスガの全身が痒くなつた。ここ最近、二人の間に流れる密度は濃厚で、とてつもない疎外感を感じてしまう。いつからだろう、多分、あの野宿から。自分が寝ている間に何かあったのだろうか。

リウヒの視線を辿ると、そこにはシギがいる。シギの目線を辿ると、そこにはリウヒがいる。お互いが目線を合わせると、恥ずかしそうに逸らす。

まるで、思春期の男女のようだ。醸し出される甘酸っぱい空気に、カスガはなんだか体がムズムズするのだった。見ている方が照れてしまう。

二人に何かあったのかと聞いてみても、齒の奥に物が詰まつたような、要領のえない返事が返ってくるだけで、さっぱり分からない。これは、あれだな。付き合う前の一番楽しく嫌らしい期間。いつそ付き合つたり、結婚してしまつた方がすっきり爽やかになるのに、その前のモヤモヤした時期は密度が濃く甘い。実際、友人や後輩のそんな姿も見てきた。

大事な妹にも、ようやくと春が来たのか。現代から遠く離れたこの古代で。

宿の台所を借りて赤飯でも焚いてやろうか。小豆つてここにもあるのかな。

「まっげがついている」

シギの手が伸びて、リウヒの目の下に触れた。

「あ……」

幼馴染が顔を赤らめて男を見る。男もつられて顔を赤くした。見つめあつたまま固まつて動かない。

「ごちそうさまー」

ああ、こつちが恥ずかしくていたたまれない。本当にごちそうさまだよ、君たちには。絶叫したいような、大笑いしたいような気持ちを抑えてカスガは、椅子を立った。

反対側の椅子には、藍色の髪の少女が座っている。衣は粗末だが、きちんと躡けられているのだろう、浅く腰掛け、凜と背筋を伸ばしている。片や、自分は半分ずり落ちた格好で、片足を抱え込んでいる。

雨はやまない。ここ数日間、降りっぱなしだ。おかげで客も一人も来なかった。ずっと少女と二人、雨の中に閉じ込められている。二人でぼーっと椅子に座り、昼になると、台所のものを適当につまむ夕方になって、店の親父が帰ってきたら自分の宿に戻る毎日を送っている。

背もたれに頭を預けて、リウヒの事を考えた。満天の空の下、キスをしてからぎごちない。熱を孕みつつ、欲望さえ入り混じっている密な空気が流れるようになった。しかし、お互いそこから動かないカスガも居心地が悪そうにしている。

言わなければ良かったのだろうか。でも言わずにはいらなかった。ため息をついて天井を見上げた時。横から小さな腹の音が聞こえた。キュルルルと可愛く鳴いている。頭を巡らせると、少女が真っ赤な顔をして腹を押さえた。

「飯にしようか」

苦笑して立ち上がる。

台所にあったのは、冷めた汁物と櫃に入ったご飯だった。おれがこつちやるから、お前は飯を握ってくれと言うと、コクンと頷いた。中々に無口な子だ。この四日間、一言二言しか言葉を交わしていない。

そして、見れば見るほど、恋しい女にそっくりだった。藍色の長い髪も、白い肌も、黒い瞳も、ほっそりとした体も。若干幼く、背が低いこと、年不相当の落ち着いた雰囲気を除けば瓜二つとっている。この子はリウヒのご先祖かもしれないな。もしかしたら前世の姿だったりして。と小さく笑った。

いい感じで汁物が温まり、少女に目をやったシギは愕然とした。

「お前、なにやってんのお！」

「見れば分かるだろう、握り飯をつくっている」

「分かんねえよ！ これじゃ潰れた飯の塊だよ！」

失礼な、と少女は鼻を鳴らした。

「失礼なのはお前だ、お前！ こんな姿にしてしまつて、お米さまに申し訳ないと思わないのか！」

料理が下手くそな所までそっくりだよ！ こいつは！

「好きで不器用になった訳じゃない！ それに、お前お前連呼するな！ わたしにはリウヒという名前がちゃんとある！」

うおおい、名前まで一緒だよ！シギは、頭を抱えて天を仰いだ。が、そのままグリーンと少女に向き直る。

もしかして、この子、王女？ いやいや、まさか。伝説の王女は、絶世の美女だ。目の前の少女は、可愛いとはいえそこの村にもいるような普通の娘だ。リウヒという少女は、睨むようにシギを見つめていたが、再び腹を押さえた。今度はグーと低い音が聞こえた。

「リウヒは、今、何をしているんだ」

「仲間と旅をしている。中々に面白い。シギは？」

「おれも旅をしている。三人で」

可哀そうな飯を食いながら、それとなく聞き出してみたが、やはりカスガの話す王女に間違いなかった。王女とははっきり言わなかったが、すんでいた所で騒ぎがあつて、外に出た。今は少女一人と、オヤジ一人と、青年一人と、女一人が仲間にいる。ということとは、まだシラギとかいう男とトモキとは合流してないんだな。カスガの耳にタコがきたほど聞かされた話を照合しながら、王女の低く流れるような声に耳を傾ける。

「お前の話も聞かせてくれ」

昼を片付け終わり、自分の椅子に座つたりリウヒは、興味深そうな目でシギを見つめる。膝を抱え込んで、そこに顔をうずめてこちらを見ている様子は、大層可愛らしかった。

この小娘が、ティエンランの歴史上でもっとも有名な人物とは思えない。だけど、おれは今、その王女と話している。カスガが付け回したがる気持ちだが、少し分かる気がした。

「ジンとはどんな国なんだ」

シギは戸惑った。まさか遙か時空のはてからやってきましたなんて言えない。しかも、ジン国に対して微かな嫌悪感もある。ティエンランを滅ぼした大国への。

「便利で、物や人が溢れていて……」

口をでるのは、やはり現代のことになってしまう。

「いいところじゃないか。そこに住む人は幸せなのだろうな」

いいところなのだろうか。幸せなのだろうか。ならばなぜ毎日、痛々しい事件は起こり、それをテレビで見ながらおれは他人事のように、家を出る支度をするのだろうか。

ぼんやりと思いながらシギの口は、別の言葉を紡いでいたらしい。

「わたしは恋というものをしたことがないから分からないが」

年頃の娘らしく、恋愛話になると顔つきが変わった。っておれは何を話したんだー！ この小娘に！

「シギに想われているその人が、少しうらやましい」

クスクスと笑う少女に、シギも強ばった笑顔を返した。頭の中はパニックだった。ヤバいことってないよね、おれ。大丈夫だよ、おれ。

「わたしもいつか、そんな想いを抱くようになるのだろうか」

小さな王女はうつとりと彼方を見る。

「なるよ」

シギは知っている。目の前でちょこんと座っている少女がこれから辿る運命を。その過程で生まれて消えた愛も。

名も無き海賊の青年との別れ、年の離れた黒將軍との死別。

そして、お前は立派にその人生を生き抜いたんだよ。

「必ずなる」

痛烈な痛みを伴って。とは言えなかった。

リウヒはきょとんとシギを見ていたが、そうか、と笑った。その笑顔を胸が引き攣れた。

外の世界 4

シギの声に、リウヒとカスガは、弾かれたように顔を上げた。

「おれ、王女とバイトしていた……」

宿の一室で呆然としたように言う。予想どおりカスガは闘牛の如くシギに詰めより、リウヒは慌てて幼馴染に飛びついた。

「どうして、どうして、君たちだけ……！ ずるい！ ずるいよう！」

鼻水まで垂らして泣いている。

「おれだって、たまたま一緒になっただけで……やめろ、カスガ！ おれを殺す気か！ おい、リウヒ！ 助ける！」

「落ち着いて、ね？ 落ち着いて！」

シギの襟首を掴んで前後左右に振り回したカスガは、ベッドに飛び込んでオイオイと嘆いた。

「大丈夫？」

「マジで殺されるところだった……」

むせるシギの背中をさすってやると、こちらをじつと見る。

「やっぱりそっくりだ」

「なにが」

「お前と王女」

まさか、だって、王女は超人なんですよ。それが以外とそうでもなくて、普通の娘だった。そこらにいるような、本当に普通の子だったんだ。最初はおれも、疑っていたけどその子の話を聞いて……いや、絶対間違いないって。

「でも、なんかほっとけないっていうか、かまってやりたくなくなるよな子だった」

思わずいらつとしてしまった。

「ちっちゃくってさ、男の保護欲をくすぐるみたい……。あつ！ あくまで客観的に見てだぞ！」

リウヒの冷たい目付きにシギが慌てた。

「へーえ」

二人のやり取りを、カスガは布団をかぶってじっと聞いていた。

「じゃあ、確かめないとね」

嬉しそうに言う。リウヒは呆れた。過去に関わるな、ややこしくなるからと言ったのは、この幼馴染ではないか。

「遠くからそつと見るだけならいいだろう」

ため息をついたが、自分も興味はある。己にそっくりな伝説の王女を見てみたい気持ちがあふくむくと湧いてきた。

「わたしも行く」

翌日。リウヒとカスガは、無理を言っただけ仕事を休み、シギのバイト先に押し掛けた。雨が幸いして、笠を外さずに店内に入る。商品を見る振りをしつつ、王女を観察した。シギが「お前ら、やり過ぎ！」青い顔して、パクパクしていたが、勿論無視した。

シギの反対側に、ちょこなんと座っている少女は、本当に自分そっくりだった。美人でもなかったし、普通の平凡な顔だった。よくいえば、姿勢が正しく品があると言えばあるくらいだった。

今までの、わたしのコンプレックスはなんなんだろう。思わず息を漏らしてしまう。伝説の、絶世の美女と同じ名前で、散々苛められてきた。その王女に言いようのない嫌悪感を抱いてきた。

この子だって普通の子じゃん。笑いたくなる。

カスガは食い入るように見ている。肩を小突いて注意してもなんの反応もなかった。

と、少女が動いて、シギに何か耳打ちをした。

その仕草に、猛烈な嫉妬心が沸いた。やめて。わたしの目の前でそんな、仲良くしないで。

ところが、シギも少女に囁き返して、二人でクツクツと笑う。楽しそうに。

嫉妬心が大きなウロで引つ掻きまわされたようだった。馬鹿。あの

馬鹿。

わたしのことを好きだといったくせに。なんでそんな子とそんな楽しそうに。

大したことじゃないのは分かっている。でも、あの馬鹿に平手打ちを喰らわせたいくらい、腸が煮えくりかえった。

「先に帰るね」

小さく言って店を出た。カスガの声が聞こえたが、無視した。雨は激しく降り注いでいる。笠に当たる音がうつとおしくて、勢いよく脱いだ。水滴が髪から顔へ伝い滴り落ちてゆく。裾がぬれて重くなり、足が絡まりそうになった。それでもリウヒは宿を目指して黙々と歩く。

目から涙が溢れて止まらないことにも気付かずに。

「気づけば結構この町にもいたんだねえ。そろそろ次へ行こうか」
カガミがのんびりという。あの橙頭とお別れかと思うと、無償に悲しくなったが、子供のリウヒに決定権はなかった。

「そうか」

明日からここにはこれられないというと、シギはひっそりと笑った。
この店番は、本当に楽な仕事だった。来た客はたった一組で、不思議な二人連れだった。

「初めての客だな」

こっそりシギに言っと、

「何も買わねえよ」

二人でクスクスと笑った。その言葉通り、売上は皆無だった。
客のうち、一人はさっさと帰ってしまったが、もう一人はなぜかこちらをじっと見つめていた。シギが舌打ちして「お客さーん。駄目だよ、商品を懐にいれようとしちゃあ」といって店の外につまみだし揉めていた。なんだ、ものを盗ろうとしていたのだ。

「もつとシギと、色々話したかったな」

「リウヒは最初、全然はなさなかったじゃねえか」

「それはお前もそうだろう」

それもそうだ、と二人で声をたてて笑う。いつものように、文句を言いながら昼餉を食べて、ダラダラと話しながら店番をして、宿に帰る時刻になった。

「宿まで送って行くよ」

リウヒも何となく離れがたかったので、ありがたく申し出を受けた。男は自分の歩幅に合わせてゆっくりと歩いてくれる。その優しさが嬉しかった。

わたしが、これから恋をするならば。

ふと思う。

優しい人がいい。この橙頭の男のように。

そしてわたしを王女と見ない人がいい。横で歩くこの男のように。

宿についた。

「送ってくれてありがとう。またいつか会えるといいな」

「リウヒも、これから大変だろうけど、がんばれよ。めげるんじゃねえぞ」

じゃあな、と手を上げて男は踵を返した。一度も振り返らずに遠ざかって行くその背中を、リウヒは痛いような、切ないような気持ちでいつまでも見送っていた。

ある日、ひよっこりシラギがやってきた。自分が王女だとキャラにばれて、てんやわんやになった。そしてキャラを丸めこむ力グラの口のうまさに、ああ、これが女たらしだというものかと納得した。シラギからリンたちの消息を聞いて、安堵の息を吐く。

「無事で良かった……。で、お前は何をしに来たんだ」

「ご同行するためにございます」

相変らず表情を変えずにいう男にそうか、と返した。ほっとした。すぐに宮に帰されると思っていた。

現金なものだな、わたしは。リウヒは小さく笑う。

幼いころは、トモキの家にどうしても帰りたかった。トモキの家に帰ると、今度は東宮に帰りたくなった。そして、外の世界を旅している今は、宮には帰りたくないと思う。このまま、みんなと一緒にいたい。広く美しいこの世界の中に。

初めて見る風景、果てしなく広がる空。仕事をして、仲間と話して、笑いあうこの場所に。

でも、いつかはあそこに帰らなければならない。宿の窓から見える遠くの宮廷は、未だ修復工事が行われている。

夕餉を食べ終わると、いつもの如く、リウヒとキャラは上に追いやりられようとした。

「嫌だ」

「いつものけ者にして」

二人して、卓にへばりつくと、カガミが苦笑した。

「そうかい、じゃあ仕方がないねえ。今日は特別だよ」

おお、いつから物分かりのいいオヤジになったのだ。喜んだ二人だったが、あまりにも難解な話に、すぐに飽いてしまった。シラギとカグラは相槌や質問をしながら、話を聞いているようだが、マイムはつまらなさそうに、ただ酒を飲んでいる。

ちらりとキャラを見ると、赤毛の少女も頷いた。そして眠くなったと言って、上に上がったのだった。

「どうしてトモキさんは見つからなくて、おっさんが来るのよ」

キャラは膨れ顔でブツブツ愚痴っている。それを聞きながら、リウヒは違う事を考えていた。シギは元気だろうか。想い人とうまくいっているのだろうか。

別れてからまだ数日しか経ってないのに、とても懐かしく感じる。あの人に想われている女はきっと幸せなんだろうな、とすらやましく思った。

第六章 チーム解散 1

二階から男女の言い争う声が聞こえる。シギとリウヒのものだ。

カスガは朝ごはんを食べながら、深いため息をついた。周りの宿泊客も、目を丸くして上を見上げる。

王女を見物に行ってから、二人の空気が一転し、険悪になった。言葉や目線一つにも甘さはなく、とげとげしさと微量の切なさが入められている。それはどんどん膨らんでゆき、ついに暴発したのだらう。

介入するのは野暮だ。本人たちに任せようと、見て見ぬ振りをするものの、険悪な空気はカスガを憂鬱にさせる。「王女」の言葉も禁句になった。その一言で空気は険を孕むからである。おかげで、「リウヒと王女がそっくりだ」という話題もちだせなくなってしまった。

まあ爆発してしまった方が、いつそすっきりするのもかもーと食器をまとめていると、リウヒが降りてきた。なぜか荷物を持っていて、目がすわっている。

「隊長」

目の前できれいな敬礼をした。

「リウヒは只今から、チームカスガを脱退します。これからは一人で行動するのでよろしく。今までありがとう。また、スザクでお会いしましょう」

一気に言うと、いきなりカスガの胸倉を掴んで引き寄せた。あつけにとられる間もなく、キスをされた。周りからどよめき上がる。作ったような笑顔を残すと、リウヒはさっさと宿から出て行ってしまった。

「えっ……？」

なに、今の。慌てて外に出ても幼馴染の姿は無かった。二階の部屋に行くと、シギがいら立ったようにベッドを蹴りつけている。

「ねえ、なにがあつたの？リウヒが出て行ってしまったんだけど……」

「知らねえよ。勝手にやらしとけば？あんな馬鹿女」

「いやいやいや、今からこの宿を発つんだろう。早く探さないと」

「ほつとけ。しばらく一人で、旅をするんだつてよ」

そんな。カスガは叫びだしそうになった。あり得ない。リウヒはいつだってぼくを頼りにし、横にいた。

「……リウヒに何を言つた？」

シギの両肩を掴んで顔を覗き込むと、不貞腐れたように横を向いた。
「あいつが悪いんだ」

横を向いたまま、ぼそりと言う。

「王女と……仲良くしてつて怒りだすから……。自分だつてほかの男と仲良くしていたじゃねえかっていつたら、シギには分からないとかいいだして。なんだよ、王女とおれは何もしてねえだろう。なんでおれがそんな責められなきゃいけないんだよ……」

「馬鹿じゃない。君たち、馬鹿じゃない」

呆れた声が出た。

「付き合つてもいないのに、喧嘩別れしてどうするんだよ。しかもお互い嫉妬してさ、王女絡みでさ」

イライラとしたように机をたたきながら言つと、シギも叩きながら返してきた。

「仕掛けてきたのはあつちだぞ。おれは素直にあいつに好きだと言つた。リウヒは何も言わずに、一著前に嫉妬だけしてネチネチ言う。卑怯だと思わないか」

カスガはため息をついて、机に突つ伏す。この馬鹿者たちが。

「いいよ、もう。リウヒは……その内帰ってくるだろう。今までの経験上」

怒つて拗ねて、出てゆく。そしてカスガがほつておくと、「なんで追いかけてこないの」と顔を赤くして戻ってくる。いつものパターンだ。あの子はいつも自分に甘えていた。きっとこれからもそうだ

ろっ。

「機嫌が直ったら帰ってくるよ。狭い国なんだし、海の外に出るわけでもないし、すぐ見つけてくれるだろう」

シギはふくれっ面でしばらく机を叩いていたが、行こうか、と腰を上げた。

シギの馬鹿。大馬鹿。エロ河童。スケベ大臣。ヒヨコ頭。三白眼。えーと、それから……。

リウヒは思いつく限りの馬力雑言を思い浮かべながら、ブリブリと湯気をたてて歩いている。今朝がた経った村は小さく丘の向こうに見えていた。遠くの道をのんびりロバを引いた男が歩いている。

少しだけ帰りたい気持ちの沸いた。シギはともかくカスガから離れるなんて、初めてのことだ。とてつもなく心許ない。いや。いや。振りきるように頭を振って、再び歩き出す。

あの馬鹿とは顔も合わせたくない。リウヒは鼻を鳴らした。

カスガと一緒に、シギのバイト先に押し掛けてから、つい不貞腐れた態度をとってしまうようになった。

「だってシギは王女と仲良しなもの」

「わたしたちと別れて、あちらに合流したら？」

なにを言ってるんだわたしは！ 内心うろたえるものの、口から出てくる言葉は、醜く歪んでいた。それにシギも敏感に反応する。

「お前だってハヅキと仲良しじゃねえか」

「おれたちと別れて、都に行ったら？ 会いたいんだろ、あいつに」
グサグサとその言葉が槍のように突きささる。泣きたいほど痛かった。

何を期待していたんだろう、わたしは。そんなことないよ、お前が好きなんだよと言ってほしかった。それくらいの乙女心、分かれよ。女たらしのくせに。

ハヅキとシギへの気持ちは、別物だと気が付いていた。

ハヅキには生まれて初めて、好きだと言われた。父とカスガ以外の男の人から、初めてプレゼントを貰った。堪らなく嬉しくて、しばらくはあの少年の事が頭から離れなかった。だけど、思い出すのはいつもキキたち、ちびっ子と一緒にだった。商家の美しい庭の片隅で、あの子供たちと笑っている姿。帯にはさんでいるハヅキの簪を取り出す。

でもシギは違った。

はつきりと意識したのは、看病した時だった。シギの頼る対象が、ただ自分一人に向かっていることに幸せを感じた。粥やご飯を食べさせているときの、無防備な顔にときめいた。

汗に濡れた体をふいているとき、恥ずかしながらもこの時間がずっとづけばいいのと思った。この裸の背中に、そっと頬をくっつけたいとも。想像して鼻血がでそうになったこともある。

わたしは、シギが好き。多分ずっと前から。

……いやいや、いや。あの馬鹿の事なぞ誰が。立ち止まって左右に頭を振る。

その時、腹が鳴った。太陽は天高く輝いている。

お昼ご飯をたらふく食べよう。それから今後の事を考えよう。

腹を押さえリウヒは、近くに見える村を目指した。

キラキラと光り輝く海面が目眩しい。キャラが歓声を上げて走ってゆく。

本当に世界は広い。宮廷の中が全てだと思っていた。あの小さな東宮の中が。

「この先にまた国があるんだな」

そして果てしない世界が広がっているのだろう。それはどこまで広がっているのだろうか。

「いつかお連れしますよ」

カグラが横に立った。その顔も遠く彼方を見ている。

「お前、いつもそんな事ばかりいつているのか」

シラギも横に立って呆れたような声を出した。

この二人は、いつの間にかこんなに仲良しになってしまったんだろう。リウヒは小さく笑った。合流した時はお互い無関心だった黒と白は、今や何かにつけて軽口を叩き合っている。昔、御前試合で圧倒的な剣術を見せてくれた二人。あの時の、獲物を狩るようなシラギの顔を、リウヒは今でもまざまざと思い出すことができる。

「では、みんなで行かないか」

につこり笑ってカグラを見ると

「黒將軍とカガミさんは置いて行きましようね」

と美しく微笑んだ。シラギが顔を顰めて文句を言う。つい、笑いだしてしまった。

キャラとマイムが黙って、丘の先端から遠くを眺めている。カガミは少し後ろで、みんなの姿をのんびりと見ていた。

もつと世界を見て回りたい。勿論トモキも一緒に。

この愉快的な仲間たちと共に。所詮夢なのは分かっているけれども。

カガミの声がして、みな、それぞれ踵を返して歩きはじめた。リウヒも数歩歩いて、ふと振り返った。海は相変わらず潮騒を歌いながら輝いている。つられてシラギも海を見た。

「いつか……」

黒髪の男は小さく呟いたが、照れたように口を閉じると、いこうかとリウヒを促した。

苛立つように、シギは小さな舌打ちをした。

「帰ってこねえじゃねえかよ」

カスガは痛々しいため息をついて、ベッドに突っ伏した。最近食欲

も元気もない。

リウヒが二人から離れて、大分経った。最初は腹立ちの余り、二度と帰ってくるなと思っていたシギも、樂觀視していたカスガも、焦燥感を抱く様になった。

「こんなこと、初めてなんだ……」

枕に顔をうずめながら、沈んだ声を出す。

「今まで必ずぼくの隣にいたのに……そこから離れようとしなかったのに……」

わたしがお嫁に行く時は、カスガもウエディングドレスを着て一緒にその人に嫁ぐんだよとまで言っていたのに。

目の前で、青白吐息でうめいている男を見ながらふとシギは思った。この二人は、生まれてからずっと一緒に育ったという。そして、お互いに凭れかかっていたのかもしれない。兄のような、妹のようなといえば、聞こえはいいが、それぞれ依存していたのだろ。カスガはリウヒに甘えられる事に、リウヒはカスガに甘えることに。じゃあ、おれはどうなるんだよ。

シギは片膝を抱えて、爪を噛んだ。

あの馬鹿女。当てつけのように出て行きやがって。腹立ちが収まると、今度は心配でたまらない。最近、税は緩やかに上昇してきて、比例するように国の治安も悪くなってきている。探しに行こうか。あのウルトラ天然馬鹿女を。

心当たりはある。都のあの少年の所だ。ハヅキの顔が出てきて苛立ちに更に煮えたぎった。

「でも、スザクで会おうって言っていたから、またぼくらと合流するつもりなんだよ。もしかしたらセイリユウケ原の戦に参戦する気かな……」

「それでもおれは探しに行くよ。こんなんじゃ、落ち着いて旅もしてられない」

カスガは胡坐をかいて何か考えていたが、顔を上げてシギを見た。

「ぼくは、別行動をとる。リウヒの事は心配だけど、それ以上に王

女たちについて行きたい」

「お前な……」

すたすたと目の前の古代マニアに近寄ると、そのベッドにどっかりと座る。

「いいか、よく聞け。その行動が、どれだけ危険が分かかってんだろうな。下手に見つかつてごめんなさいじゃ済まないんだぞ。つじつま合わせの尻拭いなんて、すごく大変なんだぞ。それで映画が一本できるくらいなんだぞ。付け回すのはお前の勝手だが、絶対にばれないようにしろよ」

「分かっているよ」

じゃあ、チームは一時解散だね。

王女が王に立つという噂を合図として、スザクの港に向かう事を約束し、二人は床についた。ひっくり返って両腕を頭の下に入れる。窓の外を見上げると薄っぺらの月が引かかっていた。

あの馬鹿女。

今度会ったら二度と離さねえ。

今のこの状況をどうしよう。リウヒは困り果てて、目の前で泣いているキャラを見た。泣いているくせに、猛烈に怒ってくる。

みんなに甘えているの、それが当然だと思っているんだろ、散々責められている内に、リウヒも腹が立ってきた。みんながわたしに親切なのは、わたしが王女だからだ。王家の血が入っているからわたし自身を見ている訳じゃない。そうじゃなかったのはトモキぐらいだ。そう言ったら、キャラは更に怒って、今度は殴ろうとしてきた。

「あんたなんか嫌い。大っ嫌い！」

訳が分からない。それでも体に触られるのは嫌だったので、振り下ろされる手を避けつつ逃げる。しばらく部屋で暴れていたが、階下

からドンドンと注意された。

「下々の者には触らせないってか。さすが王女さまよね」

「違う」

「なにがどう違うのよ。何か原因があるなら言いなさいよ。どうせないんだろうけど。　　そうよね、こんな下の者には言えないわよね。ずっと一緒にいて友達と思っていたのに」

友達と思っていたのに。

その言葉は、リウヒの心の深いところを突いた。初めて出来た友達を失いたくはない。目をつぶって、息を吸い込むと思い出すのも辛い過去を話し始めた。

「……昔、気が付いたら全然知らないところに連れて行かれた」

口が言葉を紡ぐたびに、頭が痛くなる。奥底に横たわっている気持ち悪い記憶が、鎌首をもたげるように浮上してきた。

闇闇。老人の顔。耳にこびりつく笑い声。

あの手、あの感覚、あのおぞましさ。

泣いても叫んでも助けは来ない。始めて知った絶望。

紡がれる言葉は段々早くなってくる。もう、自分が何を言っているのだからなくなってきた。頭が朦朧とし、体が冷えて仕方がない。

「ごめん」

キャラの声が聞こえたが、頭を上げることはできず、震えながら膝に頭を埋めていた。まるで自分を守るように。

「もう言わなくていいから。ごめんね」

戸惑ったような、ぼつねんとした頼りない声。静寂が漂った。しばらくしてから、押し殺した嗚咽が聞こえた。顔を上げるとキャラが泣きじゃくっている。

「なんでキャラが泣くんのだ」

「だって、そんなひどいことされていたなんて……あたし……知らない……」

その先は震えていて言葉にならない。リウヒは再び困ってしまった

ものの、なんだか心が温かくなった。この子は自分の為に泣いてくれている。

「……寝ようか」

ようやくと泣きやんだキャラが、恥ずかしそうに笑った。

「一緒に寝よう？　なんとなくそんな気分」

「うん」

リウヒが寝台の隅により、場所を開けるとキャラが潜り込んできた。二人で顔を見合せてえへへと照れたように笑う。

友達とはいいいものだな。触れることができないのが辛いけど。

先程の恐ろしい記憶はゆつくりと沈んでいき、代わりに温かく幸せな気持ち湧き上る。

藍色の髪と赤毛の髪は向かい合ってクスクス笑っていたが、その小さな寝息を立て始めた。

チーム解散 2

思わず大きなため息をつく、ゲンさんは困ったように頭を掻いた。ここに来たのなら、必ずゲンさんの宿に泊まると思っていたのだ。すいません、ちょっとはぐれちゃって、と頭を下げると、それは心配だね、と髭親父も顔を歪めた。

「この都の治安もだんだん、悪くなってきているし……それに」声をひそめた。人浚いも出没しているらしい。噂だけだね。

シギの顔から血の気が引いた。まさか。

「まあ、あのお嬢ちゃんなら大丈夫だよ」

根拠は無いだろうが、慰めようとしてくれている親切心が有り難かった。気は進まなかったが、大学にも行ってみることにした。もしかしてハヅキと一緒にいるかもしれない。ムカつくし腹ただしいがあの少年がどこに住んでいるのかは分からない。きっと大学の寮だろう。ならば、娘一人が潜り込むなど不可能だ。

しかし、シギの頭の中には、ステレオタイプな新婚夫婦像がポンと出てきた。フリフリエプロンをつけたリウヒが、帰宅したハヅキを出迎える。幸せそうな笑顔で。

おかえりなさい、あなた。ご飯になさる？ お風呂になさる？ それとも……。

いきなり壁に何度も頭を打ちつけ始めた奇っ怪な男に、道行く人は驚いて身を引いた。

いやいや、そんな事ねえ。多分。ジンジンと痛む額を無視して、シギは歩きはじめる。

まさか、二人で手に手を取って、逃避行……。夕暮れ時の港、船の汽笛、熱いキスをする二人。

突然、顔を覆って大声を上げた不審な男に、道行く人は目を剥いた。大学の受付らしきところで、ハヅキの所在を聞いた。担当したモグラそっくりの男は、額から血を流しているシギに怯え、一度奥に引

っ込んだ。

「その人は、少し前に大学を出られていますね」

書類を繰りながらモグラは言った。

「えっ？」

聞けば、おおよそ一か月ほど前に退学したという。金銭的な問題だそう。それからどこへ行ったのかは分からないとモグラは首を振った。念のため、二十くらいの藍色の髪の水がハヅキを訪ねてこなかったか聞いたが、再びモグラは首を振る。

「ほかあ、この仕事を十年以上しているが、妙齡の女性なんざ一人も来たことないね。みな着飾ったお婆はん連中さ」

ふっ、と横を向くその姿には、暗い斜がかかっていた。

礼を言つて外に出る。改めて大学内を見渡してみると、見事に男ばかりだった。みな、品の良い身なりをして、優雅に笑いさざめく様に歩いている。なんとなく居心地が悪くなって、大学を出た。

これからどこに探しに行こう。

道端で空を見上げ、途方に暮れるシギの頬を、緩やかな風が撫でた。

サワサワと吹く風が、髪を揺らした。ここからは、ティエンランの都と草原と片隅に海が見える。大学の教室の窓からも、同じ風景が見えたな。もつとごちゃごちゃしていたけど。リウヒは微笑むと、小さな家へと戻った。

「かあさん、胡瓜がたくさん出来ていたの。変に曲つたものばかりだけど」

台所にいるおばさんに声をかけると、柔らかい声が返ってきた。

「ありがとう、リウヒ。ここを手伝ってくれない？」

返事をしておばさんの横に立つ。

シシの村に来てどれくらい経つたのだろう。取りあえず北を目指していたリウヒは、宿を求めてこの村に立ち寄った。一千年後には、

リウヒたちが通っていた大学のある場所だ。夕食を催促する腹を押さえながら、村の中を歩いていたら、いきなり一人のおばさんに縋るように飛び付かれた。

どうして家を見捨てていくの、どうして一人なの、あの二人はどうしたの。……

驚愕の為、口を開いて何も言えないリウヒに、おばさんは現実に戻ったのだろう。

「ごめんなさいね、驚かせてしまって……。あの子よりも随分大人だし、違う人だわ……」

痛々しいその顔に心が痛んだ。自分の母となんとなく似ていたのもあったのかもしれない。

「わたし、ここで宿と仕事を探しているんです。もし、雑用などあったらお宅で働きますけど」

つい口を出してしまったその言葉に、おばさんの顔がパアツと明るくなった。その昔、リウヒが試験で満点を取った時のお母さんの顔と一緒にだった。

勧められるまま家に向かい、それからはおばさんの家に住み込みで働いている。

ユキノさんというその人は昔にご主人と死に別れ、二人の息子さんがいるそうだ。

息子さんたちは遠い所で暮らしていて、今はこの家には自分一人しかいないから、寂しいとも言っていた。

「長男は、そこに来てくれと言ってくれていたのだけど、なんか、ねえ……。主人の残したこの家を去るのも辛いし……」

息子の嫁と反りでも合わないのだろうか。古代でも現代でも、嫁姑問題は大変そうだな。シギは、どうだろう。母子家庭で母親を大事に……。いやいやいや、何を考えているわたしは！

なぜか、ユキノさんは「かあさん」と呼んでくれと言った。自分の名前がリウヒだったことにも大層驚いていた。

「不思議な偶然もあるものね」

リウヒの料理の腕は、ゲンさんのおかみさんの仕込みもあって、カスガ曰く「緊急避難レベルから警戒レベル」まで下がったが、それでもひどいらしい。ユキノさんが苦笑しながら教えてくれる。

本当に一人は寂しいらしく、とにかく饒舌だった。そういえば、一人暮らしのおばあちゃんがそうだったなと思いだした。ろくに孝行もしないうちに、亡くなってしまったおばあちゃん。長期休みに遊びにいくと、朝から晩までテレビは点けっぱなしで、リウヒがその部屋をでようとしても、おばあちゃんはずっとしゃべっていた。

それにここは、テレビもパソコンもない。本も貴重品で宿などに一、二冊あるだけ。時間はたつぷりあるというのに。

流れるようなユキノさんの話に耳を傾けていたリウヒだったが、ふと湯呑を回す手が止まった。

「……ハヅキも大学を出て、トモキの所にいったのかしら……それにしても、トモキとあの子は無事なのかしら……」

なぜ、あの少年がでてくるのだ。しかも、トモキは確か王女教育係……。あの子って……。

「あの、つかぬことを伺いますが」

喉が掠れて、慌ててお茶を飲んだ。

「ユキノさんの、息子さんの名前は？」

「かあさんって呼んで」

プツと頬を膨らますと、ユキノさんはお茶に口をつけた。

「トモキとハヅキよ」

湯呑を落としてしまった。二人は兄弟だったのか！ 全然似ていないではないか！

グルグル回転する頭の中で、ハヅキの声が蘇る。

君は、ぼくの妹に似ているんだ。名前まで一緒なんだ。

ああ、もしかしてそれは王女ではないか。カスガは、王女は幼い時にトモキ宅に預けられていたと言っていた。そして目の前で、不思議そうに自分を見ているこの人は、ハヅキたちのお母さん。でも、とここまで聞いていいんだろう。下手に聞いたら逆に疑われる……。

「どうしたの、リウヒ。お茶で酔ってしまったの」

「お茶で酔ってしまいました……」

まだ混乱したまま、こぼした茶を台拭きで拭きながら、リウヒは呆然と言った。

朝餉の為に階下に集まったみなにカガミがのんびりと言った。

「酒場でさあ、期間限定で朝餉をだしているんだって。結構な人気らしいよ。いってみないかい」

「わあい、今日の朝餉は贅沢だー」

「つましい贅沢ね」

「お代り自由だろうか」

「リウヒ、食べすぎるとカガミさんのようになるぞ」

笑いながら一行は酒場へ向かい、たらふく食した。その帰り道、リウヒの足がふと止まった。

宿の前で、男が一人、驚いたようにこちらを見てかたまっている。すぐに分かった、トモキだった。それでもリウヒは動けなかった。あんなに会いたかったにちゃんが目の前にいるのに、足がすぐんでいる。向こうも微動だにしない。

声を掛けたくても、何かが詰まっているように、喉から声が出ない。長い時間が経ったような気がした。そして、風が吹いて木々を揺らした音で呪縛が解けた。真っ直ぐにトモキに向かって駆けて行く。何も目に入らなかった。ただ、トモキの存在だけが全てだった。地を蹴って思い切り抱きつくと、トモキもしっかりと抱き返してくれた。

「待っててろって言っただろう」

トモキの声だ。間違いなくトモキだ。嬉しさが全身を駆け巡る。触られる恐怖は、失せて消滅してしまった。

「心配かけさせないでくれ、この馬鹿」

「馬鹿はお前だ」

腕の中でリウヒも言い返した。甘えるように顔を胸に擦りつけた。

「二度とわたしから離れるな」

もう、わたしを置いてどこかへ行くなんて許さない。返事はなかったが、背に回っていた手に力が入った。

思わずカスガは、ケータイをもつ手に汗をかいてしまった。ついでに涙まで出てきた。

王女とその兄的存在の感動の再会を、動画でとっていたのである。建物の蔭からこっそり。

完全にストーカーだった。リウヒとシギがいたら、呆れと非難の声を上げていただろう。

なにを言っているのかは分からなかったけど、見ているだけで、泣けてきた。そして、不思議な感じがした。

トモキは本当に、自分にそっくりだったのである。そして、王女はリウヒにそっくりだ。まるで、カスガとリウヒの再会シーンのようだ。ケータイの動画再生をしながら思う。

トモキがぼくの前世で、王女がリウヒの前世なら、一千年前もぼくらは同じ関係だったのかな。と小さく笑った。

……待てよ。先祖という線もある。だったらリウヒは王家の血を引いているのか！ そして、ぼくはティエンランの宰相だった男の末裔か！

でも、身内からそんな話、聞いたことがない。いやいや、現代に帰ったら、リウヒと自分の家系図を調べてみよう。そして実家の蔵を根こそぎ掘り起こしてみよう。

ああ、この時代に骨を埋めてもいいって思っていたけど、ものすごく帰りたくなってしまった。

壁に凭れて、ダラダラと汗をかいていたカスガは、猫の声で我に返

った。白い年老いた猫が、餌をねだるように、カスガの足に身を擦りつけている。

しゃがんで頭をなでてやると、お気に召さなかったらしく、一声鳴いて去ってしまった。

その夜。酒場で張っていたカスガの目に飛び込んできたのは、あの一行だった。少女二人が、物珍しそうにはしゃいでいて、それをマームが苦笑しながら注意している。他のみんなは笑いながら、注文をしたり、少女たちに酒をねだられていさめたりしていた。

そして、賑やかに酒を飲み始めた。オヤジがでたらめな歌を歌い、優男が手品を披露した。色っぽい女と、陰気な男は黙って笑いながら酒を飲んでおり、青年と少女たちはただ笑い転げていた。

いいな。その空気に当てられて、リウヒとシギが懐かしくなった。

酒場の中心で、騒がしく賑やかに楽しそうに飲んでいる七人は、そこだけが別の空間のように思えた。

でも、ぼくは知っている。あの七人の運命を。

ケラケラ笑っている、藍色の髪の少女がこれから辿る運命を。

それがつらく過酷であるということも。

あそこで、ひっそりと笑っている男と、赤ら顔で歌っているオヤジが死にゆく事も。

できれば、いまずぐあの席にいつて、それをぶちまけてしまいたいなにもかも全部。

そして運命を狂わせてしまいたい。

だけでもそうする事は出来ない。ぼくはただの傍観者だから。ストーリーカーじゃない、傍観者だ。歴史に干渉する事は許されない。

本で読んだ物語と今まで学んだ歴史が、リアルに感じられる。なんたつて目の前で本人たちが飲んでいるのだから。カスガは、痛々しいため息をついて、酒に口をつけた。

チーム解散 3

シラギがいきなり中腰になって、弾みで倒れた猪口から酒がこぼれた。一点を食い入るように凝視している。その視線を辿ってリウヒたちは驚いた。驚愕といつてもいい。

酒場の隅にいた集団の中に、兄がいた。赤茶けた髪と翡翠の瞳をもつ、消えたはずの兄さまが。

驚きの為、身動きできないでいるみなを尻目に、シラギはつかつかとそちらに向かうと、男たちと悶着をはじめた。マイム、カグラ、カガミが慌てたように仲裁に入る。

キャラが何も分からずに、トモキとリウヒに訳を聞いたが、二人とも何と説明したらいいか分からなかった。その内、話がついたらしい。兄さまと共に、ついてゆくことになった。

「あたし、先に宿に帰ってるね」

なぜか小さく悲しげに言う、そのままキャラは帰ってしまった。みなと共に兄の後を付いてゆきながら、リウヒは首をかしげる。どうして兄さまは、海賊などされているのだろう。

こぢんまりとした一軒家で、兄はその疑問に答えてくれた。

「ここがわたしの居場所だからだよ」

居場所。では、わたしの居場所とはどこだろう。シラギの陰を含んだ声とアナンの呑気な声を聞きながら、リウヒは考えた。

トモキの家か。この外の世界か。それともあの東宮か。巡る頭の中に、必ずいるのは、この愉快な仲間たちだった。

ああ、そうか。

みんながいるところが、わたしの居場所なんだ。外の世界だろうが、あの宮廷の中だろうが。

「では、力づくで連れ戻すだけです。あまりの我儘に反吐がでそう
だ」

聞いたことのない、シラギの低い声が聞こえた。声で殺せそうな迫

力だった。

「黒將軍はなんだか表情が豊かになったね」

対象的な、兄の呑気な声がする。

「わたしを脅そうが、連行しようが無駄だよ。可愛い部下たちが黙っちゃいないからね」

室内を異様な殺気が漂っている。

兄は王位に就くのを拒否している。となれば、残るは自分しかない。

でも、みんなは付いてきてくれるだろう。王女である自分についてわたしの居場所は、このみんながいるところだ。それが見知らぬ村であろうと、王座であろうと、どこでもいい。息を小さく吸って、リウヒは声を上げた。

「わたしが王に立ちます」

緊張は一気に解けた。視線が自分に集まる。思わず踏ん張り再び息を吸い込んだ。

「わたしが王族の義務を果たします。だから兄さまは今まで通りでいてください」

なんか、今までのバイトと違う、これ。シギはこっそりため息をついて顔を上げた。

扉を叩くと少女の声が応ずる。

「夕餉をお持ちいたしました」

「ありがとうございます。そこに置いてくださいな」

老女が椅子に座って、ゆったりと微笑んだ。若いころはさぞかし美人だったと思わせる、物腰柔らかな老女だった。ワカと呼ばれた娘が、シギから盆を受け取る。

「ども」

小さく頭を下げるにつこり笑って扉を閉めた。目の前で。

北の小さな町にたどり着いたシギはこの不況の中、中々高額なバイトにあり付いた。

住み込みで、老女の世話をすればいいという。その家に行くと見た事もない上品な家で、その主人である老女もこれまた品があった。名前は知らない。

ただし、直接世話をしているのはワカという可愛らしい少女で、シギは小間使いのように飯を作ったり、掃除をしたりの仕事をしている。

まあ、仕事があっただけでもラッキーだった。税はついに、桁違いに上がった。外は苦しみの声でいっぱいだ。人々の目付きも恐い。リウヒは大丈夫なんだろうか。恐ろしい目に合っていないだろうか。頭を巡るのは、その事ばかりだ。まさか人浚いにあつて、遠くの国に売られているとか、色町に……。悪いことばかり想像してしまう。そして、そうでないと言い切れないのが、つらかった。

しかし、探すにしても、旅をするにしても金がある。この仕事である程度の金を稼いで、それから探しに行くしかない。もどかしさを抱えつつ毎日は過ぎ去っていった。

「シギはいつも元気ないデスネ」

台所の机に突っ伏していたシギが、顔を上げると食器を下げに来たワカと目が合った。

「悩み多き年頃デス力？」

「そうだな。悩み事は多いよ」

大変デスネ、とにつこりすると、出て行ってしまった。あの娘は悩みごとなんてなさそうだな、とふとうらやましくなった。

ある日、老女に呼ばれた。ワカがお使いにいったまま帰ってこないという。

「あの子のことだから、大丈夫とは思うのだけど、迎えにいかねないかしら」

この情勢に、娘一人で外に出すなんて。呆れつつも辿るだろう道筋

を教えてもらい、外に出る。夏の風が吹いた。ここに来てから、もう二年近くも経つのか。年月というものは、えらく早く過ぎ去るものだ。そして、リウヒに堪らなく会いたくなった。

恋しいとはこういう気持ちなんだな。胸がキュウキュウと痛んで切ない。

目的の少女は家から出て、十分くらいで見つかった。が、道端で凍り付いたようにかたまっている。真っ青な顔をして。

「どうしたんだ」

その声に、びくりと肩を震わせると縋るような目で見つめられた。半泣きだった。

「あれが……」

少女が震える指で指す方向には、何もいなかった。シギの歩いてきた赤茶けた土道。否、いた。小さな、小さな雨蛙だった。つぶらな瞳でこちらを見上げている。

「お前……。もしかして蛙が怖いのか？」

「その、その単語をいわないでください！ いやー！」

絶叫するワカを尻目に、雨蛙をつまんで草むらに放ると、小さく鳴いて飛んで行った。

「あの、その、あの、……ありがとうございます」

律儀にぺこりと頭を下げる少女に、なんのこれしきと苦笑する。

「さ、帰ろっぜ。ジユズさまが心配している」

「はい」

しばらくワカは、歩きながら考えるように下を向いていたが、決心したように顔を上げた。

「お礼に、願い事を一つだけ叶えてあげマス」

シギの目が点になる。なにこいつ、魔法使い？ それともランプの精？

「願い事って……」

「あっ！ でもあたし、好きな人がいるので、そういうのはだめデス」

慌てたように付け足す。子供に欲情するほど飢えてないつつの。

「おれも好きなやつがいるんだよ」

ワカが弾かれたようにシギを見る。

「だけど、はぐれちゃって、どこにいるのか分かんねえんだ」

そいつを見つけてくれないかな。無事かどうかわかるだけでもいい。それだけが今のシギの、切実な願いだった。リウヒの特徴をフンフンと聞いた少女は眉を顰めた。

「分かりました、十日くだサイ。その人に伝言などはありますか？」
からかっているのか、こいつ。しかし、ワカの目は真剣だった。

「会いたいって」

空は茜色に染まっている。カラスが鳴きながら山の方へ飛んで行った。

「滅茶苦茶に会いたいって伝えてくれるか」

シギに会いたい。リウヒは粗末なベッドの上で、枕を抱えた。昔、ハヅキが使っていたベッドだった。

わたしは卑怯者だな。枕を抱く手に力を込める。何も言わなくても、自分の気持ちは伝わっていると思っていた。シギは、ちゃんと言葉に出して、大好きだと言ってくれた。でもわたしが口に出したのは、醜い嫉妬の言葉だけだった。

次に会ったら、絶対に好きだと言おう。あの時の態度を謝ろう。例え、許してもらえなくても。もう好きじゃないと思われていなくても。

税が跳ねあがって、ユキノさんの暮らしも随分つましくなった。トモキが宮廷に入った時から支払われていた金は、すべてハヅキの学費に回っていたそうだ。ところが、いきなりそれが止まった。ハヅキは大学にいたことができず、退学することになったと手紙が来た。「一度、母さんの様子を見ようと思ったのだけど、里心が付いてし

まうから諦めます。いろいろと心配かけて、ごめんね。本当にごめん。少し旅にでます。帰ってきたら、必ず母さんに会いに行くから、それまでお元気で。兄さんとリウヒによろしく」

「あの子ったら……」

その手紙を読みながら、ユキノさんは泣いた。リウヒも泣いた。

あの時、まっすぐ大学を訪ねればよかった。もしくはハヅキがここにすれば、会うことができたのに。

「都で……子守りの仕事をしていた時に、ハヅキがその家庭教師をしていたんです。とても優しくていい子だった」

ユキノさんは、目を丸くしてしばらくリウヒを見ていたが、大きな息を吐いた。

「……あなたは……リウヒは、本当に不思議な子ね。とことん、この家と縁があるのね」

「本当に」

だけでも、会ってわたしは、どうするつもりだったんだろう。今、心の中はシギでいっぱいだ。

小さく息を吐いて、枕を抱えたまま窓を見た。と、その目が驚愕に見開いた。人が窓辺に立っている。

泥棒だ！

ところが体が動かない。魅入られたように、黒い人影を凝視するだけだ。

「静か二。危害は加えません」

女の子の声だった。驚きが二倍になる。月明かりにぼんやり照らされたのは、やはり可愛い少女だった。黒っぽいぴったりの服を着ている。その子は人差し指を口の前で立て、低く小さな声をだした。「リウヒサンデスネ？」

なんでわたしの名前を知っている！　だが、顔はコクコクと頷いた。「シギサンから伝言を言付かっていマス」

驚きは更に倍増した。なんでシギが、なんであんたが、なんでこの子が。

「会いたい、滅茶苦茶に会いたい、ト」

混乱する頭の中で、それはクルクルと回る。

ああ、シギ。涙が出てきた。止まらずに後から後から溢れてくる。

「シギサンに伝えたいこと、あります力？」

「ある」

涙に濡れた声が出た。

「馬鹿って」

それから

「シギにすぐ会いたいって伝えて」

少女は、了解したという風に頷くと、にっこり笑って窓の外に飛び降りた。ここ、二階なのに！ 慌てて窓から外をのぞいたが、誰もいなかった。ただ月だけがひっそりと輝いていた。

扉の向こうからひっそりとした声がする。叩こうとした手を止めて、シギは聞き耳を立てた。

「アナンさまったら、そんなことをしてらっしゃったの。あの子らしいやら、呆れるやら」

老女のクスクス笑う声が聞こえる。

「王女サマは、そこで王になると宣言しまシタ。イランが海賊に紛れ、実際に聞いたので間違いありません。ただ、次期が来ていないとみなサマに止められていまシタ」

「筋書き通り進んでいるのね、元王子は誤算だったけれど」

「宰相サマにも報告はしております」

なんなんだ、こいつらは。シギの背筋を冷や汗が伝う。

「ただ、そ……。変な男が王女サマたちを付け回しているようデ……。接触はしていないのですが、なぜか王女サマたちが現れる所に先回りしているんデス」

「害は有りそうなの」

「なんとも言えません」

カスガだ。冷汗は止まらない。御寒もしてきた。

「邪魔だと判断したら、消してちょうだい」

「はい。ジユズサマ」

つい、シギの喉が鳴った。扉の向こうの声がぴたりと止まる。慌てて、ドアを叩いた。

「朝餉をお持ちいたしました」

ワ力はいつものように盆を受け取ると「ども」につこり笑った。奥に見える老女は、何かを思案するように明後日を見ている。

台所に戻ったシギは、全身にびっしょりと汗をかいている事に気が付いた。

なんなんだ、あの会話は。あの老女は、あの少女は。回転する頭の中で、先ほどの会話を反芻する。王女はただ、踊らされているだけなのか。利用されているだけなのか。それにしても、あの老女は何者だ。いやいや、それよりも、カスガがヤバイ。消すとは殺すという意味ではないか……。そしてワ力は、お使いを頼まれた子供のように、返事をした。

だいたい、あの子も何者だ。リウヒを探すと約束したものの、何事もなかったように毎日を送っている少女を疑問に思い、老女の部屋を出たワ力を付けたことがある。お休みなサイ、と退出した少女は、歩きながらおもむろに服を脱ぎ始めた。思わず口に手を当てたシギに気付く事もなく、出現したのは体にぴったりとフィットした黒装束だった。

脱いだ服を廊下の一角にほると、長い焦げ茶色の髪をポニーテールに括った。そして、無造作に窓から飛び出した。

人間業ではなかった。まるでボールを投げるようなきれいな曲線を描いて、少女はあまりにも身軽に飛んで行った。

夢でも見ているのかな……。非現実さに窓から呆然と見送りながら思ったが、少女が脱ぎ捨てた衣はそこにあった。翌朝のワ力は、普段通りの呑気な顔をしていた。

「シギ」

当の少女に突然、顔を覗きこまれ、動揺のためシギは椅子から転げ落ちた。

「ななな、なにかな？ なんなのかなっ！？」

尻持ちをついている男をきょとんと見ていたワカは、しゃがんでその耳に口をつけた。

「リウヒサンが見つかりまシタ」

ワカの顔を見る。至近距離で目が合った。少女はにっこりと笑う。

「シシの村にいマス。中年の女性と二人で暮らしていまシタ。伝言の返事ももらってきまシタ」

「なんて……？」

心臓が跳ねた。ドキドキして止まらない。つい、ワカの肩を掴んでしまった。

「馬鹿、ト」

あまりの脱力感に、シギがべちょ、と崩れた。馬鹿とはなんだ、馬鹿とは。あのあんぼたんめ。

「もう一つ、もう一つありマス！」

慰めるようにワカが肩を叩く。

「シギにすぐ会いたいって。泣いていまシタ」

ああ、リウヒ。目の前の床に水滴が落ちた。なんのことはない、自分の涙だった。

「あの……、こんな時になんなんです、あなたは何者なんでスカ……？ それにあの人は、名前も、顔もそっくりでシタ……」

王女に、とは言わなかった。少女の顔は、疑いとおその表情が入り混じっている。

「おれも、あいつも、ただの旅人だ」

それよりも。シギは、顔を拭い壁に背をもたせて、ワカを凝視した。

「お前も、あの奥方も、何者だ」

色眼鏡で見れば、小さい頃テレビで見た戦闘ものの、悪役ボスと子分のようなだった。

「……あたしはただの雇われている者で、あの方はその雇い主デス」
「何を企んでいる」

「それは言えません。知らなくていいことだつてアル。あまり知り過ぎると、あたしハ……」

その顔が、苦しそうに歪む。沈黙が流れた。

なんにせよ、とシギが小さな声を出した。ワカが顔を上げる。

「リウヒを見つけ出してくれてありがとう。ものすげえ感謝してる」
なんのこれシキ。ワカがにっこりと笑った。

チーム解散 4

シラギの手を取ってしげしげと見ているリウヒに、もうよいだろう、と苦笑が落ちる。

「武人の手とは、美しいものだな」

大きくてゴツゴツした、その手はとても安心感がある。自分の小さくて頼りない手とは大違いだ。手を合わせてみると、倍近くあった。「はじめて言われたな、手を褒められるなど」

どうやら、トモキに再会時抱きついてから、触れられる恐怖は消え去ってしまったらしい。それが嬉しくて堪らず、リウヒはここ最近、いつもの仲間にべたべたと触りまくっている。みなは苦笑しつつ喜んだ。キャラやトモキには何かと言えば抱きつく様になったし、マームは、からかいを含めてリウヒを抱きしめ、何回か胸の谷間で死にそうになった。わたしも大人になったら、あんなにふくよかな胸になるのだろうか、湯浴みの度に、自分のものを見るのだが、残念ながらこれ以上成長してくれそうになかった。

カガミの腹にも触らせてもらった。案外硬くてびっくりした。

「ここに詰まっているのは脂肪じゃないんだよ。限りない知識と希望がつまっているんだ」

酔ったオヤジの戯言は

「なるほど、ではカガミさんの腹をかつさけば、素晴らしいものが見られるですね」

カグラの感心した皮肉で打ち返された。

そのカグラは誰もいない宿の一室で、微笑みながらリウヒを膝の上に乗せて甘く囁いた。

「夢の世界に行ってみたいと思いませんか」

そこにけたたましく扉を開けて黒と金が乱入し、シラギはリウヒを抱き上げ、マームは銀髪を殴った。

「幼児虐待、色魔退散！ この外道！」

馬鹿じゃないの。あんた馬鹿じゃないの。殴る事はないでしょう。言い合いをしている二人を部屋に残し、シラギはさっさと下に降りる。

「なあ、シラギ。夢の世界ってなんだ。それにマイムはなんであんなに怒っているんだ」

「リウヒはまだ知らなくていい」

危ないところだったと一人ごちて、シラギがリウヒを下ろすとトモキとキャラが駆けてきた。

「ねえ、旅芸人が港に来ているんだって」

「リウヒもいこう。シラギさまはどうですか？」

「行つておいで。ただし、気を付けて」

三人ははしゃいだ声で返事をして、じゃれながら走つていった。その後ろ姿をシラギは、宿の戸に凭れて見送っていたが、小さな笑みを浮かべると、中に入つて行つた。

扉の中に入ると、窓際に老女が椅子に座つて茶を飲んでいた。ただそれだけなのに、絵になっている。

「そろそろ、また旅に出ようかと思ひまして」

バイトで培つた精一杯の愛想笑いをしながらシギは言った。

「今までとてもお世話になつて申し訳ないのですが、明日にでも発つと思つています」

「あなたのお国はどちらだったかしら」

「ジンです」

「まあ。そうだったの。ヤン・チャオはお元気？」

誰それー！ いやいや、まてまて、知っているはずだ。かなり重要な人物だ。今まで勉強した二年前の知識を必死で繰る。しかし、焦つたシギの頭は空回りを続け、結局思い出せなかった。

「げ……元気で、多分」

そう。老女はゆったりと微笑むと、傍で控えていたワカにティーカップを渡した。

「残念ね。一生懸命働いてくれたから、心名残もあるのだけど……。明日は、ワカ、あなたお見送りして差し上げなさい」

ワカは一瞬顔を引き攣らせたが、はい、と素直に返事をした。

その後、台所に来た少女を捕まえヤン・チャオとは誰かと聞いた。

「ジン国の第三王子デス。なんでそんなこと聞いたんだ口……？」
思い出した、狂王！ ティエンランに攻め入ってきた王だ。でもあの老女となんの関連性があるんだ。ああ、もっと歴史を勉強していれば、カスガがここにいれば。

「シギは、明日、本当にここを出て行くんデスカ」

「ああ。あいつに会いに行く」

もう、待つてられない。居場所が分かったら、ここにいる理由もなかったし、なんとなく薄気味悪さも感じていた。

「どんな人？」

好奇心に輝く少女の顔は、いつかの王女の顔とダブった。恋に恋する顔は、みな一様に同じなのだろうか。

「我儘で、自分と飯の事しか考えていない色気皆無な女だよ」

小さく笑って答えるシギに、ワカは目を丸くした。

「それは中々に、苦労しそうデスネ……」

「まったくだ。お前の好きな人はどんなだ？」

「怖い人デス」

少女も小さく笑った。

「でも、優しい人」

思い出したのか、顔がほんのり赤くなる。

「お前も苦労しそうだな」

「まったくデス」

二人は顔を見合せて、クスクス笑った。

翌朝。旅立つシギにワカも、トホトホと付いてきた。見送りの割に

はずつと一緒にいる。その顔は、悩むように歪んでいた。

「お前、どこまで付いてくる気だよ。あんまり遠くなると、帰りが大変だろ」

シギが苦笑すると、ワカは仕方なさそうに止まった。

「じゃあ、ここデ……。あの、最後にお願ひがあるのデスガ」

なんだよ。キョトンとするシギに、思い余ったように顔を上げた。

「シギが身につけているものを一つくだサイ。何もなければ指でも目ん玉でもかまいません」

「どんなお願ひそれ！」

驚愕して身を引くシギに対し、ワカは真剣だった。

「何でもいいンデス。お願ひシマス！」

そんな事言われても……。困ったように体に手を巡らす。ふと触ったのは首から下がっているクロスネットレスだった。別れた女にもらったものだが、気に入っていた品だ。指よりはマシか。おしい気もしたが、ぶちりと引きちぎって少女に渡す。ワカは喜ぶと思いきや、安堵の息を吐いて、それを受け取った。

「ありがとうございマス。お元氣デ。道中の無事を祈ってマス」

「ワカも元氣で」

につこり笑う少女に手をあげて応え、シギは踵を返して歩き始めた。

男の姿が見えなくなると、ワカは笑顔を引つ込めた。そして、道脇の雑木林の中に入ってゆく。そこには、短髪黒髪の端正な顔をした男が木にもたれ掛かっていた。

「どうしてあの男を殺^やらなかつた」

「申し訳ありません……。でも、計画には無害だと判断しまシタ。いたずらに人を殺すのハ……」

男の手が下から上へなぎ払われる。乾いた音がして、ワカの頬が打たれた。

「だからお前は、いつまでたっても半人前なんだ」

おっかねー。クスクス。

上の木々から声がする。

「どうすんだ。おれが行ってこようか」

「ワカ。本当にあの男は、無害なんだろうな」

「はい。自信をもって言えマス」

「なにかあったら、半殺しじゃあすまねえぞ。……そういうことで、あれは放っておいていい。お前ら、先に行け。おれはこいつを説教してから追いかける」

もう結局イランはワカに甘いんだから。あー酒飲んでー。

木々が揺らめく音がして、二つの気配が消えた。

俯いているままのワカの頬を、男の指が這った。

「痛かったか」

「痛かったデス」

打たれた頬は、ジンジンと痺れている。その内腫れてくるだろう。指はしばらく頬を撫でていたが、顎に回り持ち上げられた。ワカの顔が上がる。短髪の男　イランと目が合った。底冷えのするような目だった。

「どうしてあの男を殺らなかった」

もう一度、同じ事を聞かれた。

「情が湧いたか。それとも惚れたか」

「……少しだけ、情が移ってしまいまシタ」

会いたい。ただその言葉だけで男と女は泣いた。それを見た時、ワカは仰天を通り越して感動してしまった。

「ジュズサマには、消したと伝えマス」

これもあるシ、と男が首から引きちぎった、けったいな飾り物を見せた。

「雇い主に嘘の報告をするつもりか。そこまで執着しているのか」

「嘘も必要な時があるでシヨウ？　そう教えてくれたのはあなたデス。それに、あの男は恋人に会うために出て行きますシタ」

「ふん」

「イラン」

顎にかかっていた男の手を取り、自分の口にそっと付けた。

「あなただけが、あたしの全てなんデス。それは分かってくだサイ」
「当たり前だ。おれがそういう風に教育したからな」

そして認めてもらいたいんなら。イランはその手を、勢いよく横に
払った。反射的にワカの体がビクリと跳ねる。

「仕事で結果を残せ」

口の端を歪めて言い残すと、去っていった。

ワカはぽつねんと雑木林の中に立っていたが、涙をこらえ、跳ねる
ように駆けだした。

井戸のつるべを回すと水が跳ねた。この時期には冷たくて気持ちい
いが、冬になったら辛いだろうなと思いながら、桶をもつ。よいし
よ、と手桶を持ち上げた瞬間、こぼしてしまった。

構わず、道をゆく男を凝視する。あのオレンジ頭、痩せぎすの体。

「どうしたの、リウヒ」

ユキノさんの声も耳に入らなかった。

「シギ……！」

足が勝手に動いた。裾が邪魔で纏れる。男もこちらに気が付き走り
だした。道の真ん中、飛び込んで抱きついたリウヒをシギもしっか
りと抱きしめた。

「シギ！シギ！」

「会いたかった……！」

「わたしも」

噛み付く様にキスをする。シギも応じた。嬉しさと懐かしさが、わ
き上がってきて眩暈がする。ああ、すぐく会いたかった。この人が

大好き。

「ごめんね」

「なんであやまんだよ」

「ごめん」

キスの合間に息つぎのような会話を交わす。ふと、後ろからの視線を感じて、慌ててシギから身を引いた。ユキノさんが、呆然としたように、なおかつ当てられたように赤い顔で立っていた。

「まああ、離れ離れになっていたリウヒの恋人……」

お茶を出されて、シギが赤い顔でお辞儀をする。リウヒは恥ずかしくて顔を上げられない。

彼氏とのラブシーンを母親に見られた娘のようだった。

「あっあの、かあさん」

台所にひっこんだユキノさんを追いかける。

「急で申し訳ないのだけど、明日、発とうと思うの。友達も待っているし……」

そして、そろそろ王女が立つ噂が流れるはずだ。

「ええ、いつてらっしゃい」

ユキノさんは、リウヒの手を握って言った。

「今まで、本当にありがとう。わたしは、あなたに娘をみていたのよ。とてもそっくりで、同じ名前で、幸せな夢を見せてくれた。あなたに甘えていたのもあるかもね。すごく楽しかったわ」

歌うようなその声を聞きながら、リウヒの目から涙が溢れてきた。

わたしが出て行ったら、この人はまた一人なのだ。

「ねえ、かあさん、トモキのところに行くべきだと思う。今はバタバタしているけど、落ち着いたらきつと、また連絡がくるよ」

うっかり言ってしまったから、しまったと思った。案の定、ユキノさんは驚いた顔をしている。どどどどうしよう。

「トモキさんを知っているっていう人と話したことがあるんです。おれたち」

ナイス、シギ！ でもちよつと微妙！

「あの子は無事なの！」

「はい、その妹さんも無事です」

ユキノさんは、安堵のため息を漏らした。ごめんね、もっと早く言えば良かったと謝ったら、いいのよ、と泣いた。

「トモキとハヅキは、兄弟だったのか」

深夜。リウヒはベッドの上で、シギの腕の中にいる。そのシギは壁に凭れるように座っていた。お互いの今までの経過は、それぞれが驚くことばかりだった。

「トモキの弟がハヅキ……でも、そんなことが……」

小さくブツブツ呟いているシギをリウヒが不思議そうに見た。

「どうしたの？」

なんでもねえよ、とキスをされた。甘い感覚に流されそうになって慌てて唇を離す。ハヅキの昔使っていたベッドの上で、そういう事をするのは、なんとなく嫌だった。

「しかも、幼少期の王女も預けられていたの」

居間の柱に、傷がいつぱいついていた。身長を計った後の傷だ。片面がハヅキで片面が王女。

トモキが計っていたというそれは、ハヅキよりも断然王女の方の傷が多く、複雑な心境になった。

「兄弟って、大変だな」

甘えるように、頬を男の肩に擦りつける。そして気に入りの、きれいな喉仏をつくりと鑑賞した。

「シギは変な所にいたんだね」

夜更けにやってきた少女。不可思議な老女。

「早くカスガと合流して、もう一度話さねえと」

「ねえ、スザクに行く前に、都に寄りたい。昔のバイト先に顔を出したいの。この情勢でどうなっているか不安なんだ」

「分かった」

密やかな声は、その内無言になった。

第七章 嵐の前 1

「かあさん、今まで本当にありがとう。元気でね」

ユキノさんの体を抱きしめると、その細さに驚いた。

「リウヒも体に気を付けてね。達者でいつてらっしゃい」

手を振って見送るユキノさんを、何度も振り返りながら歩いてゆく。小さく消えても、まだ手を振った。

「親子ごつこだったけど、すごく楽しかったの」

もし現代に帰れたら、うんと親孝行をしよう。

昼になって木陰で弁当を広げた二人は、握り飯を食べていた。

「それはいい心がけたな。ところでこれを握ったのは誰だ」

「わたしだけど……少しはマシになったでしょう？」

「少しな。ほんの少し」

それにしても。二年前とは大違いだとリウヒは思う。

道行く人は、浮浪者同然も多く、呑気に握り飯を食べている自分たちを睨みつけている。

シシの村では比較的平和だったが、この国はこんなに治安が悪くなっているのか。

改めてシギと一緒によかった。

しかし、都に入って驚いた。荒んでいる空気が一気に襲う。民は腹の空かせた野良猫のように目を光らせており、なぜか兵は威張り散らしていた。裏通りの一角に、馬車があった。現代の観光地などで見かける派手なものではなくて、木の粗末なものだ。中からうめき声や泣き声が聞こえた。これは、もしかして噂の人浚い…。

男たちが走ってくる気配がして、リウヒとシギは隠れるように壁に身を寄せる。彼らは下卑た声と笑いを上げると、馬車を駆って行った。

その内の一人の男に見覚えがあった。二年前、ティエンランにたどり着き、宿へと案内してくれた門番だった。

ゲンさんの宿に行ってみた。髭親父は見る影もなくやつれていた。「女房が死んだんだ……。病で……医者を呼ぶ金も、薬を買う金もなく……」

そう言つて泣き崩れた。リウヒを娘のように可愛がつてくれた、あの親切なおかみさんが。胸が絞られるように痛んだ。

そして預けていた現代の服も、リウヒが商家の奥さんにもらった衣も売ってしまったという。

「許しておくれ、許しておくれ」

涙を流しながら謝るゲンさんに、二人は頷くことしかできなかった。そして、目的の商家は。

誰もいなかった。何度扉を叩いても、何の反応もなかった。

「キキ、ネネ、ラン、クジャク、タイ！ 奥さま！ シゲノさん！」

「その家に人はいないよ」

通りを歩いていた男が、声をかけた。

「大分前に夜逃げをした」

そんな。足の力がぬけて、リウヒはズルズルと座り込んだ。光の差し込む美しい庭、コロコロと笑い声を上げていた子供たち、のんびりお茶をすする奥さん、福々しい笑顔のシゲノさん、ハヅキの授業の声……。

扉に両手をかけながら、リウヒはしゃつくりを上げた。全てが消えてしまったなんて。

信じられない。

上品で趣のあつた商家は、黒く荒んで見える。みんないなくなつてしまつただなんて。

嗚咽を上げた。涙が止まらない。

美しいものは永遠に続くものだと思っていた。思い込んでいた。

「リウヒ。気持ちは分かるけど、そろそろ行こうぜ。夜になったらやばいぞ、ここ」

「うん……」

安宿の一室。ゲンさんにはいたたまれなくて、もう会えなかった。

シギはリウヒが落ち着くまで、抱き抱えて背中を叩きあやしてくれた。

「お金って怖いね……」

そして人間って怖い。あの門番の顔が思い出される。

「みんな自分が一番可愛いんだよ。局面に立たされるとあつという間にそれが出る」

「早く、王女が立たないかな」

救世主が世界を救う。苦しむ人々を助けてくれる。だけど、どうして苦しめられている人々は立ち上がらないのだろうと思っていた。みな受け入れる方が楽なのだ。己の身が可愛くて、勇気がなくて黙っている。物事を起こすにはきつかけが必要だ。王女が声を上げれば、苦しんでいる人々はそれについてゆく。そして、新王が立つ事をリウヒは知っている。

「もうすぐだよ」

シギが抱きしめる腕に力を入れた。

「もうすぐだ」

「結構な距離があるじゃない、もう」

「ああ、見えてきた」

「人の気配がしないね」

リウヒたちはスザクの隣にある漁村を目指して歩いていった。何もなるところとは、その通り、本当に人一人もない、寂れた村だった。

「こんな村もあるのか」

崩壊寸前の家もあり、大体は砂に埋もれつつあった。草木は全て枯れている。

なんなのだ、この村は。

リウヒは呆然と辺りを見渡す。こんな村があるなんて思ってもいなかった。

浜辺に腰を下ろすと、爪を噛んで遠くを見る。税が半分には跳ねあがってから、町の雰囲気が一転険悪になった。スザクの港は元々賑わっているところだ。しかし、それ以外の村や町はどうなのだろう。そして都は。

わたしはここで一体、何をしているのだろう。王に立つと宣言したものの、未だにみんなに守られてのんびりとしている。国王崩御してから、都に登ると大人たちは言う。父はいつ死ぬのだ。寝ついても何年経つと思っているのだ。

そうこうしている内に、こんな村や町は増えてゆくだろう。この国の民は……。

そこまで考えて、ぞっとした。

わたしはこんな所で、こんな事している場合じゃないのに。いますぐ都に登って、王座から父とシヨウギを蹴り落としてしまいたい。

「何を考えているんだい」

「カガミ」

丸いオヤジがえっころしょ、と隣に腰を下ろした。

「なぜ、お前たちは止めたんだ」

「またそれを聞くのかい。次期尚早だと思ったからだよ」

兄の前で、宣言した自分の声は、大人たちに諫められた。

「次期尚早？ ではその時期とはいつだ。のんびりしている間に、税は上がり民の暮らしは厳しくなっていってるんだぞ」

「リウヒくん、税は下げるべきだと思っっているかい」

「当たり前だ」

「君が王位についたら」

「下げる」

あのね、とカガミがため息をついた。

「時には、そういう時も必要なんだよ。国ためには民に我慢をしてもらって……」

「それはおかしい」

リウヒはやけにきっぱり言う。

「飢饉や干ばつときならいざ知らず、今年も豊作だ。なのに、なぜ税を上げる。大方宮廷の建築費用がなくなったとかそういう問題だろう」

「そりゃそうだよ。あれは国の威信だもの」

「建物一つに威信もなにもあるものか。いつそのこと園にでもして掘立小屋でもつくればよい」

「何をいつているんだ、君は」

カガミの声はもう泣きそうだ。

「あまりにも乱暴すぎる。そんな掘立小屋をみて民が王を、国を誇れるとでも思うのかい」

む、とりウヒが声に詰まった。

しばらく二人は黙って海をみる。

「嫌なんだ」

民が喘いでいる時に、みんなに守られながらのんびりと旅をして。

わたしはあの宮廷に入って国を立て直さなければいけないのに、そう言う立場なのに、何でここににいるんだ。

そう言つてリウヒは小さくため息をついた。

酒場の隅で、カスガは小声で言い争っている三人の男に聞き耳を立てている。一人は丸いオヤジで、一人は黒髪の青年、一人は銀髪の優男。カガミとシラギとカグラだ。

たまたま飲んでいたら、オヤジが青年二人に引きずられるようにしてやってきた。うつかり酒を吹いてしまふところだった。王女一行の大人たちは、結構な酒好きらしく、よく酒場に出没する。それをこっそり聞くのが趣味になっていた。でも、この三人の組み合わせは珍しい。

気付かれないように近くに移動する。しかし、余程深刻な話なのか中々内容が聞こえない。

「……と噂を流す」

「……王女は民衆と……ですか」

「あなたは……思わないのか」

ああ、もどかしい。拡張器がほしい。カスガがため息をついた瞬間。
「国は、人間は、あなた方の玩具ではない！」

シラギが立ち上がって怒鳴った。思わずそちらを見る。酒場の喧騒も静まり、みなも目線を投げかける。オヤジも大声で言い返した。

「ぼくが道をつくる。君たちが王女の手を引いてその道を辿る。最後に宰相の用意した舞台で踊ってもらう。最高の筋書きじゃないか」

「そんな事を考えていたのか、お前は」

わああー。王女だー！ 王女だー！ 激写、激写！ 急いで取り出したケータイは、悲しい事に電池切れのマークが点滅していた。カスガの顔が青くなる。誰か！ 充電器もってないよね！ あるはずないよね！ 古代だもんね！

それにしても。冷静になったカスガは、静かに怒っている王女と四人の男を見ながら思案した。

ぼくが道をつくる。君たちが王女の手を引いてその道を辿る。最後に宰相の用意した舞台で踊ってもらう。

これは作られた話だったのか。あの丸いオヤジが創作した。新しい事実を発見した気がした。王女は民を見かねて、自発的に都に登ったのだと思っていた。彼女は舞台で踊っていただけだったのか。その内、王女が何か言い捨てて、席を立ち、自分そっくりの男がその後に残り、青年二人も追いかけてゆき、オヤジはしばらくそれを眺めていたが、腰を上げた。

カスガも追いかけたかったが、目立つ真似はできない。
短髪の男と、それにしな垂れかかる女が、酒場を出て行った。

「王女サマが動き始めまシタ」

朝餉の用意を整えたワカに、ジユズがゆつくりと振り返る。

「カガミサンと宮廷のやり取りを、黒と白シラギ カグラが付けていたようデス。

そのまま酒場で、カガミサンは一切を告白し、王女サマはそれを聞いて、アナンサマに協力を申し出マシタ。アナンサマは快諾、武器と言を流せと海賊に命令、もうすぐ、王女サマが立ったと、この町にも噂が流れるでショウ」

「宮廷の動きはどうなの？」

「黒が話し合いに馬をとばしたそうデス。イランの予想では、王女サマと宮廷で戦になるだろうト……」

そう。ジユズは聞きながら、朝餉に箸をつけた。その美しい動きに、ワカはいつも見とれてしまう。

「カガミサンですが、昨夜のうちに毒薬を仕込みマシタ。ご命令通り……」

「ご苦労さま」

ワカはにつこり笑って口を閉じる。そして壁際に控えた。

もうすぐ、この仕事も終わりだな。食器を台所に下げ、握り飯を食べながら思う。

あたしたちの雇い主は。

手に付いた米を舐めた。

みな一様に遊戯ゲームをするような感覚で人を殺す。まるで子供が遊ぶ盤と駒のようだ。邪魔だと判断したものを消し、己にとって有利のものを動かす。

直接手を下すのは自分たちだ。心はいらない。情報を集め、命令された事をただ遂行するのみ。

それが仕事なのだ。闇者と呼ばれるワカたちの。

世界は二種類存在する。日のあたる表舞台と、闇に潜む舞台裏。後者に属するワカは、どうしてもその美しい表に憧れる。足を踏み入ることのない世界だと、分かっているから余計に。

「いいもん食ってんな」

「イラン。お疲れさまデス」

裏口から入ってきた男に、食べますか？ と握り飯を一つ差し出す。ワカの手に握られたままの飯を、イランは受け取らずに手ずから食った。

「宮での話し合いは案外簡単にいきそうだ。宮廷側は王女に付きたいが建前がある、シヨウギは完全に孤立している、あの女はうまく丸めこまれて殺されるだろうよ。宰相は中々のやり手だな」

「シヨウギは誰に殺されるんデスか？」

「宰相の手の内のものか、王女の手の内のものか、おれらかに」

少女の手にあつた握り飯はなくなり、男はその掌に付いている米粒を舐めとっている。

「スザクでは、民が鍬や鋤をもって続々集まっている。一日もたつてないのにすごい数だ」

「数八」

「約三千。これからも増える。対し宮廷側は約一万。だが、王女側が勝つだろう」

「言いきれぬ理由八？」

「黒は^{シラギ}大層部下に慕われていたらしい。特に黒の両腕と呼ばれていた二人の副將軍は、宮廷に憚ることなく不満を漏らしている。いや、威勢の良すぎるじいさんと女だったよ」

思い出したらしくイランはクツクツと笑った。掴んでいたワカの手首を放るようになり、水を飲む。

「軍の上がそんなんだ。戦場で黒が目立てば、あつという間に宮廷軍は王女側に寝返るな」

「分かりませう。ジユズサマに伝えておきます」

「あと数日で終わる。頼んだぞ」

ほぐすように腕を一回転したイランは、裏口を出た瞬間に消えた。ワカはそれを見送った後、老女に報告をするため中に戻った。

前後左右を見渡しても、スザクへと続く道は武器を持った民であふれていた。現代のテレビで中継される、大型連休の観光地のようだ。小さなティエンランの色んな村や町から人が押し寄せているのだ。案の定、港付近では渋滞している。

「王女を助けてやろう」

「下賤の女じゃない、我々の王だ」

声も聞こえた。その顔は一樣に生き生きとしている。

「現代以上の賑やかさだね」

「それよりも……」

カスガに会えるのだろうか。シギは不安になってきた。あいつ、調子に乗って殺されていなきやいいけど……。

「王女たちの周辺を探したらいるよ。多分」

リウヒがしごくもつともな事を言った。

スザクに入ると、あちらこちらに人があふれ返っていた。宿は無料、一般家庭や酒場、商船や海賊船まで民の為に解放されているという。大盤振る舞いの心遣いに民の気概は一気に上がった。

「さすがは我らの王女」

「おれたたちのことを考えてくれている」

どこにいても、王女を褒めたたえる声で一杯だ。当の本人は、その民の生活に対する不満を聞いて回っているらしい。

「お前、あんまり出歩かない方がいいな」

「うん」

王女にそっくりのリウヒは、変装のつもりか男衣に長い髪を後ろで一つに括っていた。中々に可愛いとシギは目を細めてしまう。

そして、目的のカスガはあっさり見つかった。人々に囲まれている王女とトモキを、建物の蔭から変態のように覗き見していた。

「あれは……まさしくストーカーだよな……」

「どこからどう見ても犯罪者だな……」

ため息をついた二人は、そのストーカー犯罪者にむかって駆けていった。

「カッスガー！」

大声を上げてリウヒが抱きつくと、カスガは満面の笑みで幼馴染をクルクル回した。

海を背景にしたそのシーンは、まるで少女マンガだったと後にシギは語る。

久々の再会を祝った三人はそのまま、カスガの宿へと向かった。

「チームカスガ、再結成だねー」

「よく宿がとれたな」

「ぼくは少し前からここにいたからね。しかも今は無料だし。ああ、でもベッドが二つしかないんだけど……」

「いいよ、別に。わたし、シギと一緒に寝るから」

照れたように視線を交わしあうリウヒとシギに、カスガは絶句したあと、そうか、と呟いた。

「おめでたいことだけどさ、ぼくがいない所でやってね。そういうことは」

「やだもう、馬鹿！」

リウヒが思いつきりその背を叩き、カスガはむせた。

嵐の前 2

王家の血を引いているかも、王女の生まれ変わりかも！ と興奮状態のカスガから言われても、リウヒは鼻を鳴らしただけだった。

「だからって別に、お金持ちになれる訳じゃないし。事実かどうか分からないしさあ」

「なんでそんなに冷静なの？ ティエンランの王家の血だよ！ あの王女だよ！ ああ、生き残りがひそかに生きているって本当だったんだ、しかもぼくの幼馴染だったなんて……」

「カスガー。落ち着いてよ。うちは平凡なサラリーマン家庭だし、わたしはあの王女が嫌いなんだから」

「何？ 嫉妬してくれてんの？」

シギがリウヒの頬を撫でた。リウヒは馬鹿、と柔らかく笑う。

「そこ、禁止。なんか恥ずかしくなるから、いちやつの禁止」

「どちらにせよ、王女の血を引いていようが、生まれ変わりだろうが、わたしはわたしだもの。関係ないもの」

あ、でもあの人生を辿るのはしんどそうで嫌だ、と顔を顰めた。

「シギとは絶対離れない」

「おれもー」

クスクス笑う馬鹿二人、いや、バカップルにカスガは、頭を抱えた。

「君たちさ……隙あらばベタベタするの止めてくれる？ 見苦しいし、恥ずかしいよ……」

「ごめん、ごめん。でもカスガもトモキの生まれ変わりなんでしょっ？」

「うーん。分かんないけど」

「いいなあ、お前らは」

心底うらやましそうにシギが言った。

「おれの前世の人間はどこにいるんだろう」

「案外近くにいるかもしれないね」

「ここ、海の近くだしね」

リウヒとカスガが笑う。

そして、シギたちの話を聞いて、カスガの表情が変わった。

「君たちがそんな所にいたなんて思ってもいなかったよ……」

王女が王に立つ。ただそれだけのことなのに、どこまで裏があるのだろうか。

カガミというオヤジ。ジュズという老女。二人の思惑は一緒なのだろうか。それとも別々なのだろうか。

しかも

「ハヅキが例の家庭教師だったなんて……。いやまさか……でもトモキの弟だったんだよね……」

考え込むカスガに、リウヒがきよんとする。

「どうしたの？ ハヅキがどうかしたの？」

「リウヒは知らないの？」

「なにが」

シギと目が合った。その顔が歪む。そうだよな、言えないよな。

リウヒは、幼馴染は知らず知らずの内に歴史の中に関わっていた。

まさかとは思うが、そう考えた方が自然だ。

多分、知れば大きなショックを受けるだろう。

これはアウトなのか、セーフなのか。

だけでもカスガの知る限り、歴史の道筋はブレていない。となると、もしかして自分たちがここにきたのは、必然だったのか。

そう思い当った瞬間、体が足元から一気に冷えてきた。

「……なんでもないよ。それよりも、もう日が暮れるね。ご飯食べにいくか」

「ねえ、カスガ！ 気になる」

リウヒが裾を引っ張った。

「何でもかんでも、ぼくに聞かないでよ！ 聞いたら分かると思わないでよ！」

声を荒げたカスガに、驚きリウヒが身を震わせた。

「あ……ごめん」

「いや、ぼくも……。もし、現代に帰ったら調べてみて」
きつと、リウヒはものすごく泣くと思うけど。とは言わなかった。

「おれが、聞きづらくなってしまうたな」

場を救うようにシギが明るいい声をだした。

「ジン国、第三王子のヤン・チャオのことなんだけど」

ジユズに元気かと聞かれた、なんか繋がりがあるのかな。

「その老女自体、ぼくは分からないけど……。王子は……。ほら、愛
姫スズの話を知っているだろう」

「あ、知っている」

リウヒが声を上げた。

「ヤン・チャオは溺愛していた恋人のスズを殺されたんだよね。そ
れが原因で性格が変わったって」

「何で歴史嫌いのお前が、そんなこと知っているんだよ」

「恋愛ものは別なの」

につこり笑うリウヒに、シギの手が伸びる。カスガの咳払いで、そ
の手は引っ込んだ。

「ヤン・チャオが王になってティエンランに攻めてきた、でも戦争
中に死んで、ジンは内戦がはじまったんだよね。それは知ってた
けど……」

「そうそう。狂王の別名の通り愛姫スズがいなくなってから、滅茶
苦茶な政治をして嫌われていたんだ。で、その人は病弱で有名だっ
た。実際は建前で、放浪癖のある人だったらしいけど」

「あのババア、おれを引っかけたのか」

シギが舌打ちをする。そして、ふと顔色を変えた。

「おれもヤバかったかもしれない……。それより、お前だ、カスガ。
今後一切王女をつけ狙うな。妙な連中に目えつけられてるぞ」

老女と少女のやり取りを話したシギに、カスガとリウヒも蒼白にな
った。

「あの子、なんなの……？」

「そんな、ぼくのライフワークだったのに……」

あと二日でこの騒ぎは終わる。そして、伝説の王女が誕生するのだ。

「カガミサンの毒をもう一段階強くするように、できれば一か月以内に死ぬほどで、と伝えると言われマシタ」

「即死するのはヤバイしな。カナンに相談してみるわ。けど、それなら最初っからそう言えってえの。なあ？」

台所に立つワカの前にいる男は、何かを探すように扉や棚を開け閉めしている。

「そんな所にお酒はありません」

目付きの悪い男は、舌打ちして棚を閉めた。

「お前、隠したな」

「アカンに酒を渡すナ。イランにそう言われたノデ」

あの渋チン。再びアカンは舌打ちする。

「他に何かありますカ？」

「戦になる事は間違いねえよ。今度はどこでそれをするかシヤカリキ検討中。スザクは王女の大盤振る舞いと兄ちゃんの武器大量仕入れ、及び民衆のウサウサな熱気でもう行きたくねえ。ああ、そうだ」

男は嫌らしく笑うと、ワカに向き直った。

「お前が情けをかけて逃がした男な、スザクに現れたぞ」

しかも。目を見開く少女を楽しそうに見やる。

「王女そっくりの女を連れてな。さらに、あの不審な男とも合流した。話していた言葉はさっぱり分からなかったが、ジユズの単語は出てきたなあ……」

凍り付いて動けないワカの両肩に、アカンの手が掛った。耳元で囁めるように囁く。

「イランにやまだ言っただけ。事態が動き始めたら、それどころじ

やなくなるが、やつが今知ったらどうなるかな……？」

「何が望みデスカ」

男の指が震える少女の唇をなぞる。

「つれねえこと言うなよ、分かっただろ……」

一転、床に正座すると、アカンは頭上で両手を合わせた。

「お酒を下さい、お願いします！」

「駄目、駄目デスヨ！ 絶対にアカンに酒を渡すなって、渡したら逆さ吊りの刑だっていわれてるんですカラ！」

「でもさー、おれがさー、ツルつと口を滑らしちゃったら、あいつら、殺されるよー、お前もヤバイよー」

「うつつ……！」

「ちよつとだけ、ちよーつとだけでいいんだよ。あれがないと、おれ、仕事できなんだよ、別世界に行けないんだよー」

今でも十分、別世界じゃないかとワカは思ったが、しぶしぶ酒を取ってきた。

「庭に埋めていたのかよ、お前……」

アカン愛用の徳利に、一杯分だけ入れる。瓶の底をアカンが持ち上げたため、大量に注いでしまい、ワカは悲鳴を上げた。

「よーし、よしよし。これではらくはがんばれるぞー」

キュツと徳利の蓋を閉めると、「んじゃ、いつてくるわー」弾むような声を残してアカンは飛んで行った。こんなに無くなっちゃってどうしよう。目の高さに瓶を掲げ上げると、三分の二に減っている。ワカはしばらく考えるように頭をかいていたが、呼び鈴の音に家の奥へと消えた。酒瓶を隠すことは勿論忘れなかった。

嵐の前 3

「お茶が飲みたくなつたの。入れてくれないかしら。今日は、そうね、中つ国渡りのものがいいわ」

はい、とにつこり返事をし、再び台所に引つ込んだ。

不思議な老女だ。名門出身ならではの品の良さと、このご時世でも贅沢ができる環境はさすがというべきか。そして、なぜかワカだけを手元に置き、他の仲間は一切寄せ付けなかった。報告と命令は、全て己を通してやっている。

まあ、人それぞれだから……。もっと変な雇い主もいたし。

茶器を盆にのせ、ジユズの前に置いてゆく。老女はおいしそうに一服した。

「あなたは本当にお茶を入れるのが上手ね」

「ありがとうございますマス」

先程のアカンの報告を伝える。ジユズは聞きながら静かに茶を飲んでた。

「明日、もしくは明後日に事態は動きマスネ」

「元気な王女のお陰で、ずいぶんとはやまってしまったのねえ」でも

「そうなるとあなたともお別れね」

寂しそうに老女は笑った。

「ねえ、ワカ。どうしてわたくしがこんな事をしているのか分かる？」

歌うようなその声に、少女は首を振る。

「あなたと同じ、ただの仕事よ」

ジユズは優雅に首を巡らせ窓の外を見た。

「仕事のつもり、だったのよ。愛する人と娘を殺されるまでは」皺に刻まれた細い指が、茶器をなぞる。

「組織って不思議ね。弱体化すればするほど、上部は犠牲を求める

のよ。だから、あの子には駒になってほしくなかったの。自分の目で見て、自分の頭で考えて、自分の信念で行動する人間になってほしかった。これはタイキと力ガミの願いでもあったのよ。そして、きつと、この国の」

楽しそうにクスクスと笑う。

「もしかして、わたくしはあの小さな王女に娘を見ていたのかもしれない。そして、同じ年のあなたに王女を重ねていたのかもしれないわね」

愛おしそうにワ力を見ながら、茶器を卓に戻す。につこり笑ったワ力がお代りを注いだ。

「王女が王になってからが、正念場でしょうね。でもあの子は何もかも飲みこめる強さを持っているから」

「だけど、あのタヌキは……それだけでよしとしないでしょうね。息子でさえも駒に使う男は、貪欲だわ。その内、あの可愛い娘を傀儡の王にするかもしれない。」

「だから、お先に西へいってもらうのよ。どうせすぐにわたくしも追いかけるもの。それまでタイキと仲良くお茶でも飲んでいるはずだわ」

「今後、ジュズサマはどうされるのでス力？」

「そうね、体が動く内にまた旅でもしようかしら」

静かに笑うと、窓から注ぎこむ陽光に目を細めた。

窓の外には、夕闇が広がり始めている。寝台の上には力ガミが苦しそうに息をしており、マイムが医師から薬を受け取っていた。

「これを夕餉後に飲ませるように。無理をすると命に関わります。

絶対安静になさってくださいね」

「分かったわ。ありがとう」

リウヒもぺこりと礼をする。白髪の高い医師は、いいえ、と白

髭を震わせて言うと、助手の少年を引き連れて部屋を出た。宿を出た二人はすぐさま裏手に回り、衣を脱いだ。医師は髭と髭をむしり黒装束になると同じく黒装束になった少年に僅かな声で言う。

「短時間でよくやってくれた、カナン」

「とんでもないです。イランさん」

そのまま壁を上って飛ぶように消えていった。リウヒは勿論知らない。

「なんか、こういうの嫌なのよ……。早く良くなっていつものタヌキに戻ってよ……」

「いいねえ。美人なお姉さんに看病してもらえるなんて、オヤジ冥利につきるよ」

カガミが、せわしない息をしながら笑う。

「余計な事を言う元気はあるのね。リウヒ、下でお水を貰ってきてちょうだい」

「分かった」

部屋を出ると、カグラにかちあつた。

「どうしたのです、酷い顔をしていますよ」

「そうか？」

一向に良くならないカガミ、聞くのも苦しい民の声、これから齒向かう宮廷。この二日でそれらはどっしりとリウヒの肩にのしかかっている。

カグラはふと微笑むと、リウヒの頬に手をやった。

「では、わたくしが勇気づけのおまじないをしてあげましょう」

「おまじない？」

首を傾げるリウヒにカグラの顔が近づいてくる。驚きで動けないその唇に、男の唇が触れそうになった瞬間、部屋の扉が開いた。

「馬鹿！　そして馬鹿！　なに考えてんのよ、こんな所で！　リウヒ！　あんたはさっさと水を貰って来なさい！」

「殴る事はないでしょう、殴る事は。わたくしはただあの子を慰めよう……」

マイムとカグラの言い争いに、恐れをなしたリウヒは転がるように階下へと走った。

「またやってるんだ」

帰ってきたキヤラが感心したように、上を見る。

「なんだか、ぼくの中のマイムさん像が崩れていく……」

その隣でトモキが悲しげにうなだれた。

深夜。リウヒは一人座り込んで、海を見ていた。時々小さなため息をつく。

宿の後ろにある黒い海は、昼間とは違いどこまでも闇と一体化していた。港の灯りが夜も遅いため落ちている。

先陣切って出るとは言っただけ。後ろの壁に凭れた。

本当は怖くて仕方がない。でも、わたしから仕掛ける戦なのだ。なのに、みんなに守ってもらいながら戦うなんて、情けなすぎる。

「どうしたのです、こんな所で」

低い男の声に、びっくりと体を震わせたリウヒは、その姿を確認して安堵の息をついた。

「なんだ、シラギか……。驚かせるな」

「それは失礼いたしました」

シラギはリウヒの横に同じく座り込むと、視線を海に向けた。

「お前には、申し訳ないと思っている」

しばらくの沈黙の後にリウヒはぽつりと言った。

「大切な部下たちと対峙しなくてはいけないし……。ほとんど、お前に頼る形になると思う」

「まあ、確かに……。宮廷に話し合いに行った折には、副將軍たちに泣いて縋られましたか」

僅かに苦笑した。

「タカトオとモクレンが？」

一度会ったことのある、シラギの両腕と呼ばれる老人と女だった。タカトオは元気なおじいさんで背筋がしっかり伸びており、リウヒ

を見て、「うちの孫をぜひ婿に」と笑った。

モクレンは、緋色の燃えるような髪と藤色の瞳の、美しい人だった。宮廷軍の唯一人の女性だ。二人とも、シラギを尊敬し本当に慕っているのだと感じた。

横のシラギも思い出しているのだろう。深いため息を漏らした。わたしのせいだ。

そうだ。とリウヒは心の中で手を打った。

「なあ、シラギ。勇気づけのおまじないを教えてもらったんだ」

「なんですか、それは」

「うん」

顔を上げたシラギの唇に、リウヒの唇が重なる。まるでぶつかっただような、色気もへったくれもない口づけだった。

シラギはただ、目を見開いて硬直しているだけである。

ど……どうしよう……。自分から合わせたものの、どうしたらいいのか分からず、リウヒは困ってしまった。これでいいのだろうか。こんなので本当に、勇気なんて出てくるのだろうか。

息を止めてしばらく口をくっつけていたが、苦しくなって離れた。

「き、効いたか？」

シラギは石の如く固まっている。

「あの、シラギ？」

不安を感じて顔を覗きこもうとすると、腕を引っ張られて抱え込まれた。

「ぐっふえ！」

思わず蛙を潰したような悲鳴が上がる。これもおまじないの一環なんだろうか？

「……とてつもない勇気をもらった」

呆けたようなシラギの声にリウヒは安心した。そうか、効いたか。良かった。

「リウヒ」

顔を上げようとしても、シラギの腕はびくともしない。

「わたしは宮ではなく、あなたの為だけにあります。だから、明日の事は心配しなくていい」

そのまま、力を込めて抱きしめられた。

「ところでこのまじないは誰に教えてもらったのだ」

「カグラ」

いきなり腕の中から引き剥がされた。キョトンとするリウヒに、シラギは真っ青になって声を強める。

「まさか、まさか、あの男に……！」

「してない。直前にマイムが乱入してきて、いつものごとくだ」

深い安堵の息を吐いたシラギは、再びリウヒを抱え込んだ。しばらくの間、二人はその状態で海を眺めていた。

宿の壁に張り付いて覗きこんでいる、痛々しい顔、感動している顔、髪を引っ張られて顰めている顔、銀髪を引っ張りながら微笑んでいる顔に気付く事もなく。

後日「勇気づけのおまじない」とやらは唯単にカグラのからかいで、実際は恋人同士がやる口づけだとリウヒは知った。恥ずかしさの余り、しばらくシラギの顔がみることができなかった。

第八章 セイリユウケ原の戦い 1

周りにいる人々の顔は、みな興奮でぎらついていた。

リウヒはなんとなく心もとなくなって、横にいるシギを見る。その視線に気が付いた恋人は、安心させるように笑うと優しく肩を叩いてくれた。反対側にいる幼馴染は、鼻を膨らまして若干目を血走らせている。

遠く前方には、王女とその取り巻きが威厳さえ漂わせる風に馬の手綱をとっていた。

一行はセイリユウケ原に向かっていく最中である。

戦というものは男の本能をくすぐるらしく、カスガとシギは参戦すると声を揃えた。リウヒも、仲間はずれは嫌だとばかりについてきたが、すでに後悔している。

今からわたしは殺し合いに行くんだ。

しかし現実感がない。よく晴れた空の下、まるでどこかの祭りにでもいくような、浮足立った雰囲気だ。

こんなんで人を殺せるのだろうか。武器は全てに行き渡らず、民の多くは鍬や鋤を抱えている。それすらもない民、そしてチームカスガが手にしているのは、木刀だった。

「木の棒と布の服じゃねえかよ。鍋の蓋はねえのか」

「レベル一の装備でラスボスに挑む気分……」

「大丈夫。ぼくらは勇者じゃない」

妙に呑気な会話をしている内に徒歩が早足になってきた。周囲も同じ速さで動いている。

「ねえ、なんかさ……。スピード上がってきてない？」

「上がってるな」

「上がってるね」

誰からともなく走り出した。釣られてみな走り出す。

「あの、これ、走っているよね？」

「走ってるな」

「走ってるね」

この走るといふ行為は。

ほとんど全速力で走りながらリウヒは思った。

なんだか気持ちが高ぶってくる。誰もいなくなった商家、人浚いをしていた門番、許しておくれと泣いて叫んだゲンさんの顔、亡くなったおかみさん。全ての原因は今から戦う宮廷にある。そうだ、悪いのはみな、あの宮廷なのだ。誰が企んだ道筋にせよ、その言うとおりになった悪い宮廷。わたしたちは、これから悪者を退治していくのだ。

快感が体を駆け巡った。

ああ、正義ってとても気持ちがいい。

みな気がせいっているのだろうか。馬の足は、後ろの気迫に押されるように段々と早くなってくる。ついにリウヒは駆け出した。徒歩の者も全力で走りながら付いてくる。髪が後ろになびいた。

速度が上がってゆく、高揚感が体を包む。楽しくさえなってきた。今、ここで大笑いしたいくらいだ。

「なんか、楽しっすね」

横で声がした。本当に楽しそうな、これから祭りにでも参加しそうな声だった。

「ああ」

真っ直ぐに前を見つめながらリウヒも笑った。

「わたしもだ」

宮廷軍はまるで計ったように何列かに整列して王女たちを出迎えた。馬を走らせつつ、その姿を確認するや否や、リウヒは声を上げた。同時にシラギとカグラが左右から馬を駆って猛烈な勢いで軍に突入する。

シラギの槍が日に煌めき、あつという間に三つの首が飛んだ。同時にカグラの剣が舞い、二人の男が地に倒れた。軍が動揺する間もなく、狂ったように海賊や民たちが押し寄せる。爆発音が響き、人影が数個吹っ飛んだ。

意識が一瞬飛んだ。目の前の男の腹には、死体から拾った剣が刺さっている。刺しているのは自分だった。引き抜くと、男は崩れるように倒れた。そのまま動かない。大声がして後ろを振り向く。黒い鎧が襲いかかってくる。足が硬直した。

「シギ！」

鎧は叫び声をあげると体を反らせて崩れ落ちた。カスガが同じく拾ったのだらう、剣を振り下ろした格好で荒い息をしている。

「助かった」

「うん」

この、体の底からわき上がる凶暴な気持ちなんなのだろうか。快感ですら、感じてしまう。狂っているんだらうか、おれは。剣を振り回して人を殺す。ここではそれが正しいことなのだ。殺さなければ自分が死ぬ。そうだ、やらなければ、やられてしまう。

横のカスガも目が逝っていた。とてつもなく残忍な顔をしていた。きつと、おれもそうなのだらう。シギは自分を励ますような掛声をかけると、再び黒い鎧に襲いかかった。

声を上げて、リウヒは逃げ惑った。なんなのだ、ここは。目の前で繰り広げられているのは、まさしく殺し合いだった。先程の興奮はどこへやら、ただただ、恐怖感しかない。

濃く漂う血の匂い、地面に横たわる数々の死体。ぞっとする。

空を見て、口を開けている死人。うつ伏せになって踏まれまくっている死人。

わたしはなんでここにいるのだ。なにをしているのだ。

ゲームの中では、復活の呪文でいともたやすく生き返るのに。怪我なんて回復魔法ですぐに癒えるのに。そんな世界じゃない、そんな親切な…。

ふと陰りがさして、振り返った。大男が自分を見下ろして、剣を振りかざしている。

お父さん、お母さん！

思わず身をすくめて、体を縮こまらせた。わたし、死ぬ！

「リウヒ！」

大男がぐらりと傾いだ。その巨体を蹴りあげたシギがリウヒを睨みつける。

「こんな所でぼっとするな、馬鹿！」

「だって、だって……」

「だってもヘチマもねえ！ おれから離れるな！」

シギの衣は血があちらこちらに付いていた。頬も切られたような線が一本入っていて、流血している。リウヒを庇うように手を回したシギは、黒鎧たちを切りつけていく。

足手まといになるのは嫌。リウヒは唾を飲み込んで、目を据えると襲ってきた男に奇声を上げて剣をなぎ払った。

目から涙が出てきたが、まったく気付かず、カスガは黒鎧の剣を受けた。髑るように剣を払ってくる。

勿論、一般市民であるカスガたちがそれを職としているプロの兵に適う訳がない。

しかし気概は勝った。なにより戦場を駆け抜ける黒將軍にひるむよ

うに宮廷軍は戸惑っているようだ。

ぼく、ここで死ぬのかな……。でも伝説の戦いで命を落としたなんて、古代オタクとしては冥利に尽きるじゃないか……。

と、黒鎧が動きを止めて体を痙攣させた。その後ろで、シラギがひらりと馬を巡らせる。瞬間、黒鎧の首が離れて、血が噴水のようにほとばしった。

「うわああ！」

絶叫してカスガが飛びさすった。少しちびった。

血生臭さに咳きこむ。これが戦場なんだ。平和に育ってきたカスガには、その中にいても未だ現実感がない。テレビで報道される、遠い国の内乱。映画の中。もしくは歴史の中でしか存在しないものだった。じゃあ、今、ぼくはなにをやっているのだろう。どうして剣が血で滑って切りにくいなんて思っているのだろう。

意識が朦朧としてきた、その時。遠くで凜とした女の声がした。

「宮廷軍、副將軍モクレン及び部下五百名、これより王女側に付きまする！」

辺りから、狼狽とも感嘆ともとれないどよめきが上がる。

今度は反対側から老人の声がした。

「こしやくな、小娘が！ わしが言おうとした事を先に言いおつて！ 宮廷軍、副將軍タカト以下同文！ 黒將軍さまに剣を向けるものはわしが倒す！」

釣られたように、我も我もとあちこちで上がり、宮廷軍は内輪もめを始めた。それも数分で収まった。次は周りからは王女を担ぐ声が聞こえ始める。

今の今まで、敵だった黒い鎧たちはいつの間にか王女に引き連れられて、民や海賊と共にぞろぞろと歩き始めた。

なに？ なんなの、このあっけなさは……。終わつたの……？

思わず呆然としているカスガの肩を、シギが叩く。

「リウヒ見なかったか？」

「えっ？ はぐれたの？」

シギは舌打ちして辺りを見渡した。カスガも首を巡らせたが、見当たらない。

「あつ、こら、お前どこにいったんだよ」

見るとリウヒが真つ青な顔をしてシギの腕を掴んでいる。

「し……シギとそっくりな人に、声かけられちゃった……」

勇ましいな、お嬢ちゃん。背中を叩かれて顔を上げたリウヒは、仰天した。シギと瓜二つのその男はきょとんとリウヒを見ていたが、齒の三本抜けた男と一緒に走って行った。

「今日は祝杯だぜ」

「おれは酒より女がいいなあ」

そう言いあつて好色そうに笑ったという。

リウヒはギツとシギを睨んで、その首を締めにかかった。

「どれだけ昔から女好きだったの！ ああん？ このエロ男！」

「待て待て待て、一千年前の前世の責任まで、おれ、取れねえ……」

カスガー！ 助けてー！」

「いやー、久しぶりに見る光景だねー」

都が見えてきた。誰からともなく声があがり、それは段々と膨れ上がってきた。勝鬨とぎの声に合わせて、拳や武器を上げる。その合間に海賊の掛け声らしきものが混じる。宮廷軍も笑いながら声を合わせる。カスガたちも大声で叫んだ。

遠くには、復興した宮廷の瓦が光を浴びて燦然と輝いていた。

セイリユウケ原の戦い 2

宮廷と都が見えた時、リウヒは安堵の息を漏らした。道を間違えな
いで良かった……。

後ろでシラギとカグラが、小声でやり取りをし、カグラが列を離れ
て都へ駆け去った。

「なにをしにいくのだ」

「あちらに報告に行った」

後ろでは民や海賊たちの声が上がっている。ふと振り返ると通過し
た村や町から付いてきたのか、それとも、駆け付けたのか人数がと
てもない数に膨れ上がっていた。子供や老人までいる。

この人たちの生活を、わたしはこれから背負うのだ。

あの光り輝く本殿の中で。

その責任の重さに心が沈んでくる。

だけど、大丈夫。大好きなみんながいてくれるから、わたしは自分
の大義を果たすことができる。

「リウヒ」

シラギが横に馬を進めた。

「上意の礼を知っているな」

「勿論だ」

ティエンランの王はその生涯に一度だけ礼をする。最上位の礼を、
即位時に国民に向かって。

「これからやるのだ。あの正門下で」

「……父王と、シヨウギは……」

「我々が付く頃には、すでに崩御遊ばれ、消えている」

思わずシラギの顔を覗きこんだ。シラギは真っ直ぐに自分を見返し
ている。

「そうか。分かった」

リウヒは齒を食いしげると、再び視線を天の宮に向けた。

都の大通りは沢山の人たちが両側に並んで、歡喜の声を上げて出迎えた。

みなが声を上げれば上げるほど、笑顔を見せれば見せるほど、寄せられる期待に潰れそうになる。

いやいや。リウヒは顔を上げた。まだ王になっていないのに、弱音を吐くのか、わたしは。

大階段前で馬を下りると、長い長い階段を登りはじめた。

あの頂点が、わたしのいるべき所なのだ。後ろからは歡聲が絶えやまない。

キャラが小声で愚痴をこぼし、トモキがその腕をとって励ましている。

シラギはほとんど担ぐようにカガミを支え、マイムは平然とした顔で上っていた。

トモキがいなければ。

上を見上げながらリウヒは登る。

トモキがいなければ、わたしはここにはいなかった。きっと、あの東宮で殻に閉じこもったまま暮らしており、謀反でシヨウギに殺されていただろう。

そのトモキを連れてきてくれたのは、シラギだった。

初めて友達だといってくれたのは、キャラだった。

姉のように、ただの少女として接してくれたマイム。

カグラは よく分からないな。リウヒは小さく笑う。

そして、外の世界へ連れ出してくれたのは、カガミだった。駒として見られていたとしても、掛け替えのない世界を見せてくれた。

正門下に立ったりリウヒは驚いた。宰相以下、大勢の臣下がこちらに向かつて跪礼をしている。トモキ達も後ろに立って、それに倣った。

リウヒは微笑むと民衆に向き直る。

わたしの大切な国民たち。

両手を胸の前で合わせた。

この身にかえても。

右足を後ろに回す。地が小さく鳴った。

我が国と我が民を守ることを誓う。

ゆっくりそのまま沈み右膝を付くと、静かに頭を下げた。

王女が頭を下げると、爆発音に近い歓声が沸いた。熱狂状態にあるといっている。

胸の前で、手を合わせて、膝について頭を下げる。ただ、それだけの動作なのに、なぜこんなに感動するんだろう。

リウヒは涙をこぼしながら、国の頂点にたった娘を凝視していた。

ねえ、小さな王女。

わたしは、ずっとあなたが嫌いだった。

美人で勇気のある正義のお姫さま。

そんな典型的ヒロインのあなたが大嫌いだった。

同じ名前で、小さな頃から苛められた。

コンプレックスもあったし、親も恨んだ。

でも、実際のあなたは違った。

自分とそっくりな平凡な顔だったし、王に立つその行動は、色んな人の思惑が絡んでいた。

それでも、今は、あなたと同じ名前だということに誇りをもっている。

もしかしたら、あなたの生まれ変わりだということが素直に嬉しい。

こんなに民に祝福されているあなたを、すごいと思う。

感嘆するほど美しい礼をしたあなたを、とても尊敬する。

あなたはあなたの人生を立派に生き抜いたけど、わたしはこれからの人生を、わたしなりにがんばって生きてみせる。

わたしがなぜ、この時代に来たかは分からない。

だけど、あなたを見ることができて本当に良かった。

「あなたたちには、お世話になったわね」

最後の報告をしたワカに、ジュズが微笑んだ。

「シヨウギの息子が気になるけど……。まあ所詮、虫ケラだわ、大丈夫でしょう」

それにしても、カグラは本当に変わったこと。目を細めてクスクス笑う。その顔は柔らかく嬉しそうで、美しかった。

「小さな王女の上意の礼は、とても見たかったのだけど、残念ね」
「見事に堂々としていたそうデス」

あのイランが褒めたくらいだ。

「これが報酬の後金よ。またお願いする事があれば、その時はよろしくね」

「ありがとうございます。ジュズサマ、お元気デ」

老女が微笑んで手を伸ばした。そこにワカが入るとゆっくり抱きしめられた。

とても温かくて、いい匂いがする。

母親とはこういうものなのか、と少し泣きそうな気持ちでワカは思った。自分には両親の記憶も幼いころの思い出も何もない。何度も血を吐き気絶をした、苦しい修練の記憶しかない。

しばらくジュズは、母が娘を慈しむように頭を抱きかかえて背を叩いていたが、そっと少女の体を離れた。

「あなたもお元気で。さようなら」

ワカはにつこり笑うと、丁寧にお辞儀をし、部屋を出た。

外の雑木林では、イランが木に凭れてワカを待っていた。

「お疲れ」

「お疲れさまデス。これヲ」

ジュズからもらった金を渡す。イランは重さを確かめるように二、

三度掌で弾ませると、懐にしまった。

「以外と早く終わりましたね」

「あのチビが国王かー。小娘が権力持つとロクな事になんねんだよなー」

「はやく里に戻りましょうよ。働き過ぎてもうクタクタ」

上から声がする。

「帰ろうか」

木枝が揺れた。仲間たちは早速帰ったらしい。

「いくぞ」

「先に行つててください。すぐに追いかけます」

につこり笑っていったが、イランは目を少し見開いてワ力を見つめた。

「……めずらしいな。いつもはいの一番に駆けて部屋で爆睡するお前が」

「まア……。今回、あたしは楽しかったのデ……」

「なにかあったのか」

ああ。ワ力は目を閉じる。怖くて優しい人。あたしの大好きな人。

「なんでもありません。帰りましょう力」

「ワ力」

両手で首を挟まれ、上を向けさせられた。

「よく聞け。お前は心が弱すぎる。任務の度に余計な感情をはさむな。情を移すな。情けをかけるな。今回もそうだ。そして今までもそんな事が何度かあっただろう」

それで失敗したこともある。イランは激怒しワ力を半殺しにした。その時の傷は今でも背中に残っている。

「そんな調子じゃ、いつかお前の心は壊れるぞ。おれは、それは……」

……

イランの目が一瞬揺らいだ。

「……頭として許せねえ」

「申し訳ありません……金輪際、二度とないよう気をつけますノデ

……」

あたしを見捨てないでください。目に涙をためて、イランを見た。

「お前次第だ」

静かに引き寄せられて、頬を撫でられる。二人とも視線は逸らさない。

「お前次第だよ」

親指の腹がワカの唇をなぞった。

「あたし次第……」

死ぬ事も恐くない。

「そうだ。今後の仕事で証明しろ」

殺す事も恐くない。

「はい……」

この男に見捨てられる事。それだけがワカの絶対的な恐怖だった。

「以後このような事があつたら、容赦なく切り捨てるからな」

「はい」

「よし」

ワカの髪をクシャリと撫でると、イランは凭れていた木から身を起こした。はずみでワカがよろめく。

「帰るぞ」

少女の襟首を掴むと、イランは振りかぶってその身を思いっきり、空に向かって投げた。ワカは悲鳴を上げ、曲線を描いて飛んでいったが、民家の屋根に猫の如く着地した。そして何事もなかったかのように跳ねて消えた。

第九章 祭りの後 1

今宵の町の灯りは消えそうになかった。

新王が誕生したティエンランの城下では、どこの街角でもどんちゃん騒ぎで大盛り上がりだ。

リウヒとシギは宿の一室、ベッドの上で抱き合っている。甘い雰囲気は一切なかった。明日への希望と新しい王を称える声や、楽しそうな笑い声が窓の外から、絶え間なく聞こえる。

セイリユウケ原から都に登ったあの高揚感、上意の礼の感動が過ぎ去ってしまったえば、後に残ったのは戦で現実を経験した、殺し合いの恐怖だった。

「未だにこの感触が残ってるんだ」

シギがリウヒの腕の中で、震えながら言う。

「剣が人の体を突き刺した時の感触が手に……。あつけないほどずぶずぶ入っていった、そいつは倒れたんだ。多分死んだんだろう。

他も血が飛んで……。なんか臓器みたいなものが出てきて……。なあ、リウヒ。おれは人を殺したんだ。それも何人も」

「うん……」

「何人も殺したんだぞ。どうして逮捕されないんだ、これは罪だろう。死刑だろう。あの人たちも、奥さんがいて、子供がいて、父親の帰りを待っていたのかもしれない。恋人がいて、結婚の約束をしていたのかもしれない。おれは、犯罪者なのに、人を殺したのに、どうして……」

「でも、シギが助けてくれなかったら、わたしは死んでいた」
ねえ、シギ。聞いて。

「あそこで人を殺さなければ、シギは生きてなかったんだよ。わたしだって、生きてなかった。今まで、人が死んでいくのって他人事だった……」

祖父や祖母の葬儀は、あまりにも儀式化し過ぎていて実感が湧かな

かった。テレビの中は自分と関係のない遠い所の出来事だった。ドラマだろうが、映画だろうが、ニュースですらも。

だから、イベントにでも参加する気持ちで戦に出た。実感と恐怖は後から襲ってきた。

行くべきではなかったのだ。

あの数々の死体。漂っていた濃い血の匂い。狂ったように殺し合う人々。

それでも。

「わたしは、シギとカスガが生きていてくれただけで、嬉しい」
抱いている腕に力をいれると、オレンジ色の頭に顔をうずめた。

酔いに任せて、見知らぬ人たちと抱き合い、肩を組む。どの顔も笑顔でいっぱいだ。

夜空の下、大笑いしながらも、カスガの心はあの戦のシーンを、繰り返し繰り返し再現していた。

ぼくは人を殺したのに、どうしてこんな所で笑っているのだろうか。笑えるのだろうか。

血と汗にまみれた体は、宿の風呂で落としたはずなのに、未だに生臭い匂いがする。

何人殺したんだろう。現代なら立派な犯罪者だ。死刑になってもいいくらいの。

だけど、あそこではそれが正しい行いだった。

なぜならば、それが正義だから。

宮廷軍を打ち破って、正しい王を宮に届ける。そんな大義名分があったから。

じゃあ、正義なら人を殺してもいいのか。

……分からなくなってきたな。

カスガは、疲れて段差に腰を下ろした。

多分、シギとリウヒも強いショックを感じているだろう。二人に遠慮して外にでたはいいが、一人で耐えられる経験ではなかった。だって、ぼくたちは人を殺した。それも何人も。

参戦した民も同じだ。殺人を犯した人なんてそういなかっただろう。だけど、彼らは自分たちの生活を守る為に、あそこに行ったのだ。きっと今も、これからも誇りに思うだろう。

でもぼくたちはこの時代の人間じゃない。帰れるか分からないけど、未来の人間なのだ。

興味本位でついに行った自分たちとは、本気の度合いが違う。しかし、時間を戻してまた戦いに参加するかどうかと聞かれたら、カスガは一も二もなく、参加すると答えるだろう。どちらにしても、しばらくはトラウマになりそうだ。

遠くに見える宮廷は、かがり火が焚かれており、闇夜に幻想的に浮かんでいる。

新しい王に立った少女は、今頃何を思っているんだろうか。

王座は、少女の体には大きすぎた。

その豪華な椅子の上で、リウヒは膝を抱えてただ一点を凝視している。

竜が花や飛沫や風を従えて、天に昇る様を掘った黄金の扉を。

夢のような楽しい時間は終わった。永遠に続けていたかった旅も終わった。

これからわたしはここで、このティエンランの国王としての務めを果たさなければならない。

だけど、わたしのとった手段は、最初から間違えていたのではないだろうか。

竜を睨みつける両目から涙が溢れてくる。

父王が崩御するまで待っていたら、戦はなかった。それは思ったよ

りも早かった。宮廷に自分が入った時、父はもう死んでいたのだ。もう少し、あともう少しだけ待っていればセイリュウケ原が、血に染まる事はなかった。宮廷軍だって、ティエンランの民だ。

丁寧に埋葬するよう頼んだが、あそこで命を散らせたものにも家族が、友達が、恋人がいただろうに。

小さく鼻を噉る。

わたしは、王の資格があるのだろうか。兄さまに、力ずくでも帰ってもらった方がよかったのだろうか。

柔らかい絹で包まれた膝は、涙でぐっしりと濡れていた。

「陛下」

足音が聞こえて、目の前にシラギが膝をつく。

「……どうされたのです」

リウヒの目は相変わらず黄金の扉を睨みつけたままだった。

「己の不甲斐なさに意気消沈していたところだ」

そして、自分の声の頼りなさに再び情けなくなってしまう。

「お話を聞かせてはくれませんか」

優しいその声にリウヒは驚いた。この男は、こんな声も出せるのか。そして、シラギに導かれるまま、ぽつぽつと語り出した。

「リウヒ」

武人の美しい手は、白い頬を伝う涙をそっと拭った。

「あなたは、あなたの正しいと思ったことをやった。そしてその判断は、わたしは間違っていないと思う」

静かに言い聞かせるようにシラギは言葉を紡ぐ。王座に座る少女に跪き、その頬に掛かる涙を拭いながら。

「第一、最初から完璧な人間などいない。なんでも一人でやろうと思うな。リウヒの周りには、わたしたちがいる。そして王を支える臣下たちがいる」

「でも、これから、みんなに甘えるわけには……」

「甘えではない。リウヒ。よく考えなさい。無理をして王が倒れたらどうする。臣下は、民は不安に思い動揺するではないか」

「そうか……」

「そうです」

安心させるように笑うと、シラギは立ち上がった。手を差し伸べる。昔と変わらず黒一点を纏う男をリウヒは見上げた。そしてその手に、自分の小さな手をのせた。

「東宮では、三人娘とあの連中が待っている。遅れるとトモキがうるさいですよ」

リウヒも小さく笑った。

「ありがとう、シラギ。お前は頼れる男だな」

「お褒めいただき光荣です」

「ずっとわたしの傍にいてくれ」

シラギはなぜか、一瞬身を固めたが、嬉しそうに微笑んだ。

「御意」

王女が見事な上意の礼をしてから数日が経った。

税は瞬く間に元に戻り、治安も緩やかに良くなってきている。

チームカスガの三人も戦のショックから少しずつ立ち直っていった。が、シギは、リウヒたちの前では何でもない振りを装うものの、寝る前に色々考え始めると、もう止まらなかった。

人を刺した時のあの感覚。戦場の匂い。敵が向かってきた時の恐怖。体は勝手に震え始め、後悔と胸の痛みが襲ってくる。

横で寝ているはずのリウヒが、敏感に察して慰めるように抱きしめてくれた。

「大丈夫だよ。あそこで亡くなった人たちは、みんな新しく生まれ変わるんだから。またこの世に生まれてくるんだから」

「なあ、リウヒ」

違う事を考えたくて、息を吸い込む。

「なあに？」

「お前が見た、おれの前世の人はどんなだったんだ」

「うーんとね、他の人とは着てるものが違って……多分、海賊だと思う。鍬とか鋤とかもってなかったし」

「そうか、やっぱり海の男だったのか。」

「ねえ、シギ」

「ん？」

「現代で宮廷跡に行ったとき、ほら、初めてキスした時……。シギはどんな声が聞こえた？」

「なんで、また今更……。」

「この娘と離れたくない、でもこいつはここから動けない。おれと一緒に来てくれ。お前を愛しているんだ。だけと言えない。言えばお前は困るだろう……って。すごく悩んで葛藤していた」

「お願い、わたしの前からいなくならないで。あなたがこのまま、わたしを残して去っていくのなら、一緒についてゆきたい。でも、それは叶わない。恋する男について行く事もできない……って、わたしの声はした」

シギは思わず身をおこしてリウヒを見る。

「分からないよ。でも、もしわたしの前世が王女で、シギの前世があの海賊の青年だったら……。」

「どうでもいい」

そんなこと、どうでもいいとシギは思う。

「おれはお前さえいれば、それでいい」

細い体を抱きしめると、リウヒも腕を回した。

「そうだね。わたしはわたしで、シギはシギだもんね」

「よくなーい！」

甘いキスをしていたシギとリウヒは、仰天して慌てて離れた。

「なんだよ、カスガ。驚かすなよ……。」

「あー。びっくりした。寝てたんじゃなかったの」

「バカップル！ このバカップル！ いちゃつくの禁止って何度言ったら分かるんだ！ 一人淋しいぼくの気持ちも考えてよね。それに、

二人の前世が王女と海賊の男なんて、すごいことじゃないか！」

しまった、古代オタクの魂に火が付いてしまったらしい、とバカッ
プルは顔を見合わせた。

「うんうん、すごいすごい。さ、寝ようか」

「どうして、君たちはいつつもいっつも、感動が薄いんだ……」

ため息をついてカスガがベッドに突っ伏す。

「だってさあ、前世を知ったからって、別にどうなるわけでもない
しさあ……」

「このリアリストめ」

「カスガがロマンチストすぎるの」

「とにかく、もう寝ようぜ。カスガの前ではいちゃつかないからさ」

「おやすみー」

蒲団をかぶると、リウヒがひつついてきた。そつと唇を合わせてく
る。ばれなきやいいんだよね、と小声で囁く恋人にシギも小さく笑
ってキスをした。

こいつがいるから、おれはあの恐怖を忘れることができる。カスガ
がいるから、笑うこともできる。

「ばれてるよ。本当に君たちは、超がつくほどバカップルだよ……」
不貞腐れたようにカスガが言った。

祭りの後 2

不思議でならない、とカスガは首を捻る。

どうして、この馬鹿二人は自分たちの運命をあんなに簡単に考えるのだろうか。

宿の朝ごはんを食べながら、目の前で話しているリウヒとシギを見る。

一千年前から何度も生まれ変わっている魂が、導き合ったというのに。しかも現代から古代へとタイムスリップし、本人たちが生きている時代に。

さらに言えば、ティエンラン史上、最も有名な王女と、恋の叶わなかった海賊の青年じゃないか。

確かに、リウヒはリウヒだし、シギはシギだ。王女たちと同じ人生を辿るとは限らない。

だけどこの二人は、宮廷跡で声を聞いたと言っていた。前世の記憶と何か共鳴したのだろうか。だったら、もっといろんな所に連れまわせば、いろんな記憶を引っ張り出せるのかもしれない。ここよりも、現代の方がいいのかな。なんたって、王女はまだ海賊の青年に会ってないし。

「なにニヤニヤしているの、カスガ」

「どうせ、ロクでもねえこと考えていたんだろう」

「んー？ いやー。そろそろ現代に帰った方がいいのかなー、なんて」

ふうん、とリウヒとシギがきよとした。

「わたしは帰っても、ここにいてもどっちでもいいけど」

「おれも」

どうやらバカップルはお互いがいれば、それでいいらしい。

「じゃあ、後あの洞穴にいつてみようよ。あ、その前にゲンさんに会っておきたいな」

「ゲンさんは……」

二人から、あの親切親父の状況を聞いていても、カスガは会いたかった。

「いたたまれないかもしれないけどさ。すごくお世話になったから、あいさつだけしておきたいんだ」

「分かった」

リウヒが頷いた。

「わたしは、バイト先の商家にもう一回行ってみる。もしかしたら帰ってきているかもしれないし」

シギもリウヒについて行くという。正午に都の門の前に集合するこ
とを約束し、カスガたちは宿を出た。

宿の裏にいたゲンさんは、カスガの顔を見るとものすごく複雑な顔をした。戸惑い、喜び、申し訳なさが見て取れた。

「お久しぶりです、元気そうで良かった」

「……本当に申し訳ない。このわしを許してくれ」

いいんです、そんなこと。ゲンさんのおかげでぼくらは、ここにな
じむことができたんですから。

カスガが笑うと、親父は涙をぼろぼろとこぼした。

「ま、縁があつたらゲンさんの宿で働かせてもらえますか」

声にならないのだろう、まるで子供のようにコクコクと頷く。

「いろいろありがとうございます」

丁寧な礼をすると、カスガはにっこり笑って踵を返した。

バイト先の商家は何度声をかけても、返事はなかった。

「どこにいつちゃったのかなあ……」

あの子供たちに堪らなく会いたい。リウヒはシギと手をつなぎながら、トボトボと歩いていた。

「きつとどこかで元気にしているさ」

「この時代にケータイがあつたらなあ……」

メールや電話でどこにいるのって聞けるのに。

「おれのケータイも財布も売られてしまったなあ」

「わたしのも」

ゲンさんに預けて、売られてしまった。

「現代で地層から出てきたりして」

「あり得るな」

クスクスと二人は笑った。一千年後の現代がすごく遠くに感じる。人間ってその土地に馴染んだら、以前いた所は現実感が無くなってしまうんだな。

「あつちはどれぐらい時間が経っているんだろう」

もうリウヒは二十三歳になってしまった。普通に暮らしていれば大学を卒業して、就職しているはずだ。でもなんだか二十歳のままで止まっている感じがする。

「帰ったら時間がたち過ぎて、何も無い世界だったりして」

「核戦争で全てが破壊されて、汚染された世界だったりして」

そんな事を考えると恐ろしくて帰るのが怖くなる。

「どんな世界だろうと、おれはリウヒがいればいい」

繋がっている手がぎゅっと握られる。心がキュウと擦れて、ふいに涙が出てきた。

「シギ」

「ん？」

「大好き」

手を握り返すと、そのまま引つ張られて抱きしめられた。大通りの真ん中で、深いキスを何度も何度も交わす。周りの冷やかしの声は、二人の耳に全く入ってこなかった。

二人で手を繋いで、正午までの時間、城下を歩き回った。

もし現代に帰れたら、多分二度とここには来ないだろう。一千年前の古代には。

帰るのが惜しい気もする。秩序と自然が融合されたこの美しい世界。同時にとてもなく帰りたかった。排気とオゾンに汚染された空気の、ごちゃごちゃしたあの現代に。

母はどうしているのだろうか。もしかしたら、なくなっているのではないだろうか。自分が時空の果てで恋にうつつを抜かしている間に。それを知るのが怖かった。

「シギ。そろそろ門にいこう」

「そうだな」

なんとなく、山を見上げた。曇天の下でも宮廷は圧倒的な存在感を放っている。

あの小さな王女はあの中で王座に座ってこの国を治めているのだ。

お前の話も聞かせてくれ。

シギに思われているその人が、少しうらやましい。

ちよこんと椅子に座って恋に恋するような目でシギを見つめた、小さな王女。

「わたしたちが教わっていた歴史ってさ」

横で同じく宮廷を見ていたリウヒが言った。

「全てが真実じゃないんだね」

研究者は実際にその時代に行って見たり聞いたりした訳ではない。残された資料や遺跡を元に憶測し、推測する。願望もある。その資料自体がそうかもしれない。

「なまじ知っているからさ、有名人を見る感じで面白かった」

「王女と内緒話をするくらいだったもんね」

お前もハツキとキスしただろう。内心苛立ちながら、シギは繋いでいる手に力を込めた。

勉強不足のリウヒが知らないだけで、あいつもある意味有名人なんだぞ。

「わたしも王女と話してみたかったなー」

シギの心に全く気が付かず、リウヒは呑気な声を出した。

柳に囲まれた大通りに出た。石畳に整備された美しい一本道。背には宮廷、目の前の城下の門では、カスガが壁に凭れて待っていた。こちらに気が付いて手を振っている。

「なんだか、また旅をするみたいない気分だな」

「もし、あっちに帰れなかったら、イーストエンド大陸を巡ってみたいな。海の向こうも」

「いいな、それ。楽しそうだ」

「クズハとチャルカに行きたいんだー」

「どうせ白亜の王宮見物と、チャルカで食いまくる気だろう」

「あ、ばれた？」

笑いながら、繋いでいる手を振った。

「君たちはさ。遠くからみているとさらにバカップルだね。ていうか幼稚園児のカップルみたいだったよ」

「えっ？ そう？」

「褒めてないよ。褒めてないからね」

三人は改めて、真正面に鎮座している宮廷を眺めた。

なんだか、ここに来た時を思い出す。どっかの国のテーマパークと勘違いしていたあの時を。

「帰りたいような」

「帰りたくないような」

リウヒとカスガも、シギと同じことを感じているのだろう。

なんとなく横一列に並んだチームカスガは、同時に深い礼をした。ティエンランの愛する天の宮と、小さな国王に向かって。

横にいた白髭の門番が目を白黒させていた。

第十章 現代 1

黒が、自分の言をもう一度宰相に言い直している。

リウヒはため息をついて、額に手を当てた。

卓を囲む臣下たちは、不思議なものを見るような目で自分を見ている。

何で言葉が通じないのだろう、わたしは別にジン語を話している訳ではないのに。

いやいや、宰相もジン語ぐらい分かるだろう。ではなぜ通じないのか。

不思議だ。

「なりません！」

ようやくと理解してくれた、白髪の老人が声を強めた。

「大学は伝統ある学問の最高機関です。それをなくせとはどういうおつもりですか」

「そうは言っていないだろう。シラギ、どういう伝え方をしたのだ」
もう一度ため息が出る。

「学問にかかる金の見直しをしたらどうかといったのだ。民の中にも、優秀な人物は一杯いるはずだ、その者たちにも可能性を見出してやりたい」

「金がかかって当たり前のことなのです、勉学とは。それよりもですな、陛下。税を元に戻されたものの、未だに本殿の奥は工事が進められております。予算が……」

「足りないと？」

「左様でございます」

ならば、国王以下重鎮全員で、賃金稼ぎをしてはどうか。中々に楽しいぞ。

口元から出かかった言葉をリウヒは慌てて呑み込んだ。さすがに言える雰囲気ではなかったのである。

「目利きの女官を集めてくれ。別に男でもいい、飾り物や衣に詳しいものを」

「何をなさるおつもりで？」

「先王とシヨウギの衣と飾り物を買っ払ってしまおう。国宝級の物は手元に残す」

宰相は、ぱっかり口を開けた。シラギや臣下たちも、同じく口を開いた。

いつそすつきりして良いではないか。というリウヒの声は、静寂の中にぽつんと響いた。

それを打ち破ったのは、カグラの笑いだった。

「先王はともかく、シヨウギのものは高値で売れるでしょう。衣も簪もふんだんにありますし、陛下のお好みには合わない」

シヨウギの元愛人は、クツクツとまだ笑っている。

援軍を得て、リウヒは得意げに顎を上げた。

「それでよいな」

白髪の老人は、まだ呆けたまま頷いた。物を売るという発想がないらしい。

正午の鐘が鳴って、臣下たちは一斉に頭を垂れる。トモキに椅子を引かれて、リウヒは飛び降りた。

「今日の昼餉は本殿で召しあがってください。政務の前に、スザクの長との面会がございます」

飯ぐらいゆつくり食わせてくれ。

「分かった。トモキは食堂へゆくのだろう」

「はい。では御前失礼します」

丁寧な礼をすると、トモキは急ぎ足で北寮に向かった。リウヒは首をかしげる。

何故、あの兄は最近ちよくちよく北寮の食堂へいくのか。

「ひどい男ですね。主を置いて」

「トモキらしくないな。どうしたのだろう」

後ろからカグラとシラギの声がした。

「何かうまい定食でもあるのだろうか」

陛下はまだまだ、色気より食気のお年頃なのですね、とカグラが苦笑した。

一日の終わり、夕餉の前にリウヒは東宮の小庭園で城下を見下ろす癖がついた。

日没と共に空は様々に色を変えて、大地を彩る。後ろにはトモキが控えている。

「なあ、トモキ。わたしは王というものは、何でも命令できると思っていたよ」

鶴の一声で、宮廷は動くものだと思っていた。ところがそんなに生易しいものではなかった。今までの慣習がある。長年積み重なった慣例もある。宮は宮なりの規則が存在し、全てはそれに則って動くようである。

流されて、巻かれてしまえば、その方が楽なような気がした。

「もしかしたら先王は国務に疲れ果てて、シヨウギに逃げたのかもしれないな」

王なんて、ただ存在していればいい。国を動かすのは別に王でなくともよいのだ。

逃げた方が楽じゃないか。遊び暮らしても、国は宮がある限り機能する。

それでも、わたしは民に誇られる王でありたいと思う。民が暮らしやすい国作りをするのが、わたしの義務であると思う。

「もし陛下が逃げたりしたら、必ずぼくが追いかけて捕まえますから。ぼくだけじゃない。シラギさまやカグラさま、マイムさん、キヤラ、カガミさんも治してもらって一緒に」

あの愉快的仲間と一緒に。

リウヒは声を上げて笑った。

「ならば兄さまもいることだし、海を渡って逃げてやろう。みんなが追いかけてきてくれるなんて、楽しそうじゃないか」

「陛下」

「冗談だよ」

リウヒは振り返り、クスクス笑った。

「ここがわたしの居場所だ」

みんなのいるこの場所。

そしてトモキに近づき、その手を取って歩き始めた。トモキは素直に付いてくる。

「にいちゃん」

やっと言えた。ずっと言いたかった。

案の定、トモキは驚いた顔して固まっている。

その顔に、リウヒはしてやったり、とクスクス笑いを続けた。トモキもつられたように笑った。

「早く帰ろう。腹が減った」

「そうですね」

「今日の夕餉はなんだろう。菜飯じゃないといいけれど」

笑いあう二人は手を繋いで東宮へと向かう。

まるで仲のよい兄妹のように。

太陽はトモキとリウヒの影を濃く地に落として、西に沈みかけていた。

足が闇に沈みこむ。意識も引つ張られるように薄れてゆく。

ああ、そうか。

わたしたちはまた、現代に帰るんだ。

ぼんやりとした意識が戻り、リウヒは朦朧とした頭に手を当てた。かすかな光が遠くに見えて呑気な鳥の鳴き声がつつすら聞こえる。

「動くなよ」

下からくぐもったシギの声が聞こえた。

「しばらくこのままでいい」

「馬鹿」

丁度胸のあたりにあった、オレンジ頭を抱え込む。

「帰って来たんだね……」

「うん」

「本当に帰って来ちゃったんだ……」

「どうでもいいからさ」

押し潰されたようなしかし苛立ったような声が、さらに下から聞こえた。

「頼むからさつさとどいてくれないかな……。君たちは殺人級のバカツプルだよ」

古代で過ごしていた二年強と、現代も同じ時間の流れだった。

宮廷跡の森から抜け出した三人は、近くの交番に保護を求め、それからあれよあれよという間に警察に連れて行かされたり、病院に閉じ込められたり、泣き叫んでやってきた両親と再会したりした。

半乱狂で泣き縋る両親に、申し訳なさが募った。

「こめんね、お父さん、お母さん。心配かけて」

「一体、リウヒたちはどこへ行っていたの？」

「覚えていないんだ」

そう言う事にしておこうと、三人で話し合ったのだ。

「なんかすごくややこしくなりそうじゃねえか」

「もしかしたら、またタイムスリップする人が出るかもしれない」

「全て知らぬ存ぜぬで突っ切ろう」

しかし、身に付けていたのは、一千年前の古代の衣だ。それは取り上げられて、どこかの研究機関へと持っていかれたらしい。

ハヅキの簪だけは死守した。だって、おばあちゃんになっても持っている約束したもの。

神隠しに会っていた大学生三人が、古代の衣装を着てひょっこり帰ってきたことを、メディアは大々的に取り上げた。

特にリウヒは、その名もあってか執拗に追いかけられた。外を出ることもままならない。ひっきりなしに訳の分からない電話はかってくる。身を寄せている実家の周りには常に報道記者が待ち構えて、出勤する父や買い物に出る母に襲いかかった。

テレビをつければ、マイクを持ったレポーターがなぜか恐ろしげに実況しながら実家を映している。閉口してすぐに切った。

「みないほうがいいよ。すっごく面白いけどね」

電話の向こうでカスガが笑った。

「なんでか知らないけど、小学校の時の文集で書いた将来の夢とか暴露されていたよ。リウヒ、鳥になりたいって書いていたんだね」

「ぎゃー！ 過去の汚点！」

「一回しか会ったことのない親戚のおじさんがさ、すごく偉そうにぼくのことを語っていたんだ。もう父さんと母さんと大爆笑でさあ」

「カスガ、すごいね。わたし、そんな笑い飛ばすなんてできない……」

リウヒの精神はすっかり参ってしまっている。

父と母に守られているものの、世間の関心が自分に集中している事が恐ろしくてならない。

「大丈夫だよ。じつとしていれば、その内過ぎ去っていくからさ」

「うん……ありがとう」

カスガの電話を切って、すぐにシギにかけた。シギも母親の元にいる。

声が聞きたくなる。声を聞くと会いたくなる。痛切に。

「おれもお前に会いたいよ」

受話器の向こうから、シギの痛々しい声がした。

「あのまま古代で暮らしていた方が良かったのかもな」

「でも、それだったら、わたしの両親に、シギを紹介できないじゃん」

わざと明るい声をだして、リウヒが笑った。

本当は泣きたかった。こんな大騒ぎ、もう嫌だ。シギに会いたい、

カスガに会いたい。三人で呑気に笑いながら、旅をしたい。濃く青い空の下を。

カスガが聞いたら、またバカップルと連呼されそうな甘い会話をした後、パソコンを立ち上げた。

避けて通っていたハツキのことを調べようと思ったのである。

シギもカスガも何か隠しているみたいだった。だけど、ハツキが何をした人物であつたのか知りたい。それがどんなことであろうともその名前は簡単にヒットした。

パソコンの画面を追っていたリウヒの顔が、だんだんと驚愕に変わってゆく。涙がキーボードを濡らしていることすら気が付かなかった。

「嘘でしょう……？」

「嘘だろう？」

「嘘じゃねえよ」

「なんで？ どうして？ あんなにうつとおしいほど、ベタベタしていたバカップルだったのに……」

「リウヒがハツキを知ったんだよ」

ケータイの向こうのうるたえた声は、ああ……と納得したように変化した。

シギは煙草に火を付けた。

古代であんなに軽く感じた体調は、ニコチンのせいで、また重くだるく沈んでゆく。

「ごめん、別れたい」

つつかえながら、嗚咽とともにかかつてきた電話にシギは仰天した。会って話したいと言うと、会いたくないと言う。

いても経つてもいられずに、玄関前で張っていたマスコミを蹴散らして、リウヒの実家に走ると、ここにも大量の報道陣が詰めかけて

いた。

「リウヒ！」

呼び鈴を押しても、玄関の戸を叩いても無駄だった。ただ、沈静化していたマスコミを、突いて騒ぎを大きくしただけだった。

メールをしても、電話をしても、うんともすんとも言わない。

理由を説明してくれとのメールに、

「わたしがハヅキに会わなければ、あの子はあんなにならなかったよね」

とだけ返答が来た。

「それにしたって、一千年前のことじゃないか」

「おれもそう思うよ。だけどきつとリウヒにとっては二年前のことなんだ」

ぼくもちよつと電話をしてみる、と言ってカスガは電話を切った。

あんの馬鹿。本当に自分のことしか考えていない。

壁に凭れて、煙を吐く。

ハヅキは義理の妹と実の兄、なにより祖国を売った大悪人だった。

ジンに渡り、ヤン・チャオをそそのかして、ティエンランに攻めるように仕向けた。溺愛していた愛姫スズを殺されて、傷心のあまり冷血になってしまった新王は、ハヅキの言にのり大軍を率いて小国に攻め入ってくる。

そしてティエンランで最も有名な女王リウヒは、愛する夫シラギを失ったのだ。

ハヅキはその名前よりも、宰相トモキの弟として有名だった。だから、シギも分からなかった。酒場で愛おしそくにリウヒの髪を梳き、自分を燃えるような目で睨みつけてきたあの少年が、まさか第一の侵略の原因を作った男だとは。

きつと退学したハヅキは、惚れていたリウヒを探しにジンに行ったのだろう。そこで何があつてヤン・チャオと縁を結んだのかは諸説あり、はっきりとは分からない。

だが、リウヒがハヅキに出会わなければ、ジンからの旅人とは言わ

なければ、もしかしたら侵略はなかったのかもしれない。
全ては一千年前に終わってしまった。

それをあんの馬鹿。

煙草を灰皿に押しつぶして、シギはため息をついた。
別れるつもりなんてサラサラない。

「好きにするがいいさ」

自分の声は、藍色のぼんやりした闇間にぼつりと漂った。
「どうせお前は、おれの元に帰ってくる」

現代 2

以前の蜂の巣をつついたような大報道は、二か月もするとあっさり消えてしまった。

事件や事故は日々起こる。ニュースもワイドショーも世間も、それになぞらって動いてゆく。

現代人はせわしないねえ。

カスガはのんびりと鼻歌を歌いながら、父親の車を運転している。横の助手席にはリウヒがいた。

目の隈が濃く、顔色も悪い。随分とやつれたようだ。ショックは未だに抜けてないらしい。

「どこに行きたい？ 今日のリウヒの行きたい所に連れてってあげるよ」

「古代にいききたい」

ハキのない、ぼんやりした声だった。

「一千年前に行きたい」

「行っでどうするの？」

「ハヅキに……」

そのまま黙ってしまった。

「リウヒ、一人で宮廷跡のあの洞窟を捜しに行っていただろう」

リウヒは黙ったままだ。

「ぼくも何度か行っただよだね。でもあの小道を辿ってもあつさり駐車場に出るだけだったし、洞窟なんか見つからなかった」

「うん……」

「海にでも行こうか」

ウインカーを点滅させ、ハンドルを切りながらカスガが言った。

秋の海は曇り空のせいかどんより沈んで見えた。人影も全くない。

「結局さ、蔵を漁っても、家系図を調べても思わしいものは出てこなかった」

「そう」

「シギがまた下宿したって聞いた？」

「うん。メールが来た」

ぼつぼつ話しながら、砂浜に腰を下ろす。

「ぼくは大学に戻ることにしたよ。教授も歓迎してくれたしさ」

「そう」

「リウヒはどうするの？」

何も考えていないと首を振った。

会話はそこで止まった。心なしか淋しげな波の音だけが響く。

「リウヒさ」

横を向くと、膝に埋もれるようにして、海を眺めている幼馴染を見た。

「君だって分かっているだろう。歴史が全て真実とは限らないってこと。ハツキは、もしかしたらジンの王に利用されていたのかもしれない。案外、幸せだったのかもしれない」

「ヤン・チャオに殺されたことが？」

カスガは口をつぐんだ。

「すごく優しい子だったんだ」

近くにあった貝殻を拾って、いじりながらリウヒが言った。

「小さな頃から疎外感を感じていて、寂しかったんだよ。もっと話をきいてあげればよかった」

ぼろぼろと泣き出した。

「わたしが旅にでなければ、あの商家にバイトにいかなければ、あの子に会わなければ、あんなことにはならなかったのに……。ハツキを知らない人たちから、あんな糞味噌に書かれることもなかったのに」

「大丈夫だよ。きつと転生して、どこかで元気に暮らしているだろう」

藍色の頭を引き寄せて、慰めるように撫でる。

「会いたいな」

わたしを覚えてくれているかな。

しばらく海を眺めて静かに泣いていたリウヒが、顔を上げた。

「ありがとう、カスガ。少し楽になった」

照れたように泣き笑いの顔になった。

「良かった。スザクでご飯でも食べて帰ろうか」

「うん」

ポケットから車のキーを取り出す。それを見た瞬間、リウヒが大声を上げた。

「ああっ！」

「えっ！ 何っ？ どうしたの？」

真っ青になって、キーを凝視している。

まさか、運転したいとか言い出すんじゃないだろうな。発進したとたんに死ぬぞ、きつと。

「カスガ、カスガ。この、これ、これって……！」

「車の力ギだけど」

「じゃなくて、このキーホルダーって……」

「ああ、うちの親父って昔から、なんかこういうデザインが好きらしくって。ケータイにもこんな、シヤラシヤラしたのが付いているんだ」

銀色で三連の大小の輪が連なっており、細長い棒状の飾りと小さな鈴がついている。なんの変哲もない、ただのアクセサリーだ。不満を言えば、シヤラシヤラしすぎて邪魔で仕方がない。

「えっ？ でもいやいや、ええ？」

「どうしたの、リウヒ。さっきからおかしいよ」

リウヒは小さく震えながら、カスガの腕につかまってキーを見ている。

「あのさ……。前世で持っていた物も受け継がれるのかな……」

「それはさすがにないんじゃないか。でも、思い入れの深い物なら、生まれ変わっても執着するかもね」

「カスガあ……。わたし、駄目だ……」

今度は、子供のようにしゃっくりをあげて泣き出した。薄い肩が激しく震える。

「ああ、もう泣きやんだと思ったら、またおお泣きしだして……。顔が腫れるよ」

雨でも降り出しそうな空の下、カスガは困りきって、藍色の髪をワシワシといつまでも撫でていた。

リウヒはアパートの扉の前で、ため息をついて髪をかきあげた。この扉の向こうには、シギがいる。でも怖くて呼び鈴が押せない。別れを告げたのは自分なのだ。半年も前に。エロ河童のことだもの、新しい彼女と一緒に仲良く過ごしているのっていない。

わたしはなんでここに来たのかな。謝りにきたんでしょう。例え許してもらえなくても。

外に面している廊下はひんやりと寒かった。コートの襟を掻き合わせ、数歩下がって手すりに凭れた。

ハヅキは、カスガの父に生まれ変わっていた。幸せに年をとって、柔和な顔をしたおじさんは、瞳の色も、髪の毛もハヅキと一緒にだった。が、記憶までは引き継がれていなかった。それでいいと思う。カスガの父は、祖国を売った悪人の前世だったと知ったら、シヨックを受けるに違いない。だから何も言わなかった。

「リウヒちゃんが、うちに遊びに来るなんて久しぶりだな」

呑気に茶を啜りながら笑った。

「ゆっくりしていきなさいね」

菓子をだしながらおばさんも笑った。

わたしは一千年後に帰ってきたのだ。今更、ハヅキの運命を変えることはできない。でも、ハヅキはハヅキなりの葛藤や考えがあったはずだ。それを知りたいと考えてカスガと共に、大学のゴリラそっくりの教授の下についている。

古代語を読める能力を重宝されて、忙しい日々を送っていた。
父と母には、全てを話した。

「一千年前のティエンランに行っていたの」

都で暮らしたこと、三人で旅をしたこと、セイリュウケ原の戦。民の歓声、静かに頭を下げた王女、濃く青かった空。

「初めてあの王女をすごいと思った。ありがとう、お父さん、お母さん。わたしにリウヒの名前をつけてくれて」

父と母は信じてくれた。そして泣いた。

扉の向こうから物音が聞こえた。体が硬直する。とりあえず隠れようとした瞬間に、扉が開いた。

「あ……」

銜え煙草をしたシギが、目を見開いてこちらを凝視している。戸っ手に手をかけたまま、動かない。リウヒも動けなかった。

「お前……」

逃げようとしたリウヒの手を、シギが掴んで乱暴に引き寄せた。

「何で逃げんだよ！」

「ごめんなさい、ごめんなさい！　ちょっと心の準備ができてなくて、シギが女の人と一緒にいたら嫌だし、許してもらえないのも分かっていたし、でもわたしが悪いんだし……！」

パニックになって喚いていたリウヒの口は、シギの唇で塞がれた。

「ああ、そうだ。お前が悪い」

噛み付くようなキスは、煙草の苦い味がした。

「おれがどんな気持ちだったか、全然考えてなかっただろう」

リウヒを離さずに扉を閉める。

「どれだけ待ったと思っているんだ」

唇を離して、上を向けられた。シギの目は強く真っ直ぐにリウヒを射抜いている。

「いいか、次は無いからな。二度と離さねえぞ」

「ごめん……」

息をするのも苦しいほど抱きしめられた。その胸の中でリウヒは涙

を流した。申し訳なさと、嬉しさがこみあげて心が擦れる。

「本当にごめんね」

二人の足元で、吸いかけの煙草が不貞腐れたように紫煙をくゆらせていた。

あれから二年が経った。

シギは大学に戻らずに、つてを頼って貿易関係の会社に就職した。リウヒはカスガと一緒に、大学院でティエンランの研究をしている。三人の関係は相変わらずだ。所構わずリウヒといちゃつき、カスガにバカップルと連呼された。そしてセイリュウケ原や、海へと連れまわされたが、あの悲しい声はもう聞こえなかった。

そのカスガに彼女が出来た。教授の娘でいつの間にかくつついていたとリウヒが言った。

「ゴリラの娘はやっぱりゴリラなのか」

「全然。赤毛の可愛い子でさ。なんと高校生」

「は、犯罪者……」

「昔はカスガに大切な人ができるなんて耐えられなかったけど、不思議なもんだね。すごく嬉しいんだ。大人になったのかな」

「お前のここは全く成長しないけどな」

ペラリと胸元を覗くとエロ河童と殴られた。

小雨が降る中、シギは小さなビルの階段を上って、ふと窓ガラスに映る自分を見た。違和感なくなじんでいるスーツ姿に苦笑する。この体に古代の服を着ていた時もあった、と感慨深く思いながら、黒い扉を開けた。

こじんまりとしたバーの奥のボックス席からリウヒが手を振っている。カスガもいる。

お仕事お疲れ。カスガ久しぶりだな。賑やかに挨拶をして席に着い

たときに、リウヒが喜々としながら鞆を探った。

「ね、知ってる？ 愛姫スズの墓が発見されたの」

「ニュースで見たぞ。骨を元にCGで復元してるんだらう？」

「すでに入手済みであります！ 公開は明後日になると思うけどね
ー。じゃーん」

ぺらつと差し出された写真を何気なく見たシギは、飲んでいたビールを盛大に吹いた。

「ちよつと！ なにするの、汚いな！」

「あまりにも美人で、びっくりしたんじゃないの」
前の席に座っているカスガが笑う。

「こ、こ、こ。これ……！」

「だから、愛姫スズだって。年の頃は二十歳前後で、身長百五十センチくらい。ちっちゃい子だったんだね」

「ヤン・チャオが百八十くらいあったから、大小カップルだったんだね」

「んなことは、どうでもいい！ これ、ワカじゃねえか！」

リウヒとカスガは、きょとんと顔を見合わせていたが、誰それ？ と同時に首を傾げた。

「おれが最後にバイトしていた所にいた女の子だよ……」

見間違いないんじゃない、数か月間、毎日顔を合わせていた。ほとんど呆然として写真を見ながら、シギは話し始めた。雇い主の下で働くものだと言っていた、可愛らしい不思議な少女。リウヒを見つけて出してくれた少女。あの子……殺されたんだ……。

「闇者って呼ばれる集団がいたんだ。金次第でどんな依頼もこなす連中だったらしい」

カスガが何故か声を低める。目は血走って、心なしか鼻が広がっていた。

「ジユズも金持ちそうだったな」

「ヤン・チャオは、愛姫スズを失って、自棄になってハヅキの提案に乗ったんだよな。だけど、その愛姫が闇者だったら……目的はな

んだっただ……」

こうしちゃおれないと、カスガは腰を上げた。

「大学に戻る！ お金は立て替えといて！ お休み！」
慌しく出て行ってしまった。

「お前は行かなくていいのかよ」

「そんなひどい顔しているのに、放っておけないよ」

そうか。そんな顔をしているのか、おれは。

「案外、幸せだったかもだよ。この子」

写真を見ながらリウヒが言った。

「ヤン・チャオに笑っちゃうくらい愛されていてさ。滅茶苦茶に仲が良かったみたい。しってる？ ジンでは溺愛している彼女とか奥さんのことを、愛姫っていうんだよ。ヤン・チャオと愛姫スズからきた言葉なんだ」

「……好きな人がいるっていつていたんだ」

その写真は、精巧に出来ているものの、やはり本人の方が数倍可愛い。

「怖くて優しい人だと言っていた。その人とはどうなったんだらう

……」

もしかしたら、ワカは仕事で近づいたターゲットを、本気で好きになっちゃったのかもしれない。それとも、全て演技だったのかもしれない。シギには分からない。が、前者であればいいと思う。

つかの間でも幸せならば。

「この子が闇者で、愛姫の死が仕組まれたものだったら、黒幕はなにが狙いだっただらう。もし、ティエンラン侵略なら、ハヅキだけが原因じゃない……」

しばらく考えるように、一点を見つめていたりウヒは息を吐いて、気分を切り替えたいらしい。甘えたように身を寄せた。その肩に手を回す。

「わたしね」

「うん」

「歴史つてあそこに行くまでは、ただ年表を覚えればいいものだと思っていた。でも、違っただね。色んな人たちのドラマが積み重なってできるものなんだね。調べれば調べるほど面白い。本当は、直接その時代に行ってこの目でみたり、本人にインタビューしたいんだけど。今更になつて、あの時のカスガの気持ちがすごく良く分かる」

「お前の口からそんな言葉がでるとは、思ってもいなかったよ」
クスクスと二人は笑った。

「明日さ、どこか行きたいところあるか」

絡まる指を優しく愛撫しながら聞いた。久しぶりに二人で過ごす休日だ。渡すものもある。

「カスガ曰くの、バカップルコースがいいな」
「了解」

薄暗い店の片隅で、蕩けるようなキスを交わす。うつすらとかかるジャズや、グラスの音や、人々の会話を遠くに聞きながら。

最終章 始まりの物語

遠く眼下に広がる街並みを眺めながら、リウヒは満足げに息を吐いた。

やっぱり、わたしはこの風景が大好きだ。

カスガ曰くのカップルコースとは、シギの車で海にゆき、その後宮廷跡にゆくことだった。初めて三人で、ここに来た時と同じルートだ。シギは海にゆくことを好んだし、リウヒはここから見渡す景色が好きだった。

あの切ない声は、もう聞こえない。王女の声だったとしたら、あの時、どんなにつらく悲しい思いをしたのだろうか。

「冬の景色もいいもんだな」

後ろからリウヒを抱きしめているシギが、柔らかい声で言った。

「雪は降らないけど」

回されている腕に手をかけながら、リウヒも応えた。

「空気が澄んで、山がはっきり見えるね」

「あそことは比べ物にならないけどな」

古代。排気ガスも温暖化もなかった、あの美しくのんびりした世界。帰ってきた時さあ、電気がいきなりついたらびっくりしなかった？ 眩しっ！ みたいな」

「したした。ガスで火が付くのも、感動していた」

「ねえ、シギ。また古代に行きたい？」

「そうだな」

腕が離れて、くるりと体を回された。シギの顔が、若干緊張している。どうしたんだろう。

「おれは、お前が一緒なら、どこでもいい」

そのまま両手を取られた。

「お前に横にいてほしい」

自分の白い手を、シギの大きくてゴツゴツした指の腹が撫でている。

「リウヒを愛しているんだ」

ポケットから小箱を取り出した。包むように、手に握らせる。

「おれと結婚してくれ」

リウヒはぼんやりとそれを見ているだけだった。頭は真っ白だった。

「返事をしろ、馬鹿。ハイかイエスか、どっちだ」

照れて苛立ったようにシギが言う。

「それって、選択の余地ないじゃん……」

声が震えているのが分かった。涙が頬を伝ったのも分かった。

「シギ……」

「ん？」

節くれた指が華奢な指を撫でる。

「シギ」

「なんだよ」

白い手を茶色い指の腹が這ってゆく。

「シギ！」

リウヒがいきなりシギに抱きついた。不意を突かれて、シギはよろめいた。

「ハイに決まっているでしょう！　びつくりさせないでよ！　ああ、もう、嬉しくて心臓が止まるかと思った……！」

「心臓止まるかと思ったのは、おれの方だ！　いきなり飛び付くんじゃねえ！」

顔を掴まれて乱暴に唇が重なった。シギの顔が赤い。きつと自分の顔も赤いだろう。

「今度の休みに、リウヒんちに行くからな」

「いいよ。お父さんとお母さん、シギのこと気に入っているから。わたしもジュンさんに改めて挨拶したいな」

気の若いシギの母親は、自分のことを名前で呼ばれないと、ご機嫌を損ねてしまう。

「まあ、お前の料理の腕は、期待してないから」

「それは大丈夫。わたしと結婚したら、もれなくカスガがついてく

るし」

「カスガの彼女はどうすんだよ」

「それはそれ。これはこれ」

で、一生、バカップルっていわれるのか？

二人は声を上げて笑った。

箱を開けると、小さなダイヤの粒がきらりと光った。シンプルで仰々しくない、全くリウヒ好みの指輪だった。節くれた指がそれを取って、自分の白い手にはめてくれた。

「ありがとう。とってもきれい……」

シギの腕の中で体を回転させて、左手を掲げる。空が夕暮れ時に染まってきたことに気が付いた。

あの濃く青い空をもう一回でいいからみたい。柔らかい朝の陽ざしを感じたい。商家の美しい庭の片隅で、ハヅキや子供たちと物語を読んでいた時のような。

そこまで思い出して、リウヒは小さく笑った。

「どうしたんだよ」

「ベビーシッターをしていた商家でね、よく物語を読んでいたの。

あの可愛い子供たちと」

「うん」

「その中に、わたしたちみたいだなあ、って思ったお話があったの」

「どんな話だったんだ」

「あのね……」

紅色の空を、蛍のような光を瞬かせた飛行機が飛んでゆく。明かりが付き始めた街の中を縫いながら電車が走っている。遠くでクラクシヨンの音がした。

その中を、リウヒの低く澄んだ声が響く。

「洞窟を抜けるとそこは異国でした」

最終章 始まりの物語（後書き）

お気に入りに入れた下さった方々、ポイントつけてくださった方々、そして今まで読んでくださった方々、厚く御礼申し上げます。

大きな謎が継続したままでありますが、今後の展開で解決できると期待したい……。このお話は書いているときがそりやもう楽しくて楽しくて、ティエンランシリーズの中でも一番気に入っているお話でもあります。

改めてもう一度御礼を。

本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9397r/>

時空の果てへ

2011年5月10日12時53分発行